

鹿兒島県史料

忠義公史料

第五卷

題
字

鎌 鹿
田 児
要 島
人 県
事

例言

一本書は、東京大学史料編纂所所蔵本「忠義公史料」（初稿本を含む一九〇冊）を底本とし、これを「鹿児島県史料 忠義公史料」全七巻（当初八巻予定）として刊行するものである。時代の範囲は、安政六年から明治五年に至る十四年間で、第五巻は明治元（慶応四、一八六八）年の内容を収めて刊行した。

一底本の巻ごとに頁を改め、上段の頭初にその表紙を記載し、扉については表紙のわきに註記した。

一明治元年二月・三月・七月の内容の一部と、六月・九月分は、底本が欠本になっている。欠本の部分については、東京大学史料編纂所所蔵の忠義公史料の稿本によって補正し、補正箇所の頭初に稿本の表紙を掲げて、表紙のわきに〔稿本にて補正〕と註記した。

一編集の体裁は、原則として原編者の体裁によったが、一部記載の位置を変更したものもある。また、ほとんどの見出しは原編者が掲げてないので、校訂者が新しく掲げた。

一原本などの現存するときは、努めてそれと対比して原本どおりに校訂し、文末に〔〇〇所蔵本にて校訂〕などと註記した。

一刊行巻ごとに、見出しに一連番号を附した。一つの見出しが数種の内容を含むときは、小番号を文首に附した。

一固有名詞については、できるだけ正字を用いることにした。また、特殊文字のノ（しめ）は、そのまま用いた。

一仮名は、原本または底本の体裁のとおりとした。変体仮名は普通の仮名に改めたが、江だけはそのまま用いた。

一平出・拾頭および闕字は、原本または底本の体裁によった。闕字のときは一字あけにした。

一日記・新聞・会議録および但書は、原則として底本の体裁によった。

一地図および花押は、写真等により原本または底本のとおりにした。

- 一 原註および原編者註（ ）は、できるだけ右脇に移したが、長文のものなどは底本の体裁によった。
- 一 新に註を附するときは、〔 〕を附して、原編者の註と区別した。
- 一 人名および地名については、国内国外を問わず適宜傍註を附した。その際、藩の呼称は維新史附録（維新史料編纂事務局編）により統一した。
- 一 人名等については、原編者の明らかな誤記は、校訂者が訂正した。
- 一 本文には適宜読点を附し、人名（外国人を除く）・地名・品名・数量等の連続するときには、並列点を附した。
- 一 朱書は、その部分を「 」で示し、〔朱〕と傍註を附した。
- 一 頭註および付箋は、「 」で行間に示し、〔頭註〕〔付箋〕と註記した。ただし、後筆のものは削除した。
- 一 欠所部および解読困難な箇所は原編者註である本マ、と虫喰の箇所は、□ で囲み、本マ、・虫喰または〔○○カ〕と傍註を附した。
- 一 文意の通じない字または箇所には、〔ママ〕または〔衍カ〕・〔○○カ〕と傍註を附した。
- 一 点線……の箇所は、底本の体裁によった。
- 一 原編者が目録等に掲げてある記・附記、参照・参考の文字は、第四卷に従って記・参照に統一した。
- 一 重複して掲げてある史料については、これを削除した。
- 一 欄外に掲げた年代は、それぞれの巻の表紙に記載してある年代である。
- 一 見返しに、大久保利謙氏所蔵の西郷隆盛書翰（慶応四年三月二十一日附、本卷三八四頁二二二号）と、島津忠承氏所蔵の大久保利通書翰（慶応三年四月八日附、第四卷四〇三頁四〇六号）を掲げた。

忠義公史料 第五卷 目次

例言

明治元年(戊辰)

一	本藩使者ヲ以テ九州諸藩ニ朝敵征討ノ趣旨ヲ通シテ去就ヲ問フ	正月二十五日	三
二	島津忠義宮中襪免サレタル御礼	正月二十五日	七
三	新天子並太守ノ開運祈禱ノ布達	正月二十五日	七
四	新納嘉藤ニヨリ關山糺ヘ書翰	正月二十五日	一
五	大久保利通大坂遷都ノ建白書	正月二十三日	一
六	島津久光家老小松帯刀ニ天氣ヲ伺ハシム	正月二十六日	四
七	東征布告伝達トシテ藩吏ヲ隣境ヘ派遣ス	正月二十六日	一五
八	西郷隆盛遷都ノ内議ヲ大久保利通ヘ通知ス	正月二十六日	一七
九	富山義直ヨリ下關ノ情勢報告	正月二十六日	一八
一〇	島津忠義親征軍議ノタメニ條城ヘ召サル	正月二十七日	二一
一一	太政官代ヲ二條城ニ移ス	正月二十七日	二一
一二	金穀出納所並ニ會計事務裁判所ヲ二條城内ニ設ク	正月二十七日	二二
一三	大久保利通ヲ総裁局顧問ト為ス	正月二十七日	二二

一四	松平姓ヲ称スル者ハ本姓ニ復セシムルノ沙汰書	正月二十七日	二二
一五	諸藩ノ宮門警衛及征討兵ニ菊章ノ旗・幕等ヲ用ヒシム	正月	二三
一六	島津久光ヨリ岩下・西郷・大久保へ賞詞ヲ授ク	正月二十七日	二四
一七	西郷隆盛パークスノ意見ヲ大久保ニ報ス	正月二十七日	二四
一八	百官ヲ会シテ東征ヲ議決ス	正月二十八日	二六
一九	木場傳内ヨリ西郷隆盛・大久保利通へ書翰	正月二十八日	二七
二〇	征討大將軍嘉彰親王凱旋奏狀	正月二十八日	二七
二一	吉井幸輔参与兼海陸軍務掛ヲ命セラル	正月二十九日	二九
二二	日田・長崎鎮撫出兵ノ引払ヲ上申ス	正月二十九日	二九
二三	澤宣嘉九州鎮撫總督任命ヲ達セラル	正月二十九日	三〇
二四	京都詰藩吏戦亡者遺髪送付ヲ通知ス	正月二十九日	三二
二五	参謀海江田信義ヨリ桑名城処置ニツイテ西郷・大久保へ報告	正月二十九日	三三
二六	備前藩家老日置忠尚兵庫港発砲一条ニ付上申		三五
二七	大久保利通日記	正月二十九日	三八
二八	中原猶助御届書		三九
二九	新納久脩ヨリ島津廣兼・岩下方平へ書翰		四七
三〇	五番隊長野津七左衛門鎮雄日記	正月	四八
三一	種子島時房日記	正月	五八

目次

三二	長州へ伏見警衛仰出	正月	五九
三三	平吉左衛門戦況届書	正月	五九
三四	平吉左衛門御届書ノ写	正月	六二
三五	私領二番鹿籠・知覧隊戦状届書	正月	六五
三六	六番隊戦況届書	正月	六五
三七	山城・伏見之戦参考書	正月三日	六八
三八	鳥羽口戦記	正月	七〇
三九	竹田街道戦記	正月三日	七一
四〇	山城鳥羽・竹田街道之戦参考書	正月三日	七二
四一	山城伏見之戦参考書	正月四日	七三
四二	中原猶介覚書	正月	七六
四三	太政官代へ親臨アルヘキ旨ヲ達セラル	二月朔日	七七
四四	岩倉具視親征ノ策略上申ヲ大久保ニ命ス	二月朔日	七七
四五	小松帯刀島津久光ノ名代トシテ天機ヲ伺フ	二月一日	七八
四六	新納久脩・伊地知貞馨・奈良原繁等帰藩ノ途ニ就ク	二月朔日	七八
四七	太政官へ臨幸アルヘキ旨ノ回覧	二月二日	七八
四八	小松帯刀・大久保利通総裁局顧問任免	二月	七九
四九	西郷隆盛ヨリ大久保利通へ徳川慶喜追討ニツキ書翰	二月二日	七九

五〇	藩庁軍賦役ヨリ東目ニ大隊ノ編制出軍準備ヲ命ス	二月二日	七九
五一	黒田清綱・中原猶介戦状報告	二月	八〇
五二	平運丸乗組人ニ対シ褒賞	二月二日	八三
五三	幕府親征ノ勅書並ニ達書	二月三日	八六
五四	朝廷職制ヲ改ム		八七
五五	元治元年以後ノ警備ト慶應三年十二月以来宿衛徴発ノ兵員及ヒ在藩ノ兵数等ヲ録上ス	二月	八九
五六	島津忠義親征奉命書ヲ奉ル	二月五日	九〇
五七	西郷隆盛ヨリ大久保利通ヘ書翰	二月五日(明治四年丸)	九二
五八	戊辰ノ役戦死傷者ノ人員・葬式料ニ関スル藩庁達示	二月	九三
五九	先鋒総督兼鎮撫使改称ト本藩及ヒ長州等二十二藩ニ出兵ヲ命セラル	二月六日	一〇一
六〇	海陸軍務局ヨリ出張各藩ヘ出兵人数届出ト相応ノ医師ヲ差出シ病院ヲ建テシム	二月	一〇二
六一	島津忠義外五名連署シテ外交ノ規模ヲ宏ニシ各国使臣ノ入朝ヲ建議ス	二月七日	一〇三
六二	本藩以下二十六藩ニ令シテ天領ヲ管理セシム	二月	一〇五
六三	内田政風ヨリ島津伊勢ヘ神戸事件ノ処分ニ付キ書翰	二月七日	一〇八
六四	戦亡者遺族ニ役料跡扶持ヲ給スル藩庁達書	二月	一〇八
六五	本藩並ニ金澤等二十四藩ニ諸藩触頭ヲ命セラル	二月八日	一〇九
六六	戊辰ノ役戦功勅書並ニ下賜金札状奏達靈社建設寄進等ニ関スル書類	二月八日	一〇九

六七	親征行幸ノ期ヲ本月下旬ト定ム	二月九日	一二二
六八	東征大総督及ヒ大総督府参謀等ヲ任命ス	二月九日	一二三
六九	東山道先鋒隊出發期日ト総督本陣ニ会軍ノ期日トノ變更等ノ達示	二月九日	一二四
七〇	宿駅取締・給養並ニ菊御紋使用等ニ付達示	二月九日	一二四
七一	不逞ノ徒ノ檢察ト出訴ヲ許ス	二月	一二七
七二	列藩ニ貢士ヲ出スコトヲ命ス	二月十日	一二七
七三	島津忠義慶喜追討出軍ニ付キ軍令ヲ發ス	二月十日	一一八
七四	東征大総督官ヨリ軍令並ニ廟算書ヲ東海・東山・北陸三道総督ニ頒ツ	二月	一一八
七五	徴士ハ旧藩ト関係無キコトヲ諭告ス	二月十一日	一二一
七六	諸藩ヲ分ツテ大中小三等ト為ス	二月十一日	一二二
七七	諸藩ニ令シ藩士ノ江戸開成所教官ニ任セラレシモノノ姓名ヲ録上セシム	二月十一日	一二九
七八	相良長發・西郷隆盛東征ノ途ニ就キ島津忠義酒饌ヲ下賜ス	二月十一日	一三〇
七九	島津忠義請願書	二月十一日	一三〇
八〇	徳川慶喜恭順ヲ家中ニ諭達		一三一
八一	樺山彦太郎・鮫島元吉ヨリ花山院家理ノ殘党処分ノ件ニツキ桂久武へ報告	二月十一日	一三二
八二	島津忠義参内拝謁	二月十二日	一三五
八三	徳川慶喜東叡山ニ屏居シ王師ノ東下中止ト家名存立ノ周旋ヲ請フ	二月	一三六
八四	廣澤真臣ノ大総督府参謀ヲ罷メ尋テ参与西郷隆盛・林通顯ヲ参謀タラシム	二月	一三八

- 八五 海江田盛時大学校設立意見書 二月十三日 …………… 一三八
- 八六 外国公使朝見ノ議ヲ決シ島津忠義等ノ奏議ヲ公卿諸侯ニ採納スルヲ諭ス 二月 …… 一四一
- 八七 大坂裁判所総督醍醐忠順等外国公使ニ応接シ天皇近日召見ヲ告ク 二月 …………… 一四二
- 八八 大総督熾仁親王征途ニ献言ヲ奉ル 二月十五日 …………… 一四三
- 八九 土佐藩戍兵仏艦デユプレークスノ兵員ト争鬪シ十余人ヲ殺傷ス 二月 …………… 一四四
- 九〇 七日ノ島津忠義外五名ノ連署建言書採納ニ決ス 二月十五日 …………… 一五二
- 九一 議定兼内国事務総督松平慶永等ニ命シテ各国公使朝見ノ事ヲ掌ラシム 二月 …………… 一五六
- 九二 山内豊信父子ニ堺浦争鬪ノ処分ヲ命ス 二月 …………… 一五六
- 九三 議定内国事務総督山内豊信再ヒ解職ヲ請フ 二月 …………… 一六〇
- 九四 外国事務局輔東久世通禧・伊達宗城各国公使ニ復書シ犯罪者ノ処刑ヲ告ク 二月二十二日 一六四
- 九五 去年江戸邸変後諸家へ預ケラレタル藩士婦女子及ヒ佐土原藩士等人名書 二月 …………… 一七一
- 九六 外国公使召見ヲ布告ス 二月十七日 …………… 二〇二
- 九七 外国交際ノ建議採納ヲ藩地ニ報告 二月十七日 …………… 二〇三
- 九八 家老ヨリ御親征ノ達命ヲ藩地ニ報ス 二月十七日 …………… 二〇四
- 九九 各国公使ノ客館ヲ定メ加賀以下六藩兵ニ警護ヲ命ス 二月 …………… 二〇七
- 一〇〇 従征諸軍ノ往来ニ印票ヲ使用セシム 二月 …………… 二〇八
- 一〇一 九州鎮撫総督澤宣嘉部内諸藩ニ令シテ其向背ヲ問フ 二月十八日 …………… 二一〇
- 一〇二 外国事務局ニ命シテ外交ノ聖旨ヲ各国公使ニ伝諭セシム 二月 …………… 二一〇

一〇三	島津忠義等ニ親征扈蹕先隊細川護久等ニ後隊加藤明實等ニ内侍所守衛ヲ命ス	二月	二二一
一〇四	諸職任命	二月	二二六
一〇五	洋銀 <small>メキシコドル</small> ノ価位ヲ定メ我貨幣ト同ク通用セシム	二月	二一九
一〇六	五畿内元代官地貯蔵米切封解除ノ布達	二月二十日	二二〇
一〇七	藩ノ軍艦期日来航遅延ノコトヲ上申ス	二月二十日	二二一
一〇八	藩兵五隊上京ニ付上申	二月二十日	二二二
一〇九	藩内天保通寶通価ヲ定ム	二月二十日	二二三
一一〇	大久保利通日記	二月二十日	二二四
一一一	島津忠義親征行幸ノ供奉ヲ命セラル	二月	二二四
一一二	島津忠義京都守衛ヲ命セラル	二月	二二五
一一三	初メテ太政官日誌ヲ刊刻ス	二月	二二六
一一四	親征役員・兵士・卒ノ人員ヲ上申ス	二月二十二日	二二六
一一五	但馬生野銀山分捕金貳万兩ヲ納付ス	二月二十二日	二二八
一一六	藩長崎守衛士ニ弔慰金ヲ下与ス	二月	二二九
一一七	古金銀ヲ地下相場ニテ通用サセラル	二月	二二九
一一八	苞苴私謁ヲ戒飭セラル	二月二十三日	二二九
一一九	藩士伊地知正治東山道先鋒總督參謀ヲ命セラル	二月二十三日	二三〇
一二〇	言路洞開ノ為メ京師ニ理匭ヲ設置ス	二月	二三二

一一一	諸家ノ阜隸ノ祭賽演劇等ノ地ニ至リ横暴ノ行ヲ為スヲ禁ス	二月	二二二
一一二	島津隼人・町田民部ヲ藩老ニ準セシム	二月二十四日	二二二
一一三	江戸表ヨリ帰崎ノ福島新十郎申立候手續書	二月二十四日	二二三
一一四	親征期日来月五日ト変更ヲ命セラル	二月二十五日	二三四
一一五	親征ノ期ヲ三月五日ト布告シ衆庶ヲ諭サシム	二月	二三五
一一六	諸侯ノ立烏帽子・裏附狩衣等着服ヲ許可ス	二月	二三六
一一七	佛・英・蘭三国公使入京ノ期ヲ布告シ薩藩以下ノ諸藩ニ旅館道路ノ警衛ヲ命ス	二月	二四〇
一一八	藩兵奥羽鎮撫使附属ヲ命セラル	二月二十七日	二四八
一一九	外国公使上京参内ニ付諸藩警衛取締等ノケ条ヲ達ス	二月二十七日	二五〇
一二〇	外国人上京ニ付道饗祭ヲ修行セシム	二月二十七日	二五一
一二一	軍防事務局判事吉井友實ニ命シ権判事大村益次郎ト共ニ軍制ヲ議セシム	二月	二五三
一二二	参与兼親兵掛鷲尾隆聚警衛兵ヲ命セラル	二月	二五三
一二三	在京諸侯ヲ召見シテ詔諭シ宴ヲ賜フ	二月	二五四
一二四	島津忠義・久光父子ノ勲勞ヲ賞シ物ヲ賜フ	二月二十八日	二五五
一二五	軍令ヲ宣布セラル	二月	二五七
一二六	上申稟請ノ書ヲ弁事局ニ進啓セシム	二月	二五九
一二七	佛・英・蘭公使参内ノ旨通達セラル	二月二十八日	二五九
一二八	佛国公使入京ニ付警衛ニ混雑ナカラシム	二月二十八日	二六〇

目次

一三九	薩・藝・長三藩ニ外国公使朝参ノ際ノ三門守衛ヲ命ス	二月二十九日	二六一
一四〇	奥羽鎮撫使発途ノ日延期ヲ命ス	二月二十九日	二六一
一四一	藩内所役々へ取締心得ヲ達ス	二月二十九日	二六三
一四二	タバコ商人國分本町永山仁兵衛聞書	二月二十九日	二六三
一四三	佛・蘭公使等参朝シ拜謁ヲ賜ハル	二月晦日	二六四
一四四	英国公使刺客ノタメ参朝ヲ果サス	二月晦日	二六六
一四五	晃親王以下英国公使ヲ慰問ス	二月晦日	二七四
一四六	英公使乱妨犯人搜索ト警護ヲ諸藩ニ命ス	二月	二七五
一四七	大山綱良奥羽鎮撫使参謀ヲ命セラル	二月晦日	二七六
一四八	小松帯刀参与職・総裁局顧問ヲ命セラル	二月	二七七
一四九	藩六組ヲ廃シ何番方限ト改称等ヲ達ス	二月晦日	二七七
一五〇	家老座書役其外諸座書役ヲ旧名ノ如ク筆者ト改称スルコトヲ達ス	二月晦日	二七八
一五一	島津久光藩政変革ノ要領三ヶ条ヲ訓示ス	二月	二七八
一五二	陸軍所勤ノ諸役人並書役小役人ノ式拾五歳迄ノ勤続ヲ達ス	二月	二七九
一五三	作事奉行以下奉行頭人ハ軍国ノ世態ヲ存シ書役方ノ事ヲ兼勤スル旨ヲ達ス	二月	二七九
一五四	藩士継目養子・定式忌服・養子違変等ノ心得ヲ達ス	二月	二七九
一五五	市來四郎藩政ニ関スル時事ヲ建言ス	二月	二八〇
一五六	暗殺ノ禁ヲ申ネテ令ス	三月朔日	二九六

一五七	島津忠義恩賜ノ御礼ヲ上申ス	三月一日	二九六
一五八	奥羽鎮撫使附屬ノ隊員ヘ錦ノ袖印ヲ下付セラル	三月二日	二九七
一五九	親征行幸ノ延引ヲ令セラル	三月二日	二九七
一六〇	英国公使参朝ニ付御門警固ヲ令セラル	三月二日	二九八
一六一	英国公使参朝ニヨリ衣冠着用ヲ令セラル	三月二日	二九九
一六二	英国公使参朝ニヨリ百官ノ上巳参賀ヲ停ム	三月二日	三〇〇
一六三	佛国公使滞留往来ノ警衛ヲ令セラル	三月二日	三〇〇
一六四	英国公使参朝ノ節忠義参内陪列ス	三月三日	三〇一
一六五	佛国公使参内ニヨリ警衛ヲ令セラル	三月	三〇二
一六六	佛国公使下坂ノコトヲ上申ス	三月三日	三〇三
一六七	朝廷ヨリ慰勞トシテ下賜金ヲ賜ハル	三月三日	三〇四
一六八	二條城太政官代ヘノ行幸ヲ達ス	三月四日	三〇四
一六九	行幸供奉官人随員手当金ノ制限ヲ達ス		三〇五
一七〇	寺島宗則当分制度事務局判事ヲ命セラル		三〇七
一七一	銅銭ノ価位ヲ定ム	三月	三〇七
一七二	御一門・私領持以下ニ家風節約奉公ニ勤ムヘキコトヲ達ス	三月五日	三〇七
一七三	諸口上覚	三月	三〇八
一七四	九州鎮撫總督澤宣嘉ニ命シテ西海道ヲ統轄セシム		三一一

目次

一七五	九州元代官地ヲ調査シ鎮撫使ニ稟申スヘシト令セラル	三月	三二二
一七六	島津忠義ノ下賜金返上ヲ聽許セサルコトヲ達ス	三月	三二二
一七七	諸藩ニ令シテ士庶ノ遁逃ヲ禁シ言路ヲ開キ民情ヲ通セシメラル	三月七日	三一四
一七八	藩老天草島管轄ヲ肥後藩へ引渡スヘキコトヲ達ス	三月七日	三一四
一七九	太政官代行幸警固ノ心得ヲ達ス	三月八日	三一五
一八〇	島津忠義行幸ニ付太政官代へ参向ヲ命セラル	三月八日	三一五
一八一	島津廣兼太政官代弁事務局等ヨリノ達書ヲ報告ス	三月八日	三一六
一八二	太政官代ニ臨ミ蝦夷開拓ヲ諮詢ス	三月	三一八
一八三	薩藩鷲尾隆聚邸ノ守衛ヲ辞ス	三月九日	三二〇
一八四	浪士ノ私ニ貴紳ニ託シテ其附屬兵ト称スルヲ禁ス	三月十日	三二一
一八五	神武天皇祭使ヲ畝傍陵ニ遣シ幣帛ヲ奉ス	三月十一日	三二一
一八六	在京諸侯ノ官位叙任ノ年月日ヲ録上セシム	三月十一日	三二三
一八七	島津忠義先帝御陵参拜ヲ聽サル	三月十二日	三二四
一八八	藩士中原猶介海軍参謀ヲ命セラル	三月十二日	三二五
一八九	祠官ノ神祇官ニ属スルコトヲ達ス	三月	三二五
一九〇	別当・社僧ノ類蕃髪セシム	三月十三日	三二六
一九一	薩藩蒸氣船兵庫港ヨリ関東へ廻航ヲ命ス	三月十三日	三二六
一九二	本藩大坂市中巡邏ヲ命セラル	三月十三日	三二八

- 一九三 天皇紫宸殿ニ御シ天神地祇ヲ祭り国是五章ヲ約定シ公卿・諸侯ニ誓約セシム 三月十日
四日……………三三二
- 一九四 島津忠義誓約ノ趣旨ヲ述ヘ誠実輔翼スヘキコトヲ諭示ス 三月……………三六五
- 一九五 岩倉副總裁御親征日限ヲ小松帶刀外二名ヘ通牒ス 三月十四日……………三六七
- 一九六 藩船関東回航ノ命ヲ奉承シタルコトヲ上申ス 三月十四日……………三六七
- 一九七 英国公使兇徒出現ノ禁戒ヲ請ヒ禁令ヲ要地ニ揭示ス 三月……………三六八
- 一九八 東駕発京ノ期日及ヒ海軍ヲ大坂海ニ闕スルヲ布告シ親征ノ旨趣ヲ申諭ス 三月十五日……………三七〇
- 一九九 禁令五条ヲ海内ニ頒チ旧幕府ノ掲榜ヲ撤ス 三月……………三七一
- 二〇〇 藩士税所長蔵大坂裁判所御用ヲ命セラル 三月十五日……………三七三
- 二〇一 蓑田傳兵衛ヨリ小松帶刀ヘ書翰 三月十五日……………三七四
- 二〇二 島津忠義御用ノ廉ヲ以參内スヘキ旨達セラル 三月十六日……………三七五
- 二〇三 行幸ノ行列及ヒ道筋次第心得方等回達ス 三月……………三七五
- 二〇四 島津忠義親征行幸中八幡一泊ノ警衛ヲ命セラル 三月十七日……………三七七
- 二〇五 島津忠義親征行幸中京都守護ノ命ヲ拝ス 三月十七日……………三七八
- 二〇六 島津忠義親征行幸中石清水一泊ノ警衛ヲ免セラル 三月十八日……………三八〇
- 二〇七 大総督府參謀西郷隆盛徳川慶喜謝罪ノ條款ヲ奏シソノ大項ヲ許サル 三月十九日……………三八一
- 二〇八 行幸出輦ニ付在京諸侯ニ參内天機伺ヲ命セラル……………三八二
- 二〇九 野州梁田駅ノ戦功ニ対シ感状及ヒ賞詞ヲ賜ハル 三月十九日……………三八三

目次

二二〇	封土拾万石ノ返献ニ及ハサル旨ノ指令ヲ受ク	三月	三八三
二二一	車駕京師ヲ発ス	三月	三八四
二二二	西郷隆盛書ヲ大久保利通ニ贈リテ出兵ヲ促ス	三月二十一日	三八四
二二三	車駕守口駅ニ次ス	三月二十二日	三八五
二二四	本藩姫路城ノ監守ヲ命セラレ姫路藩臣ヨリ誓書及ヒ歎願書ヲ差出ス	三月二十二日	三八五
二二五	副総裁岩倉具視自書ヲ以諸局ノ督輔以下ヲ督励ス	三月二十二日	三八七
二二六	車駕大坂ニ至リ本願寺ヲ行在所ト為シ柵門ヲ警衛セシム	三月	三八八
二二七	申ネテ大赦ノ節目ヲ勅諭ス	三月	三八八
二二八	竹田街道東洞院近辺ノ巡邏ヲ高松藩ニ命ス	三月二十三日	三八九
二二九	島津忠義夫人戦亡者ヲ弔慰ス	三月二十三日	三八九
二三〇	議定・参与及ヒ親王・公卿・諸侯行在所ニ朝ス	三月	三九一
二三一	海軍天覧ノ為天保山ヘ行幸ノ旨ヲ達ス	三月	三九一
二三二	島津忠義病ニヨリ蝦夷開拓諮問ノ参内ヲ辞ス	三月二十四日	三九一
二三三	島津忠義参内ノ時ノ下馬所ノ指令ヲ伺ハシム	三月二十四日	三九一
二三四	内田政風ヲシテ警衛区域内外出火ノ際心得方ノ指令ヲ受ケシム	三月	三九二
二三五	参与顧問小松清廉・後藤元暉ヲシテ外国事務局判事ヲ兼ネシム	三月	三九二
二三六	東国ノ形勢ニヨリテハ鬱興東征セントス	三月	三九三
二三七	副総裁岩倉具視議定・参与ヲ会シテ再ヒ蝦夷地開拓ノ事宜三条ヲ策問ス	三月	三九三

二二八	車駕天保山ニ幸シテ海軍ヲ閲ス	三月二十六日	三九八
二二九	島津忠義五ヶ条誓文ノ誓約ニ奉答シ戮力輔翼スヘキコトヲ訓示ス	三月二十六日	四〇五
二三〇	藩老御親征行幸ノ件ヲ藩地ニ報ス	三月二十六日	四〇七
二三一	藩老近日来下附ノ公布諸件ヲ藩地ニ報ス	三月二十六日	四〇八
二三二	島津忠義大坂着御伺トシテ参内ス	三月二十七日	四〇九
二三三	天草島警備藩兵糧食処分ノ件ヲ稟申ス	三月二十七日	四一〇
二三四	在京ノ諸侯ニ令シテ鹵簿ノ数ヲ録上セシム	三月二十八日	四一〇
二三五	諸標記等ニ禁裏ノ字ヲ冒シ及ヒ菊章ヲ濫用スルヲ禁ス	三月	四一〇
二三六	貢士ハ藩主・朝官奉職スル者ハ勝手タルヘキヲ令ス	三月	四一一
二三七	本藩兵山陰道鎮撫使警衛ヲ免セラル	三月二十九日	四一一
二三八	本藩鹵簿ノ数ヲ録上ス	三月晦日	四一二
二三九	元徳川領肥前松浦郡内ノ炭礦支配ヲ本藩ニ命セラレタキコトヲ稟申ス	三月	四一四
二四〇	松平ノ苗字ヲ止メ島津ト復称スル旨ヲ藩内ニ達ス	三月	四一五
二四一	封土十萬石返献願稟申ノ旨ヲ藩内ニ達ス	三月	四一五
二四二	藩庁人別調書式改定ヲ達ス	三月	四一六
二四三	藩不急ノ役場ヲ廢シ繁用ヲ省キ簡易取扱方ヲ達ス	三月	四一六
二四四	藩内借地讓受渡願等ノ手續ヲ達ス	三月	四一六
二四五	藩地ニ諸人惣髮・乱髮勝手タルヘキ記事	三月	四一七

二四六	土方久元日記	三月	四一七
二四七	大久保利通日記	三月十八日	四一七
二四八	強盜ノ類ニ付キ上之京町年寄へ達	三月二十七日	四一七
二四九	土方久元日記	三月二十七日	四一八
二五〇	大坂行幸供奉衣体ニ付キ回達	三月	四一八
二五一	土方久元日記	三月九日	四一八
二五二	大久保利通日記	三月十日	四一八
二五三	土方久元日記	三月十日	四一九
二五四	大坂行幸供奉ニ付キ達	三月	四一九
二五五	土方久元日記	三月二十八日	四一九
二五六	大久保利通日記	三月	四一九
二五七	土方久元日記	三月	四二〇
二五八	英国公使襲撃ノ兇徒ヲ処刑ス	三月	四二〇
二五九	平田宗高日記	四二六
二六〇	土方久元日記	三月七日	四二七
二六一	外国事務局書翰	三月五日	四二七
二六二	英国公使襲撃事件ニ関スル中外新聞記事	四二七
二六三	横濱新聞抄訳堺事件	三月五日	四二八

二六四	開港延引ノ報告	三月五日	四三〇
二六五	横濱新聞紙ヘラルドノ訳	閏四月	四三〇
二六六	宿駅役所ヲ京都ニ置キ諸道駅通ノ事ヲ掌ラシム	四月朔日	四三一
二六七	親征行幸中節朔ノ礼ニ及ハサルコトヲ令ス	四月一日	四三六
二六八	本藩兵京都庚申口ノ操練ヲ島津忠義列卿侯ト俱ニ覽ル	四月朔日	四三七
二六九	大久保利通顧問詰所勤務ヲ命セラル	四月二日	四三七
二七〇	各藩兵ヲ城内ニ集メ操練天覽ヲ達ス		四三八
二七一	軍艦春日丸上海ニ於テ修覆ノ為英國ノ旗章ヲ仮用センコトヲ請ヒ許サル	四月三日	四三八
二七二	伝駅ニ令シ公卿・諸侯・吏人等ノ陪隸ノ横暴ヲ為スモノアレハ之ヲ訴ヘシム	四月	四三九
二七三	行在所参候ノ諸侯ニ雇從人員ノ制限ヲ令ス	四月	四三九
二七四	操練天覽ノ順序ヲ達ス	四月四日	四四〇
二七五	太政官日誌刊行頒布ノ旨趣ヲ公示ス	四月	四四一
二七六	島津忠義・久光ノ檄ニ応シテ九州諸藩勤王ニナキヲ誓約セル答書ヲ上ル		四四二
二七七	藩士海江田彦之丞外一名内国事務局雇ヲ命セラル	四月五日	四五二
二七八	長崎裁判所各国ニ属スル支那人我ニ対シ法ヲ犯サハ国律ニ処スルコトヲ通牒ス	四月	四五二
九日			四五三
二七九	幕府目付黒川嘉兵衛ヲ津藩ニ預ケ後命ヲ俟タシム	二月	四五四
二八〇	肥前邸ヘ参伺公卿・諸侯等参集ス	四月五日	四五九

目次

二八一	諸藩兵ノ操練ヲ大坂城ニ天覽ス	四月六日	四五九
二八二	諸侯ニ令シテ其家眷及ヒ臣隸ノ江戸ニ住スルモノヲ封地ニ移ス	四月	四六二
二八三	諸侯以下ニ令シ其封邑及ヒ旧幕府預地ノ地籍・租額ヲ録上セシム	四月七日	四六四
二八四	出軍人旅行心得ヲ達セラル	四月八日	五〇七
二八五	棚倉藩別邑倉廩ノ拆符ヲ許サル	四月	五〇八
二八六	東久世通禧ヲ欧米各国ニ派遣セシム	四月	五〇九
二八七	大久保利通ニ拜謁ヲ賜ヒ京都ノ事情ヲ奏上セシム	四月九日	五一〇
二八八	私ニ仏体ヲ破毀スルヲ禁シ其措置ヲ稟申スルヲ命セラル	四月	五一一
二八九	銅会所ヲ大坂ニ置キ人民ノ私ニ之ヲ販売スルヲ禁ス	四月	五一三
二九〇	在京諸藩兵ニ日時ヲ定メ操練ヲ行ハシム	四月十日	五一六
二九一	本藩京都守衛方限ヲ稟ス	四月十日	五一八
二九二	行在所ニ於テ文ヲ講シ武ヲ演スルヲ天覽アラセラル	四月十一日	五二二
二九三	大政更張ノ朝旨ヲ奉シテ旧習ヲ釐革シ人才ヲ撰擢シテ治績ヲ奏スヘキヲ告諭ス	四月	五二三
二九四	江戸在留藩臣引払殘留ノモノナキ旨ヲ稟ス	四月十二日	五二四
二九五	諸侯ノ襲封・叙任等ノ閱歴ヲ録上セシム	四月十三日	五二四
二九六	在京ノ諸侯既ニ誓約ニ就キテ官守ナキモノハ帰藩シテ後命ヲ俟タシム	四月	五二五
二九七	島津忠義勅書拜戴御物下賜アリシ旨ヲ達シ藩士ノ賀詞ヲ上申セシム	四月十三日	五二七
二九八	島津忠義大坂行在所ニ參内天氣ヲ伺フ	四月十四日	五三〇

- 二九九 藩兵奥羽出兵ヲ命セラル 四月十四日 五三一
- 三〇〇 島津忠義北陸道ノ出兵ヲ命セラル 四月十四日 五三一
- 三〇一 供奉ノ公卿・諸侯へ親征供奉ノ条目ヲ命セラル 四月 五三三
- 三〇二 本藩御台所御門守衛ヲ免セラル 四月十五日 五三四
- 三〇三 本藩大坂巡邏ヲ免セラル 四月十五日 五三五
- 三〇四 藩會計方掛ヲ達ス 四月 五三六
- 三〇五 扈蹕ノ諸藩ニ令シ日ヲ刻シテ其兵ヲ練閱セシム 五三七
- 三〇六 講筵ヲ行在所ニ開ク 四月 五三八
- 三〇七 車駕座摩社ニ幸シ更ニ東本願寺掛所ニテ福羽文三郎ニ古事記ヲ講セシム 四月十七日 五三九
- 三〇八 政令伝達ノ条規ヲ定ム 四月 五三九
- 三〇九 東久世通禧外国事務受渡終了ヲ報ス 四月十七日 五四〇
- 三一〇 横濱裁判所総督東久世中将神奈川奉行及ヒ横須賀製鉄所ヲ収ム 四月 五四一
- 三一一 岩下方平等楠公社ヲ兵庫ニ造立スルコトヲ建言ス 五四二
- 三一二 勅シテ楠正成ノ祠堂ヲ湊川ニ營シ正行以下ヲ配祀セシム 四月二十一日 五四三
- 三一三 朝政御一新ニ付キ諸藩政令ヲ大変革スヘキコトヲ命ス 四月二十一日 五四五
- 三一四 大坂銅会所召建ヲ命ス 四月 五四六
- 三一五 推歩並頒曆等執行ノタメ水間喜藤太上京ヲ命セラル 四月 五四七
- 三一六 大坂裁判所へ沙汰書 四月 五四九

三二七	長崎裁判所総督澤宣嘉管内天主教徒ノ処分ヲ稟請ス	四月	五四九
三二八	奥羽鎮撫応援ノ為出軍命セラル	四月	五五七
三二九	米国人我國民ヲ傭ヒ布哇島ヘ送ル文票ヲ請フ許否ノ往復書数件	四月	五六〇
三三〇	浪華元陸軍所ニテ調練ヲ觀覽ス	四月十四日	五七一
三三一	新潟・府中 ^但 馬 ^二 裁判所ヲ置キ各総督ヲ任命ス	四月	五七三
三三二	徳川慶喜ノ処分及継嗣・秩禄ノ議ヲ公卿・諸侯等ニ下ス	四月二十五日	五七四
三三三	家老新納久脩諸役改唱ヲ達ス	四月	五七九
三三四	京都本宮報告	四月	五七九
三三五	岩井・宇都宮戦死傷者報告	四月二十九日	五八一
三三六	黒田了介北陸道鎮撫総督参謀仰付ラル	四月二十九日	五八一
三三七	木戸孝允ヨリ大久保一蔵ヘ書翰	四月二十九日	五八二
三三八	鍋島直大・東久世通禧ヨリ伊達宗城ヘ書翰	四月二十八日	五八四
三三九	井關盛良外五名外国官ヨリ小松帯刀ヘ書翰	四月二十八日	五八四
三三〇	大総督府ニ令シ旧幕府ノ凶籍ヲ収メラル	四月二十四日	五八五
三三一	佐渡国裁判所及ヒ三河国裁判所総督ヲ任命ス	四月二十四日	五八六
三三二	大久保利通日記	四月二十三日	五八七
三三三	松平容保討伐ノ為薩・長以下ノ諸藩ニ援兵ヲ出サシム	四月十四日	五八七
三三四	旧幕府ノ要人稲葉正邦以下五名上疏シテ罪ヲ謝ス	四月	五八七

- 三三五 宮・堂上方ノ子弟ヲ度シテ僧ト為スヲ禁ス 四月……………五八九
- 三三六 中外新聞節録 閏四月……………五九〇
- 三三七 結城戦況 四月……………五九〇
- 三三八 仙臺藩ニ命シ米斛ヲ予備シテ大総督ノ需用ニ供セシム 四月……………五九一
- 三三九 長府藩ニ佐渡鎮台随從ヲ命ス 四月……………五九一
- 三四〇 藩庁通達 四月……………五九三
- 三四一 大垣・松代其外ノ藩へ松平肥後等ノ賊徒追討ヲ命ス 四月二十九日……………五九三
- 三四二 新納久脩申渡書 四月……………五九四
- 三四三 フランス船指揮官及ヒイギリス使節館掛行在所へ参内ス 四月……………五九四
- 三四四 滯京五旬ヲコユルモノハ帰藩ノ上政治ヲ改正シ備ヲ嚴ニセシム 閏四月十四日……………五九五
- 三四五 外国人ヲ傷害シタル犯人ノ太政官手配書 閏四月……………五九五
- 三四六 村高帳差出ニツキ藩家老往復書翰 四月……………五九六
- 三四七 小御所ニ於テ三職・公卿・諸侯以下ニ酒饌ヲ賜ル 閏四月……………五九七
- 三四八 逆徒ノ造言ニ惑ヒ大義ヲ忘失ナキ様戒諭ス 閏四月……………五九八
- 三四九 宮・公卿・諸侯及ヒ社寺等領地受封ノ判物ヲ差出サス 閏四月……………五九八
- 三五〇 堀田正頌謹慎ヲ命セラル 閏四月……………五九九
- 三五一 桂久武谷山地頭専任ヲ命セラル 閏四月……………五九九
- 三五二 再ヒ小御所ニ於テ三職・公卿・諸侯以下ニ酒饌ヲ賜ル 閏四月……………五九九

三五三	中山忠能右兵衛督ヲ免セラル	閏四月二十日	五九九
三五四	皇居ヲ二條城ニ造営スルヲ以テ仮ニ太政官代ヲ禁中ニ移ス	閏四月二十一日	六〇〇
三五五	制度規則ヲ改メテ諸職任用ヲ命セラル	閏四月二十一日	六〇〇
三五六	三十歳未滿ノ者小番ヲ免シテ勤学セシム	閏四月二十一日	六〇〇
三五七	小松帶刀從四位下ニ叙セラル	閏四月二十一日	六〇〇
三五八	小松帶刀大船ノ管轄ヲ命セラル	閏四月	六〇一
三五九	徳川慶喜ノ処分ニ付キ諸侯答議ス	閏四月	六〇一
三六〇	車駕京都ニ凱旋ス	閏四月	六〇三
三六一	島津廣兼ヨリ島津久治外家老へ宇都宮諸所ノ戦状ヲ報ス	閏四月八日	六〇三
三六二	新納嘉藤二ヨリ野州戦状ヲ報ス	閏四月八日	六〇四
三六三	家老町田久憲野州戦状ヲ藩内ニ通達ス	閏四月	六〇五
三六四	大久保利通ヨリ蓑田傳兵衛へ書翰	閏四月八日	六〇五
三六五	川上十郎ヨリ家人へ戦状ヲ報ス	閏四月八日	六〇六
三六六	未誓約ノ在京諸侯へ参朝ヲ命ス	閏四月九日	六〇七
三六七	在国・在邑ノ諸侯ハ重臣ヲ以テ天氣ヲ伺フヘキヲ命ス	閏四月	六〇七
三六八	副総裁兼議定三條實美ニ関東監察使ヲ兼ネシム	閏四月	六〇七
三六九	萬里小路通房ニ関東監察副使ヲ命ス	閏四月	六〇八
三七〇	土方久元日記	閏四月十日	六〇八

三七一	酒井忠美北蝦夷開拓ヲ従前通仰付ケラル	四月	六〇八
三七二	酒井家臣ヨリ箱館裁判所御用金献上ノ旨ヲ申請ス	閏四月十三日	六〇九
三七三	大坂市中極老者へ賑恤達書	閏四月	六〇九
三七四	大坂裁判所ニ命シテ衆庶ヲ安撫シ病院ヲ創設セシム	閏四月	六一〇
三七五	還幸ニ付イテノ仰出	閏四月	六一〇
三七六	遠近新聞節録	閏四月	六一一
三七七	春嶽私記	閏四月十日	六一二
三七八	大久保利通建白書	閏四月	六一四
三七九	福岡藤次建言	閏四月十二日	六一五
三八〇	参与木戸孝允ヲ長崎ニ遣シテ浦上村ノキリスト教徒ヲ処分セシム	閏四月六日	六一六
三八一	毛利家記	六一四
三八二	箱館裁判所副総督清水谷公考ヲ総督ト為シ蝦夷全島ヲ管セシム	閏四月	六一七
三八三	還幸ノ沙汰書	閏四月	六一八
三八四	陸軍編制ニ付キ達ス	閏四月	六一九
三八五	還幸ニ付キ沙汰書	閏四月	六二九
三八六	金札製造ヲ仰出サル	閏四月	六三〇
三八七	阿片煙草ノ売買並吞用ヲ禁ス	閏四月	六三一
三八八	淀藩主稻葉正邦ノ謹慎ヲ釈ス	閏四月	六三一

三八九	加納藩主永井尚服へ達書	閏四月	六三二
三九〇	池田慶徳・池田章政へ達書写	閏四月	六三一
三九一	唐津藩主小笠原長國へ達書写	閏四月	六三三
三九二	長州藩世子毛利元徳へ達書写	閏四月	六三四
三九三	藝州藩世子淺野茂勲へ達書写	閏四月	六三四
三九四	米澤藩主上杉齊憲へ達書写	閏四月	六三五
三九五	仙臺藩外東北諸藩へ達書写	五月	六三五
三九六	酒井忠篤・水野勝知ノ官位ヲ褫キ藩士ノ入京ヲ禁ス	閏四月	六三六
三九七	高田藩主榑原政敬へ達書	閏四月	六三七
三九八	新發田藩主溝口直正賊徒討伐ノ功ヲ賞ス	閏四月	六三七
三九九	時任清左衛門ヨリ家内中へ書翰	閏四月二十三日	六三八
四〇〇	島津忠義ヨリ英公使パークスへ書翰	閏四月二十五日	六三八
四〇一	道島日記	閏四月五日	六四〇
四〇二	真田信濃守家臣長谷川深美上申書	閏四月五日	六四一
四〇三	彦根藩ヨリ届書之写	閏四月三日	六四二
四〇四	明治元年閏四月九日岩倉具視徳川氏処分ノ草案		六四四
四〇五	大山格之助ヨリ吉井幸輔・大久保一蔵へ書翰	閏四月九日	六四五
四〇六	総督府へ御届書写		六四六

四〇七	中外新聞	閏四月	六四六
四〇八	横濱出版新聞紙ノ抄訳	中外新聞 閏四月	六四八
四〇九	某書翰	中外新聞 閏四月	六四九
四一〇	英国在留ノ友人ヨリ書翰	中外新聞 閏四月	六四九
四一一	佛蘭西在留友人書狀ノ写	中外新聞 閏四月	六五〇
四一二	口上扣遠近新聞	閏四月	六五一
四一三	津田真道上書	閏四月	六五一
四一四	陸奥宗光辞職ヲ請フ書	四月	六五三
四一五	牧野遠江守へ御沙汰書	閏四月十五日	六五四
四一六	青山峯之助申請書	閏四月	六五四
四一七	日本国当今急務五カ条ノ書	中外新聞 四月	六五五
四一八	某詠歌	中外新聞 四月	六五六
四一九	勝海舟ヨリ田安へ書翰	閏四月十三日	六五六
四二〇	大久保利通日記	閏四月	六五七
四二一	海舟日記	閏四月二日	六五八
四二二	大久保利通日記	閏四月	六五八
四二三	秋元禮朝・酒井忠強謹慎ヲ免セラル	四月十三日	六五九
四二四	海舟日記節録	四月七日	六五九

目次

四二五	仁和寺宮箱館裁判所総督被仰出書	四月	六五九
四二六	清水谷侍従・土井能登守箱館裁判所副総督被仰出書	四月	六六〇
四二七	五代才助ヨリ桂右衛門ニ贈ル書	四月十二日	六六〇
四二八	寺泊浦へ布告	……………	六六一
四二九	尾州藩ヨリ届書	閏四月	六六一
四三〇	六番隊監軍宇都宮戦争届書	四月	六六二
四三一	因州藩ヨリ届書ノ写	閏四月	六六四
四三二	長州藩届書之写	閏四月	六六八
四三三	薩州六番隊へ感状	閏四月	六六八
四三四	大村藩届書写	閏四月二十七日	六六九
四三五	淵邊直右衛門戦況ヲ黒田了介ニ報スル書	閏四月二十八日	六七〇
四三六	大垣藩ヨリ届書之写	閏四月十日	六七一
四三七	還幸御沙汰書ニ通	閏四月	六七二
四三八	神仏分離達示	閏四月四日	六七三
四三九	彦根藩關由太郎申達書	閏四月三日	六七四
四四〇	佐土原藩届書写追録	閏四月	六七四
四四一	土州藩届書写	閏四月	六七七
四四二	奥羽鎮撫総督府参謀ヨリ太政官軍防局へノ書状	閏四月	六七七

四四三	仙・米両藩添歎願書	閏四月十一日	六七九
四四四	近藤勇梟首布告	閏四月七日	六八〇
四四五	白川城附近戦況	六八一
四四六	薩・長而藩越後戦争概略	五月朔日	六八三
四四七	越後軍報知	六八八
四四八	田中周藏ヨリ猪俣為右衛門・東郷藤十郎へ書翰	五月朔日	六九〇
四四九	上野戦争本藩戦死傷者届書	五月十六日	六九一
四五〇	薩藩へ御沙汰書	五月	六九二
四五一	生捕者白状並ニ帰順之者譚	五月	六九三
四五二	佐土原藩届書之写	五月	六九三
四五三	某報知書	六九三
四五四	薩藩へ下賜候感状之写	五月	六九五
四五五	薩藩へ下ス感状	五月	六九五
四五六	薩艦乾行丸・長艦丁卯丸届書	五月二十五日	六九六
四五七	上野屯集ノ賊掃討ニツキ達書	五月	六九六
四五八	因州藩届書写	五月十六日	六九七
四五九	西郷吉之助ヨリ大久保一蔵・吉井幸輔へ書翰	五月十日	六九八
四六〇	三條實美本藩ニ諭ス書	五月七日	七〇〇

目次

四六一	輪王寺宮病氣登城云々記事	五月	七〇〇
四六二	上野輪王寺宮へ御沙汰之写	五月三日	七〇一
四六三	薩摩藩届書	五月晦日	七〇一
四六四	種子田左門六番隊長ヲ命ス	五月晦日	七〇一
四六五	各藩之兵隊江御沙汰之写	五月	七〇一
四六六	肥前へ御沙汰	五月	七〇二
四六七	戦士御慰勞之御書付	五月	七〇二
四六八	本藩外三藩へ市外巡邏取締御沙汰書	五月	七〇二
四六九	薩州・長州へ御感状之写	五月	七〇三
四七〇	本藩外二藩へ達セラレシ感状	五月	七〇三
四七一	徳川旗下帰順者朝臣ニ被仰付達書	五月	七〇三
四七二	諸藩閱兵ノ仰出	五月	七〇三
四七三	徳川亀之助へ上京達書	五月	七〇四
四七四	松平確堂ニ徳川亀之助ノ後見ヲ許ス達書	五月	七〇四
四七五	一橋大納言ニ上京達書	五月	七〇四
四七六	田安中納言上京達書	五月	七〇四
四七七	上野輪王寺宮へ御送相成候御書	五月十四日	七〇四
四七八	徳川家達重臣ニ達書	五月三日	七〇五

四七九	匏奄雜談	七〇五
四八〇	岡崎脱藩士戊辰戦争記略	七一〇
四八一	新納刑部ヨリ兵隊上京ノ事ヲ小松帶刀等ニ報ス	六月朔日
四八二	越後長岡在淵邊高照ヨリ京都軍賦役ニ銃砲・彈藥ヲ請求ス	六月朔日
四八三	江戸城内ニ於テ戦死者ノ招魂祭ヲ執行ス	六月二日
四八四	島津忠義・忠寛及ヒ秋月藩ニ來ル五日関東発向ヲ命ス	六月二日
四八五	諸藩ニ京師駐在ノ兵ヲ解キ藩内ノ兵備ヲ修ムヘキヲ令セラル	六月四日
四八六	島津忠義自筆ヲ以テ関東発向ニ付上下戮力奮励スヘキノ告諭書ヲ發ス	六月四日
四八七	越後口淵邊高照官軍難戦ニ付援兵派遣ヲ請求ス	六月四日
四八八	島津忠義出征ヲ停メラレ代リニ島津伊勢ヲ関東ニ赴カシム	六月五日
四八九	大久保利通東下ヲ命セラル	六月五日
四九〇	藩庁関東出軍並京都守衛ノ為軍隊ヲ差遣スヘキヲ達ス	六月七日
四九一	東條慶次・大山彦八任官ノ旨ヲ在京島津主殿ヨリ藩庁ニ報ス	六月七日
四九二	島津忠義帰国ノ上大兵ヲ率イテ東行シ大総督宮等ト謀ツテ奥羽ヲ鎮定セシム	六月八日
四九三	暗殺者ヲ嚴重ニ緝捕セシム	六月九日
四九四	島津忠義京都ヲ發シテ帰藩ノ途ニ就ク	六月九日
四九五	藩庁耶蘇宗徒分預者ノ警衛法ヲ調査報告ス	六月九日
四九六	藩庁私領主ノ在府遙領ヲ改メテ無用ノ冗費ヲ省キ軍器ヲ備フヘキヲ達ス	六月十日

四九七	吉井友實北越ニ出張ヲ命セラル	六月十三日	七三〇
四九八	洲邊高照越後口ノ戦況ヲ在京軍賦役ニ報ス	六月十三日	七三〇
四九九	嘉彰親王ヲ會津征討越後口総督トナシ本藩船立田丸ニ兵糧ヲ輸送セシム	六月十四日	七三一
五〇〇	島津忠義着麿ヲ藩内ニ達ス	六月十四日	七三三
五〇一	乾行丸指揮役沖直次郎着京ノ上五月廿九日以来乾行丸ノ行動ヲ報告ス	六月十四日	七三四
五〇二	正月以来朝命ヲ奉シ戦死セシ者ノ氏名ヲ録上ス	六月十五日	七三五
五〇三	島津忠義東征奉命以来ノ経過ヲ藩内ニ布達ス	六月十五日	七四〇
五〇四	官軍平潟港ニ上陸ス	六月十六日	七四一
五〇五	乾行丸指揮役沖直次郎馬關出帆後行動ノ概要ヲ報告ス	六月十七日	七四二
五〇六	諸藩ニ令シテ戎服ノ徽章ヲ録上セシム	六月十八日	七四五
五〇七	富士艦船将有川矢九郎平潟戦争ノ概要ヲ報ス	六月十八日	七四五
五〇八	当春来留置ノ捕虜ヲ軍務官ニ引渡ス	六月	七四六
五〇九	参与木戸孝允等ヲ江戸ニ遣シ大総督熾仁親王等ト車駕東幸等ノ事ヲ議セシム	六月十九日	七四九
五一〇	在京製作掛土橋藤五兵衛製作人ノ上京ト彈藥發送ノ下命ヲ請求ス	六月十九日	七五二
五一一	林謙藏ニ海軍御用ニ付兵庫軍務局ニ出頭スヘキヲ達セラル	六月十九日	七五四
五二二	私ニ金銀貨及ヒ紙幣価値ノ差等ヲ立ツルヲ禁ス	六月二十日	七五五
五二三	万機親裁・公議博探ノ告諭及徳川慶喜征討ノ一榜ヲ撤スルコトヲ達ス	六月二十日	七五五
五二四	越後表戦死者奠儀ヲ親類ヘ引渡スコトヲ京都本營役所ヨリ藩庁陸軍所ニ通知ス		

- 六月二十日……………七五五
- 五二五 参与大久保利通江戸ニ抵ル 六月二十一日……………七五六
- 五二六 藩庁一門・家老ニ伏見・鳥羽戦争後拝領ノ品拝見ヲ許ス 六月二十一日……………七五七
- 五二七 軍務官知事兼會津征討越後口総督嘉彰親王陸辞ス 六月二十二日……………七五八
- 五二八 諸道府県ニ勅シテ天災兵害ニ罹リシ者ヲ賑恤セシメ便宜事ヲ行フヲ許ス 六月二十二日 七五九
- 五二九 島津忠義近日上京ニ付更ニ扈從ノ兵ヲ増加スヘキヲ達ス 六月二十四日……………七六〇
- 五二〇 堀為影ヨリ田尻務・黒田清綱ヘ書翰 六月二十五日……………七六一
- 五二一 廣幡忠禮ヲ宣命使トシ伊勢大廟及ヒ熱田神宮ニ遣ハス……………七六一
- 五二二 堀為影奥羽追討総督參謀ヲ命セラル 六月二十六日……………七六一
- 五二三 平松時厚ヲ戦士慰勞等ノ為奥羽ニ遣ハス 六月二十七日……………七六二
- 五二四 島津主殿書ヲ在藩家老ニ贈リ小松帯刀以下五名藩ノ俸禄返上ノ願出ニ付交渉ス 六月二十七日……………七六三
- 五二五 在長崎汾陽光遠ヨリ藩ノ月番家老ニ浦上村耶蘇宗門徒処置ノ狀況ヲ報告ス 六月二十九日七六四
- 五二六 神葬祭希望ノ者ハ此ノ式ニヨリ執行スルヲ許可ス 六月……………七六五
- 五二七 其ノ他六月中ノ藩庁達書……………七六六
- 五二八 本藩ニ傭聘ノ仏人士質学者コニエ上坂セシムヘキノ令達 七月一日……………七六九
- 五二九 公現親王布告文 七月……………七七〇
- 五三〇 薩藩奥羽鎮撫軍ノ狀況并ニ白川口・上野戦争ノ狀況届書 七月二日……………七七二

目次

五三一	四條隆謨仙臺追討総督ヲ命セラル	七月三日	七七六
五三二	板垣退助・伊地知正治建言書	七月三日	七七七
五三三	島津伊勢一行報告書	七月三日	七七七
五三四	藩庁達書	七月三日	七七九
五三五	諸藩ノ艦船ヲ大坂・兵庫ニ廻航シ征討用ニ充テシム	七月四日	七八〇
五三六	藩庁達書	七月四日	七八〇
五三七	大山綱良ヨリ久保田藩主先鋒ヲ願ヒ出テタル旨ヲ岩下方平ニ報ス	七月五日	七八一
五三八	養老ノ典行ハルニ付キ達書	七月六日	七八四
五三九	薩州・長州・土佐三藩老臣ヘノ達書	七月六日	七八四
五四〇	岩下方平ヨリ西郷・桂ニ書ヲ贈リ奥羽同盟ヲ報シテ出兵ヲ議ス	七月七日	七八五
五四一	戦死者ヲ加茂川東操練場ニ祭ラル、ニ付キ達書	七月	七八六
五四二	志岐外二名越後長岡ヨリ帰京シ援兵ヲ申出ツ	七月十一日	七八七
五四三	大山綱良ヨリ西郷・大久保・吉井ヘ書翰ヲ贈リ奥羽ノ形勢ヲ報ス	七月十一日	七八八
五四四	越後口在陣ノ黒田清隆等彈薬類ノ請求ヲナセリ	七月十一日	七九〇
五四五	諸藩ニ令シ郡邑ノ公私所属ヲ明ニシ其ノ石高ヲ録上セシム	七月十三日	七九一
五四六	白川口ニ戦死ノ本藩以下五藩ノ兵士ヘ香花料ヲ賜フ	七月十三日	七九三
五四七	在京家老島津主殿伏見・鳥羽役殉難者石塔竣工ニツキ書ヲ在藩家老ニ贈ル	七月十三日	七九四
五四八	越後口総督嘉彰親王布告文	七月十五日	七九五

- 五四九 大坂開市場ヲ開港場ト改ム 七月十五日 …………… 七九五
- 五五〇 奥羽鎮撫總督諸藩兵深ク賊中ニ入り艱苦久シキヲ以テソノ勞苦ヲ賞ス 七月十六日 …… 七九六
- 五五一 久留米藩蒸氣船千歳丸兵庫出帆鹿兒島ヘ回航スヘキヲ報ス 七月十六日 …………… 七九六
- 五五二 在京家老島津主殿越後口ノ狀況ヲ在藩家老ニ報ス 七月十六日 …………… 七九七
- 五五三 藩庁達書 七月十六日 …………… 七九八
- 五五四 江戸ヲ東京ト改メ鎮將府ヲ置イテ駿河以東十三国ヲ管理ス 七月十七日 …………… 七九九
- 五五五 奥羽鎮撫總督參謀大山綱良ニ肥前藩ト同心協力スヘキ旨達セラル 七月十七日 …… 八〇〇
- 五五六 相良治部白川方面ノ戰況報告 七月十七日 …………… 八〇一
- 五五七 飢饉ノ虞アルヲ以テ地方官ヲシテ予メ備ヲナサシム 七月十八日 …………… 八〇二
- 五五八 藩庁青山勇藏ヘ出軍諸郷兵ノ差引ヲ命ス 七月十八日 …………… 八〇二
- 五五九 在藩家老新納刑部ヨリ忠義東征先鋒兵ノ上京ヲ在京家老ニ報ス 七月十九日 …… 八〇三
- 五六〇 藩庁西郷隆盛ニ出軍總差引ヲ命ス 七月十九日 …………… 八〇四
- 五六一 人馬奉行・普請奉行等ニ出軍ヲ命ス 七月 …………… 八〇四
- 五六二 当春分捕ノ銅砲五挺ヲ集成館ヘ下附シ兵具方ニソノ管理ヲ命ス 七月十九日 …… 八〇五
- 五六三 大總督府橫濱軍事病院ヲ東京ニ移ス 七月二十日 …………… 八〇五
- 五六四 伊地知正治ヨリ大久保利通ヘ戰況ヲ報ス 七月二十一日 …………… 八〇六
- 五六五 薩藩及佐土原藩北越出軍達書 七月 …………… 八〇七
- 五六六 東征出軍達書數通 七月 …………… 八〇九

目 次

五六七	織田織之助へ御沙汰書	七月	八一五
五六八	桑山圭助へ御沙汰書	七月	八一五
五六九	内々新聞記事	七月	八一五
五七〇	駅通司ヨリ諸道宿駅へ布告	七月	八一七
五七一	大坂銅会所鉞山局ト改称云々被仰出書	七月	八一七
五七二	丁銀・豆板銀新金銭ト交換ノ件布告書	七月	八一七
五七三	兵学校開費ニツキ入校ヲ勸ム布告書	七月	八一八
五七四	太守公榮之尾江湯治ニ被為入云々達書	七月	八一九
五七五	戦死者ノ靈社設置永世神祭ノ式達書	七月	八一九
五七六	人別改奉行会計奉行へ兼務達書	七月	八一九
五七七	米蔵・金蔵改称達書	七月	八一九
五七八	金札一両代錢九貫文通融藩達	七月	八二〇
五七九	諸郷事変ニ際シ届出ノ件ニツキ地頭・郡奉行并糺明奉行へ達書	七月	八二〇
五八〇	芸道ヲ以テ士分トナリシモノへ達書	七月	八二〇
五八一	諸郷事変届出ノ件ニツキ再ヒ地頭并受持掛郡奉行へ達書	七月	八二一
五八二	水野日向へ御尋問書	七月十日	八二一
五八三	芝山文平監察被免達書	七月十三日	八二四
五八四	大音龍太郎軍監被免達書	七月十三日	八二四

五八五	高橋熊太郎参謀試補被仰付御沙汰書	七月十三日	八二四
五八六	肥前少将御沙汰書	七月十七日	八二五
五八七	保科弾正忠へ御沙汰書	七月二十日	八二五
五八八	武家屋敷ヲ商人ニ借スヲ禁ス取締御沙汰書	七月二十三日	八二五
五八九	蘆野雄之助へ御沙汰書	七月	八二五
五九〇	肥後藩へ御沙汰書		八二五
五九一	鷲尾隆聚へ御沙汰書		八二六
五九二	御沙汰書		八二六
五九三	全上	七月	八二六
五九四	全上	七月	八二六
五九五	中・下大夫及上士へ御達書写	七月	八二六
五九六	大關泰次郎へ御感状	七月十日	八二七
五九七	七月十一日御沙汰書		八二七
五九八	全上		八二七
五九九	七月十二日御沙汰書		八二七
六〇〇	唐津藩へ御沙汰書	七月十三日	八二七
六〇一	七月廿日御沙汰書		八二七
六〇二	全上		八二八

六〇三	全上……………	八二八
六〇四	七月二十一日御沙汰書……………	八二八
六〇五	七月二十一日紀藩届書……………	八二八
六〇六	七月二十五日御沙汰書……………	八二八
六〇七	大久保利通日記 七月……………	八二八
六〇八	全上 七月朔日……………	八二九
六〇九	大村藩届書 八月五日……………	八二九
六一〇	淵邊直右衛門・川南東右衛門ノ書 七月二十五日……………	八二九
六一一	京都本営ヨリ来状 八月三日……………	八三〇
六一二	大村藩届書 八月五日……………	八三〇
六一三	種子島宗之丞奥州磐城平城下ヨリ来状 七月二十一日……………	八三一
六一四	佐土原藩届書……………	八三二
六一五	伊地知正治日記 七月二十二日……………	八三三
六一六	七月十七日有栖川宮へ達書……………	八三三
六一七	七月十四日布告書……………	八三四
六一八	海舟日記 七月朔日……………	八三四
六一九	自由ニ他国ニ行ク事ヲ嚴重ニ取締ル可キ藩達書 八月二日……………	八三五
六二〇	越後表ノ情況島津主殿国老ニ通牒書 八月三日……………	八三五

- 六二一 出軍兵總差引西郷吉之助春日丸ヨリ出發達書 八月…………… 八三七
- 六二二 薩・長兩藩へ達書 四月…………… 八三七
- 六二三 島津主殿主上御出鞆ニツキ太守公ノ東上ヲ国者ニ促カス書 八月八日…………… 八三七
- 六二四 主上御出鞆被仰出書 八月…………… 八三八
- 六二五 敦賀軍務官官軍長岡城回復ノコトヲ京都軍務官ニ報スル書 八月五日…………… 八三九
- 六二六 海江田武次ヨリ島津主殿へ通知書…………… 八三九
- 六二七 島津主殿国老ニ通牒書 八月八日…………… 八三九
- 六二八 各寺院ノ供給高ヲ召揚ク知政所達書 八月八日…………… 八四〇
- 六二九 寺僧ニ手当支給ノ知政所達書 八月八日…………… 八四一
- 六三〇 島津忠義至急上京御沙汰書并藩吏届書 八月十日…………… 八四一
- 六三一 伏見・島羽戦死者石塔建設ニツキ華香料ヲ下附セラル達書 八月十日…………… 八四二
- 六三二 越後表死傷者陸軍所達…………… 八四二
- 六三三 島津主殿桂右衛門ニ贈ル書 八月十一日…………… 八四七
- 六三四 奥羽出軍兵武運祈念ノタメ五社祭祀施行ニツキ日限ヲ申出ツ可キ達書 八月十日…………… 八四八
- 六三五 苗代川小隊出軍ニツキ佩刀ヲ許ス達書 八月…………… 八四九
- 六三六 東京行幸ニツキ東海道筋藩々へ布告書 八月十三日…………… 八四九
- 六三七 朝彦親王ニ異凶ノ聞アリ之ヲ藝州藩ニ幽ス御沙汰書 八月十六日…………… 八五〇
- 六三八 朝彦親王ノ家族等伏見宮へ預ケル御沙汰書 八月十六日…………… 八五〇

六三九	朝彦親王幽閉ニ関スル藝州藩ヘノ御沙汰書	八月十六日	八五〇
六四〇	徵兵一番隊長故野元助八感状並家族ヘ達書	八月	八五一
六四一	奥平操一贈小松帶刀書二通	八月	八五二
六四二	泉州堺薩州商社演舌之覚	八月	八五三
六四三	外国人医師ヲ遣シテ戦傷者ヲ治療セシム	八月二十日	八五三
六四四	長崎府ノ砲台規則立ツヘキ達書	八月十七日	八五四
六四五	公務人ヲ公議人ト改称スル布告書	八月二十日	八五四
六四六	長崎風俗革易ノ御沙汰書	八月二十日	八五四
六四七	元関白二條齊敬ノ参内ヲ許ス	八月二十日	八五五
六四八	越後口出軍諸隊並前之濱ヨリ乗船ニツキ陸軍所ヘ参集スヘキ達書	八月二十二日	八五五
六四九	諸隊守備上京達書	八月	八五五
六五〇	出軍諸隊平運丸ヨリ上京達書	八月	八五六
六五一	遊芸出願取下達書	八月二十一日	八五七
六五二	外国人ニ対シ輕拳ノ振舞無之様取締	八月二十二日	八五七
六五三	桂右衛門彈丸鑄造方猶予ノコトヲ兵庫軍務所ニ上申書	八月二十三日	八五七
六五四	町田内膳恩賜品分配ノコトニツキ島津主殿ニ照会状	八月二十三日	八五八
六五五	崇徳天皇神靈御還遷布告書	八月二十四日	八五九
六五六	大久保利通日記	八月二十四日	八五九

六五七	寺島宗則ヨリ小松帶刀へ書翰	八月二十五日	八五九
六五八	天皇即位式概略	八月二十七日	八六一
六五九	宣命文	八月二十七日	八六三
六六〇	寿詞	八月二十七日	八六三
六六一	大歌写		八六四
六六二	外国官準知事東久世中将英国公使へ贈ル書	八月二十七日	八六四
六六三	御東幸ニツキ薩・長へ御沙汰	八月二十八日	八六五
六六四	御東幸ニツキ供奉ノ面々へ御沙汰	八月二十九日	八六五
六六五	垂水・平佐・喜入各小隊へ出軍御供上京達書	八月二十九日	八六五
六六六	苗代川小隊出軍上京達書	八月二十九日	八六六
六六七	木戸準一郎贈大久保一藏書	八月二十八日	八六六
六六八	各所死傷者人名		八六九
六六九	京都本營役所ヨリ長岡戦状報告	八月十三日	八七一
六七〇	某氏通信書節録		八七一
六七一	八月十九日上田藩届書写		八七二
六七二	新發田表戦状報告	八月十二日	八七三
六七三	柏崎本營ヨリ京都軍務官へ届書		八七四
六七四	薩摩藩届書	八月二十日	八七四

六七五	八月廿六日立二本松ヨリ報知之抄略……………	八七六
六七六	土州藩渡邊清左衛門ヨリ大村益次郎・吉村長兵衛へ書翰 八月……………	八七七
六七七	三條實美ヨリ岩倉具視へ書翰 八月二十日……………	八七九
六七八	八月廿四日奥州二本松ヨリ報知抄略……………	八八〇
六七九	外城士城下同様士族ト改称云々知政所達書 八月……………	八八一
六八〇	諸隊進撃準備……………	八八一
六八一	上村休助ヨリ田畑平之丞へ書翰 八月八日……………	八八六
六八二	徳川亀之助へ御沙汰書 八月五日……………	八八八
六八三	海舟日記抄 八月……………	八八八
六八四	大久保利通日記 八月十日……………	八八九
六八五	一橋大納言・田安中納言へ御沙汰書 八月十二日……………	八九〇
六八六	松園ヨリ楠荘へ書翰 八月九日……………	八九〇
六八七	参謀達 九月二十八日……………	八九一
六八八	佐土原藩届書写 八月二十五日……………	八九二
六八九	越後表戦況京都ヨリ通信 八月四日……………	八九三
六九〇	八月五日大村藩届書……………	八九四
六九一	會津在陣本藩戦況上申書 九月十四日……………	八九四
六九二	武運祈念ノタメ五社祭礼被仰出旨藩達 八月……………	八九六

六九三	島津忠義へ早々上京ノ旨達書	八月十日	八九六
六九四	戦死・手負等戦況報告	八九六
六九五	英船フキロンク船頭役山崎政治見聞書	八月四日	八九九
六九六	八月四日晚景副島次郎イロン船ヨリ帰船承候趣大略	八九九
六九七	米五千俵・金二万両ヲ徳川家家臣ニ下賜ス	八月	九〇〇
六九八	田安藩等届書	八月	九〇〇
六九九	駿河以東十三ヶ国ノ社寺 Hansonノ府藩県ニ属サセ難事件ハ鎮将府へ申出サス	九〇一
七〇〇	海舟日記	八月	九〇一
七〇一	忍藩届書写	八月五日	九〇二
七〇二	銚子港漂着ノ徳川家ノ脱艦美賀保丸ヲ処置セシメ脱走者ヲ捕へ謹慎セシム	九〇四
七〇三	英国公使参内事件ノ償金ノ分配ヲ外国官知事東久世通禧ニ報ス	九月朔日	九〇四
七〇四	公現親王白石ヲ去リ再ヒ仙臺ニ赴ク	九月二日	九〇五
七〇五	指揮役沖一平新潟付近ニ進撃ノ状況ヲ報告ス	九月二日	九〇五
七〇六	小松清廉外国官副知事兼務ヲ命セラレ鍋島直大・阿野公誠ハ参与ヲ命セラル	九月三日	九〇七
七〇七	兵庫県知事伊藤博文米国領事ニ書ヲ贈リ米国水夫乱暴ノ罪ヲ糺サシム	九月四日	九〇七
七〇八	薩藩監軍關山峠戦争状況届出書	九月三日	九〇八
七〇九	公卿・諸侯・徴土等家族ト共ニ任地へ赴クヲ許ス	九月四日	九〇九
七一〇	越後口総督嘉彰親王上杉齊憲ノ降伏ヲ許シソノ子茂憲ヲ賊徒追討先鋒ニ命ス	九月四日	九〇九

七二一	德川藩脱艦下田港へ漂着ニ付藩船豊瑞丸ヲ同港へ廻航スヘキヲ命セラル	九月四日	九二一
七二二	小松帯刀玄蕃頭ニ任セラル	九月四日	九一一
七二三	東幸ノ期近キニ付宮門及ヒ諸関門警衛規則等ヲ定ム	九月五日	九一一
七二四	兵庫県知事伊藤博文書ヲ大坂府知事後藤元暉ニ送り塚事件ノ償金等ノ件ヲ議ス	九月五日	九二二
七二五	崇徳天皇ノ神靈ヲ京都ニ奉遷シ白峯宮ト号ス	九月六日	九一三
七二六	大総督府向後脱走屯集ノ輩ハ悉ク敵科ニ処スヘキヲ達ス	九月六日	九一四
七二七	勤務時間ノ増加及ビ兼勤等藩庁達書	九月六日	九一四
七二八	伊勢雅楽願書	九月六日	九一五
七二九	東海道筋小荷駄奉行肝付郷右衛門大総督ヨリノ賜金並ニ東北地方ノ戦況ヲ報ス	九月七日	九一五
七二〇	藩庁兵士等ノ非常召集規定ヲ申渡ス	九月七日	九二一
七二一	明治ト改元シ一代一号ノ制ヲ定メ大赦ス	九月八日	九二二
七二二	藩庁異船渡来ノ時ノ心得ヲ海岸附郷々ノ地頭・領主及ヒ船奉行ニ達ス	九月九日	九二五
七二三	軍務官各藩従軍死傷者名ヲ録上セシム	九月十日	九二六
七二四	小松帯刀東幸ノ東京先発ヲ命セラル	九月十日	九二六
七二五	白濱勤兵衛徴士・日田県判事ヲ命セラル	九月十一日	九二六
七二六	駅遞規則ヲ定メ府藩県ニ宿弊ヲ釐革セシム	九月十二日	九二七

- 七二七 東北征討諸軍ノ兵士ニ防寒用毛布ヲ賜フ 九月十四日 …………… 九二八
- 七二八 赤塚真成書ヲ谷村昌武外二名ニ贈リ春日艦ノ從軍行動及ヒ東北地方戦況ヲ報ス 九月十
四日 …………… 九二八
- 七二九 越後口總督嘉彰親王河沼郡氣多宮村ニ至リ諸軍ヲ勞ス 九月二十日 …………… 九三二
- 七三〇 伊達慶邦・板倉勝尚軍門ニ降り徳川捕鯨ノ徒五百余人仙臺老臣ニ就テ降ヲ乞フ 九月十
五日 …………… 九三二
- 七三一 皇学所・漢学所ヲ設ケ宮・堂上以下諸人ヲシテ入学セシム 九月十六日 …………… 九三七
- 七三二 松平信庸・水野三郎右衛門等軍門ニ降ル 九月十七日 …………… 九三七
- 七三三 島津久徴・廣兼報告ノ三春・二本松攻略ヲ届出ス 九月十七日 …………… 九四〇
- 七三四 榎本武揚等奪フ所ノ軍艦二隻清水港ニ入ルニ付大總督府之ヲ追捕セシム 九月十八日 九四一
- 七三五 御東幸ニ付達書 九月十八日 …………… 九四二
- 七三六 東幸留守中薩藩以下四藩へ洛中洛外ノ警衛ヲ任ス 九月十九日 …………… 九四二
- 七三七 伊地知貞馨軍艦購買御用掛ヲ命セラル 九月十九日 …………… 九四二
- 七三八 議事体裁取調所ヲ東京ニ置キ總裁以下ヲ任ス 九月十九日 …………… 九四三
- 七三九 會津進撃中ノ戦死者並ニ戦争概況報告 九月十九日 …………… 九四四
- 七四〇 車駕京師ヲ発シ東京ニ幸ス 九月二十日 …………… 九四八
- 七四一 神奈川府ヲ県ト改メ寺島宗則ヲ同県知事ニ命ス 九月二十一日 …………… 九四八
- 七四二 松平容保父子軍門ニ降ル島津伊勢日記 九月 …………… 九四九

七四三	車駕土山駅ニ至リ供奉群臣等ニ天長節醕宴ヲ賜ヒ又祝砲ノ儀行ハル	九月二十二日	九五二
七四四	中井弘藏・後藤元暉英國女王下賜ノ劍ヲ英國公使ヨリ贈与セラル	九月二十二日	九五四
七四五	官軍庄内ニ入り酒井忠篤謹慎ス	九月	九五四
七四六	會津在陣薩藩本営ヨリ京都本営並ニ国元陸軍所ニ會津落城ノ景況ヲ報ス	九月二十三日	九五七
七四七	車駕四日市駅ニ至ル又沿道府藩県ノ民營業常ノ如クセシメラル	九月二十四日	九五九
七四八	南部利剛謝罪書ヲ奥羽鎮撫總督府ニ奉リ降ヲ乞フ	九月二十四日	九六〇
七四九	藩庁急変ノ際各局諸員ノ勤務場所・人名等調査ヲ命ス	九月二十四日	九六二
七五〇	會津在陣軍監桐野利秋若松城開城始末届書ヲ總督府ニ差出ス	九月二十六日	九六三
七五一	燈明台築造ノ為英國工技師ヲ薩藩以下六藩ニ派遣スルニ付便宜ヲ与フヘキヲ達ス	九月	九六三
	二十七日		九六五
七五二	藩ノ軍隊慰問使得能良介若松城下ニ到ル島津伊勢日記	九月二十八日	九六六
七五三	大總督府奥羽諸藩主ノ東京護送等ヲ定メ白河・平潟兩道ノ總督ニ令達ス	九月二十九日	九六七
七五四	日付不明藩庁達書	九月	九六八

明治元年(1868)

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月六

〔扉に、表紙の文字の外に市来四郎編の記載あり〕

目録

- 一 本藩使ヲ九州諸藩ニ派遣シ、朝敵征討ノ旨趣ヲ告ケ、諸藩ノ去就ヲ問フ正月二十五日
- 記 藩内へ通達並ニ布告文及ヒ使者口上之大意
使者人名及各受持
- 一 忠義公宮中襖免サレタル御礼正月五日
- 記 御札請書並ニ藩内通達書
- 一 本藩開運ノ期祭ヲ行フコトヲ達ス正月廿五日

記 達書並ニ本社奉行次第

一 林玖十郎ヲ徵士ニ、稻波丹波介内国事務掛ニ任セラル

記 藩吏届書(林玖十郎徵士任命、稻波丹波介内国事務掛任命之ニ件ナリ)

一 参与大久保市藏遷都之議ヲ上ル正月廿五日

記 建白書並ニ岩倉具視尾・越・土・藝・宇和

島・細川ノ各侯へ廻達書

一 久光公家老小松帯刀ヲシテ、天氣ヲ伺ハシム正月廿六日

記 達書

一 東征布告書伝達トシテ、藩吏隣境へ派遣ス正月廿六日

参照 寺師宗道日記節録

桂右衛門届書

一 西郷遷都ノ内議ヲ大久保ニ通知ス正月廿六日

記 西郷書牘

参照 大久保利通日記節録

一 藩吏富山傳内左衛門、長州下之關ヨリ時情ヲ報スル書

牘

一 忠義公親征軍議之為メニ條城ニ召サル正月十七日

記 徳大寺實則ヨリ越前宰相へ宛テ、召状伝達セ

シムルノ書附

一 大政官代ヲ二條城ニ移サル正月二
十七日

記 通達書

一金穀出納所並會計事務裁判所ヲ、二條城内ニ設ケラル

正月二
十七日

記 通達書

一 参与大久保一蔵ヲ以テ總裁顧問ト為ス正月廿
七日

記 辞令

参照 大久保利通日記節録

一 諸侯ノ松平氏ヲ冒称スル者ハ、其本氏ニ復セシメラル

正月二
十七日

記 御沙汰書

藩吏添書

参照 蜂須賀淡路守回章

一 諸藩ノ九門警衛及ヒ征討兵ヲシテ、菊章ノ旗幕ヲ用ヒ

シメラル正月二
十七日

記 達書並ニ下渡日附

一 久光公岩下・西郷・大久保ノ功劳ヲ賞スル書ヲ与ヘラ

正月二
十七日

参照 大久保利通日記節録

一 西郷英公使パークスノ意見三ヶ条ヲ大久保ニ報シ、其

施行ヲ促セリ正月二
十七日

記 西郷書牘大久保宛

一 百官ヲ会シテ大ニ東征ヲ議ス議遂ニ決ス正月廿
八日

参照 春嶽私記節録

大久保利通日記節録

一 木場ヨリ西郷・大久保ニ贈ル書牘（大坂市中両替店往々
閉鎖金融逼迫ニ付、御産物売捌方行詰ニ付、市中景氣引直シ
方法ノ問合ナリ）

一 將軍宮帰洛其外一件廻達ヲ報ス正月二
十九日

記 御沙汰書

嘉彰親王ノ奏状

滋野井公壽・大原俊實京師へ召還ノ達書廻覧

状

留守居届書

一 吉井幸輔参与兼海陸軍務掛ヲ命セラル正月二
十九日

記 辞令

一 豊後日田並長崎鎮撫出兵ノ引払ヲ上申ス正月廿
九日

記 届書

留守居届書

留守居届書

留守居届書

留守居届書

一 澤前主水正嘉九州鎮撫總督ノ命ヲ達セラル正月廿九日

記 辞令

藩留守居届書

澤宣嘉書翰二通

一 京都詰藩吏ヨリ、戦亡者ノ遺髪ヲ送付スルコトヲ通報

正月二
十九日

記 本書

一 参謀海江田武次信義ヨリ、桑名城処置ヲ西郷・大久保ニ

報ス正月二
十九日

記 海江田書牘

一 備前藩ヲシテ兵庫港発砲一条ヲ再心上申セシム

記 達書

日置帯刀上申書

茂政へ達書三通

章政家記

帯刀処分心得達

一 大久保利通日記(木戸・広沢ヨリ越公云々ノ件引合アリ、

乃チ岩倉公へ申上置方可然返答)

一 本藩使者ヲ以テ九州諸藩ニ朝敵征討ノ

趣旨ヲ通シテ去就ヲ問フ

明治元年一月二十五日、藩九州諸藩へ朝敵征討ノ趣旨ヲ

通シ、去就ヲ問フノ使ヲ派遣セリ、

今般朝敵征討被

仰出候ニ付、九州之諸侯江は、此御方より夫々使節被

差向、御別紙之通布告文被相渡、若名分大義ニ暗く、

至今日勤

王之赤心無之、逆賊ニ致私党族於有之は、即追討之師

被差向筈候、此旨一統被奉承知候様、向々江早々致通

達、諸郷・私領江も可被申渡旨、領主並諸所地頭江可

申渡候、

正月

〔島津久治
圖 書

〔桂久武
右衛門

〔川上久輪
龍 衛

〔野田久憲
内 膳

右戊辰正月廿五日被仰渡也、

九州諸侯江使節被差出ニ付、口達之覺左之通、

但正月廿六日、蓑田傳兵衛・園田彦左衛門・肥後直

次郎・川崎強八・橋口與一郎・久保田新次郎等ノ
御役々三手ニ発足也、

辰正月二十五日

御本文之通、御役人中江致通達、地頭用達取次並用頼

(門閥諸家ノ公私家宰ヲ託スルモノ、即役職アル士分ナリ)

江モ申渡候、

取次

北郷浪江

布告文

天に無二日、地に無二王、是天地の大経、万世の通義
なり、往時

皇国衰弱の弊に乘し、徳川氏兵馬の権を掌握せしより

已来

王室愈不振、其漸終に

至尊徒に虚器を擁し給ふのみ、万姓をして

天朝有る事を不知しめ、近代に至りてハ、畏くも奉輕

蔑

朝威之罪、枚挙するに違あらず、天下の人々切齒悲憤
する所、就中西洋異邦に對し、自ら日本大君と号し、
異邦の人亦日本大君と称すれハ、甘して是を受け、君

臣上下の名分地を掃に至れり、

朝廷厚く寛典に処せらるゝと雖、動すれハ上を欺、下
を誣の奸跡多く、今の徳川慶喜事、飽まで

天恩を蒙たる身として、日頃に至

王政復古之大典を怨望し、陰に禍心を包蔵し、(容保、全
津藩主) (定敬、桑名藩主)松平肥

後・松平越中等其凶謀を助け、天下の乱魁と成り、既

に本月三日、暗に大坂を發して、干戈を

王畿に動し、恐多くも奉襲

鳳闕之逆謀顯然たるに依り、即ち尾・越・薩・長・

土・藝其他誠忠有志之諸侯、勤

王之義兵を以、賊徒を鳥羽に破り、伏水の賊陣を討ち、

官軍大に勝利を得て、賊の将卒敗走し、淀河を経て大

坂に北ヶ行を追撃したり、

新天子神聖勅武ニましゝ、速に斧鉞之任を

仁和寺親王ニ下賜、征東大將軍

宣下ありて、諸參謀副将各々

勅命を奉戴、同九日大坂城を攻抜き、逆賊を追散し、

党与等悉く伏誅し、或逃隱たり、官軍山崎の賊闕を破
り、八幡山に拠り、大坂落城の後ハ、攝海ハ勿論城市
共ニ官軍堅固に守り、翌十日ニ至りてハ東賊一人も不

見落去せり、

天兵之向ふ所枯たるを摧か如く、彼之親従したる井伊・藤堂・稻葉等の輩を初、悉逆款帰順して官軍に属せり、尔後賊魁徳川慶喜・松平肥後・松平越中身首の所在を不知と雖、天網疎にして不漏之理なれハ、自然束縛に附へき者なり、率土之浜

王土ニ非るハ無く、普天の下

王民にあらざるハなし、誰か今日

天朝多難の際に当りて、

王家に勤めざるへき、仍て遍く列藩各士の将士四民万姓に布告す、早く賊魁徳川慶喜・松平肥後・同越中等を誅伐し、天地不容の罪を正し、上奉安

宸襟、下万民塗炭の苦を解き、

皇国之全彊を静鎮すへし、若し今日に至り、名分大義に暗く、誤て

王師を拒ミ、逆敵に私党する者ハ、忽天誅を可加、仮令徳川慶喜等之親族姻類たりとも、大義滅親之義を守り、勤 王之志ある者ハ其実効を顕し、可奉報

天恩、一旦逆賊に誣誤せられ、之か党たりとも自新之意を發し、反正帰順之輩ハ不録旧惡を、

王師の内に可召加ニ付、

速に去就を決し、尽力竭忠共に可翼戴

王室、首鼠兩端を抱て、擬議猶予するの族ハ、邪正曲

直判然たる

天裁あるへき者也、

正月

〔久光〕
島津中将

一ノ三

使者口上之大意

〔島津久光〕

此節大隅守より私共被差立候使節之趣は、追々御伝聞

ニ御座候通、徳川は勿論會津・桑名等之党と、於伏見

逆心の色を顕し、征討ニ被及候処、悉く致敗亡、大坂

迄も速に落城、実以

皇運挽回一同難有仕合御座候、仍ては於各藩勤

王補佐之忠志を磨候儀は、申迄も無之候得共、至此節

候ても人心難量、於其御方様は、勤

王否哉之御存慮を吃と承届、弥以勤

王御別儀於無之は、其御墨付を頂戴罷帰候様、左候ハ

、弥御互ニ、

王事ニ抛身命候様いたし度、尤於京都修理大夫江

勅諭之趣、此通ニて差上置候間、御答復願上候事、

一ノ四
正月

右熊本・久留米・柳川・福岡・佐賀
園田彦左衛門
久保田新次郎

右飢肥・高鍋・延岡・中津・小倉・岡・杵築・府内・
森・臼杵・日出・佐伯、

橋口與一郎
川崎強八

右島原・唐津・平戸・五島・大村
右之通正月二十六日御使として出立也、

慶明雜録

一ノ五
此御方様より、御布告文為御持御使者被差越候御
大名衆左之通、

一熊本 細川越中守〔慶順〕
一久留米 有馬中務大輔〔慶頼〕
一柳川 立花左近將監〔鑑寛〕

一福岡 松平美濃守〔黒田奇徳〕
一佐賀 松平肥前守〔鍋島直大〕

右園田彦左衛門・肥後直次郎

一飢肥 伊東修理大夫〔祐相〕

一高鍋 秋月佐渡守〔種政、長門守〕

一延岡 内藤能登守〔政季、備後守〕

一中津 奥平大膳大夫〔忠忱之〕

一小倉 小笠原左近將監〔久昭〕

一岡 中川修理大夫〔親良〕

一杵築 松平中務大夫〔久通、右京丞〕

一臼杵 稻葉伊豫守〔大給近説〕

一府内 松平左衛門尉〔通精〕

一森 久留米伊豫守〔俊憲〕

一日出 木下肥後守〔高謙、美濃守〕

一佐伯 毛利安房守〔安和〕

右園田彦左衛門・久保田新次郎

一島原 松平主殿頭〔長行、唐津藩世子〕

一唐津 小笠原圖書頭〔益〕

一平戸 松浦肥前守〔盛徳、飛騨守之〕

一五島 五島隠岐守

明治元年(1868)

一大 村 大村丹後守(純熙)

右橋口與一郎・川崎強八

右之通、慶應四年辰正月廿四日御使者被差立候、

二 島津忠義宮中襖免サレタル御礼

明治元年正月廿五日、忠義公宮中襖免サレタルノ御礼ヲ

申ノベラル、

一私事自今被 免襖、難有仕合奉存候、右御礼以使者申

上候、

正月廿五日

薩摩少将

^{二ノ二}留守居ノ届書ヲ載ス、

一御書附 一通

但

太守様自今被

免襖候付、御礼之儀、

右ハ

御所御仮立へ持参、非藏人吉見三河へ差出候処、岩倉

侍従様被成御落手候、右非藏人ヲ以被仰聞候、

一御書附一通

但書同断

右ハ

(仁和寺宮影親王)総裁宮様御玄関へ罷出、御取次佐久間外記へ差出候処、

可申上旨申述候、

右之通今日私相勸候間、此段申上候、以上、

辰正月廿五日

(立夫)新納嘉藤 二

(関山金生)糺様

^{二ノ三}明治元年正月

一太守様御事、昨廿四日自今般被免襖候段、被為蒙

勅命候条、此旨奉承知候様、向々へ可致通達候、

正月廿五日

糺関山

三 新天子並太守ノ開運祈禱ノ布達

明治元年正月廿五日、開運ノ期祭ヲ行フコトヲ達セリ、

^{三ノ一}一五社

一花尾権現社

右ハ此節柄、

新天子御開運並

太守様御武運長久之御祈禱被仰付、御名代被差立候筈
条、供物等御手当向之儀、早々申出候様、本田出羽守・

井上備前守（神宮）江申渡様、可申渡候事、

右之通口達書ヲ以、御用人江被下候事、

（按）花尾神社ハ島津崇敬ノ神社ナリ、太守様御式トハ

藩主親詣ノ式ニ做フヲ謂フ、

本田出羽守徳親ハ諏訪大宮司ニテ、從五位上ナリ、家格

寄合並ト称ヘテ門閥ニ列セリ、井上備前守從長ハ花尾神

社ノ大宮司ニテ、從五位上ナリ、家格本田ニ同シ、

三ノ二

花尾神社へ

御名代之次第

一前日七ツ時ヨリ御清

宮床勤之表御小姓

御茶道

右御行前日ヨリ差越、

〔采〕一本文表御小姓御茶道之儀、不及差越候条、

御代参等之振合ヲ以、社役可相勤候」

右郷境江罷出御案内

花尾社

神職式人

所衆中

右花尾社下馬涯江罷出御案内

一大宮司役所江被申入御支度替

一御神納物

御太刀

御馬代

右前以 御神前へ相備置、

一御社参

三ノ鳥居ヨリ 御下乗童衆奏行、

大宮司

右随神門ヨリ御案内、

一御宮向拝縁類ニテ御手水

表御小姓差上之、

一御盛塩

右同断、

一御神楽奏行

一御祈禱

大宮司申上之

明治元年(1868)

一御幣

權大官司差上之

一御神酒

表御小姓差上之

御立

一御廟所江 御拜礼

權大官司御案内

一再大官司役所へ被為入御支度替

御規式

一御茶

一御茶菓子

一御吸物

一御銚子

一御挾肴

以上

〔米〕「本文御茶・御茶菓子迄差上、御吸物・御銚子等不及

手当候」

右ハ此節柄

御開運等之御祈禱付、

御名代之儀取調、井上備前守ヨリ本社奉行相附申出候

事、

本社奉行

〔米〕「本文張紙外可為申出之通候、左候テ

御名代人柄・日限之儀ハ、別段申渡候事」

一御神酒 六盃

但瓶子三双分二日通り、

一千肴 拾五

但小鯛白干・鰹節之類、

一中鯛 三枚

一水菓子 拾五

但密柑・久年母類、

一野菜 三把

一小餅 三拾

但壺升付拾ツ、取、

一上白米 壺升

但御膳用、

一御參錢 三百文

一御花米 三升

一中奉書 拾式枚

一下紙 三帖

一勤人数 式拾五人

右拾式行一日分

右之通御供物動人数等御座候ニ付、井上備前守本社奉行江可被仰申出候事、

本社奉行

一白米 式斗五升式合

但一日ニ壹升式合ツ、三七日分、

御神供百式拾六膳分

一小鯛 八拾四

但一日ニ四ツツ、三七日分、

一密柑 式百五拾式

但一日ニ拾式ツ、三七日分、

一小餅 式百五拾式

但一日拾式ツ、三七日分、

一野菜 式拾壹把

但一日壹把ツ、三七日分、

一御神酒 八拾四盃

但一日ニ四盃ツ、三七日分、

一小奉書 百六拾六枚

但一日ニ八枚ツ、奉幣紙用、

一下紙 式束壹帖

但一日ニ壹帖ツ、三七日分、

(諏訪社)
右勢方社

一御神酒 百六拾八盃

右祇園社・稲荷社

春日社・若宮社

但一日一社ニ式盃ツ、三七日分、

一社家 百六拾八人

但一日ニ八人ツ、三七日分、

右勸方終日之儀御座候ニ付、一度御賄被成下度、併當時柄之儀御座候ニ付、壹人五文目ツ、御賄料被成下度、左候ハ、御布施物之儀、御規定モ有之候得共、不及其儀ニ候、

右ハ 五社江 御名代ヲ以

御開運等之御祈禱付、御手当向之儀右之通被仰付度、

依之明廿六日ヨリ三七日、宝祚無窮相祈可申候付、当

日四ツ時

御名代被差立度候、尤供物等之儀ハ、向々御座ヨリ被持来候様被仰渡度付、本田出羽守申出候事、

本社奉行

四 新納嘉藤二ヨリ關山札へ書翰

林 玖十郎

右今般徴士被

仰付候事、

(按) 林玖十郎通宇和島藩士ナリ、正月二十五日参与

ニ任セラレタリ、

林 玖十郎

右今般下参与・海陸軍務掛等被

仰付候事、

土倉修理助

海陸軍務掛被

仰付候事、

(按) 土倉修理介正彦ハ備前藩士ナリ、正月十二日参与

ニ任セラレタリ、

稲葉丹波介

内国事務掛被

仰付候事、

右之通

御沙汰候、仍申入候、御廻覽可返給候也、

正月(二十五日)

参与

尾張大納言殿

土佐前少将殿

薩摩少将殿

安藝少将殿

細川右京大夫殿

御書附 一通

但

林玖十郎今般徴士等被仰付候儀、

右ハ御用之儀有之候間、早々罷出候様、太政官代書記

役所ヨリ切紙到来ニ付、罷出候処、穂波(経度)三位様ヨリ御

別紙被成御渡、早々順達可致旨、被成御達候付、本書

ハ藝州様衆江相廻シ、写相添此段申上候、以上、

辰正月廿五日

新納嘉藤二

札様

五 大久保利通大坂遷都ノ建白書

明治元年正月二十三日、参与大久保市蔵遷都之儀ヲ上ル、
五ノ一
上書

今日之如キ大變態、開闢以來未曾テ聞サル所ナリ、然
ルニ尋常定格ヲ以テ、豈是ニ応ゼラルベキヤ、今一戰
官軍ノ勝利トナリ、巨賊東走スト雖、巢穴鎮定ニ至ラ
ス、各国交際永続ノ法立タス、列藩離反ノ方向定マラ
ス、人心凶々、百事紛紜トシテ、復古ノ鴻業未其半ニ
至ラス、纔ニ其端ヲ開タルモノト言フヘシ、然ルニ
朝廷上ニ於テ、一時ノ勝利ヲ恃ミ、永久治安ノ思ヲナ
サレ候テハ、則北條ノ跡ニ足利ヲ生シ、前姦去テ後姦
来ルノ覆轍ヲ踏マセラレ候ハ、必然タルヘシ、依テ深
ク
皇国ヲ注目シ、触視スル所ノ形跡ニ拘ラス、広ク宇内
ノ大勢ヲ洞察シ給ヒ、數百年來一塊シタル因循ノ腐臭
ヲ一新シ、官武ノ別ヲ放棄シ、国内同心合体、一天ノ
主ト申シ奉ルモノハ、斯ク迄ニ有難キモノ、下蒼生ト
イヘルモノハ、斯ク迄ニ頼モシキモノト、上一貫、
天下万人感動涕泣イタシ候程ノ 御実行挙リ候事、今
日急務ノ最急ナルヘシ、是迄ノ通
主上下申シ奉ルモノハ、玉簾ノ内ニ在シ、人間ニ替ラ

セ玉フ様ニ、纔ニ限リタル公卿方ノ外、拜シ奉ルコト
ノ出来ヌ様ナル御サマニテハ、民ノ父母タル天賦ノ御
職掌ニハ、大ニ乖戾シタル訳ナレハ、此御根本道理適
当ノ御職掌定ツテ、初テ内国事務ノ法起ルヘシ、右ノ
根本ヲ推究シテ、大變革セラルヘキハ、遷都ノ典ヲ挙
ケラル、ニアルヘシ、如何トナレハ、弊習ト云ヘルハ
理ニアラスシテ勢ニアリ、勢ハ触視スル所ノ形跡ニ帰
スヘシ、今其形跡上ノ一二ヲ論センニ

主上ノ在ス処ヲ雲上トイヒ、公卿方ヲ雲上人ト唱へ、
龍顔ハ拜シ難キモノト思ヒ、

玉体ハ寸地ヲ踏ミ給ハサルモノト、余リニ推尊奉リテ、
自ラ外ニ尊大高貴ナルモノ、様ニ思召サセラレ、終ニ
上下隔絶シテ、其形今日ノ弊習トナリシモノナリ、敬
上愛下ハ人倫ノ大綱ニシテ、論ナキコトナカラ、過レ
ハ君道ヲ失ハシメ、臣道ヲ失ハシムルノ害アルヘシ、
仁徳帝ノ時ヲ天下万世稱賛シ奉ルハ外ナラス、即今外
国ニ於テモ、帝王從者一二ヲ率シテ國中ヲ歩キ、万
民ヲ撫育スルハ、実ニ君道ヲ行フモノト謂フヘシ、然
レバ更始一新、王政復古ノ今日ニ当リ、本朝ノ聖時
ニ則ラセ、外国ノ美政ヲ庄スルノ大英断ヲ以テ挙ケ給

フヘキハ、遷都ニアルヘシ、是ヲ一新ノ機会ニシテ、易簡輕便ヲ本ニシ、數種ノ大弊ヲ拔キ、民ノ父母タル天賦ノ君道ヲ履行セラレ、命令一タヒ下リテ、天下慄動スル処ノ大基礎ヲ立、推及シ給フニアラサレハ、皇威ヲ海外ニ輝シ、万国ニ御対立アラセラレ候事、叶フヘカラス、

一、遷都ノ地ハ浪華ニ如クヘカラス、暫ク行在ヲ被定、治乱ノ体ヲ一途ニ居ヘ、大ニ為スコト有ヘシ、外国交際ノ道、富国強兵ノ術、攻守ノ大権ヲ取り、海陸軍ヲ起ス等ノコトニ於テ、地形適當ナルヘシ、尚其局々ノ論アルヘケレハ贅セス、

右内国事務ノ大根本ニシテ、今日寸刻モ置クヘカサル急務ト奉存候、此儀行ハレテ内政ノ軸立チ、百目ノ基本始テ挙ルヘシ、若眼前些少ノ故障ヲ顧念シ、他日ニ譲リ玉ハ、行ハルヘキノ機ヲ失シ、

皇国ノ大事去ルト云フヘシ、仰願クハ大活眼ヲ以、一断シテ卒急 御施行アランコトヲ、千祈万禱奉リ候、死罪、

正月

大久保一蔵

(副総裁岩倉具視副書)

別紙之通、大久保一蔵ヨリ手元迄差出候事ニ候得共、為賢考入高覽候也、

正月二十三日

具視

議定

参与

御中

[大久保利通伝・大久保利通文書にて補正]

五ノ二

春嶽私記二十五日ノ条ニ、此日岩倉殿ヨリ御廻シニ相成、大久保一蔵建白如左ト、其上申ノ日ヲ失スルヲ以テ、本日ニ収ム、

別紙之通、大久保一蔵ヨリ手先迄差出候事ニ候得共、為御参考入御一覽候、御廻覽可返給候、以上、

正月廿五日

具視

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐少将殿

安藝少将殿

宇和島少将殿

細川少将殿

(記)

大久保先キニ世界ノ大勢ニ鑒ミ、從來ノ旧例ヲ破リ、一新ノ政途ヲ開カサレハ、遂ニ中壅百廢ノ憂アルヲ以テ、主トシテ遷都ノ議ヲ立テ、西郷ニ謀リ、之ヲ岩倉副總裁ニ陳フル所アリ、尋テ木戸・廣澤兵助ニ説キ、同意ヲ得タリ、相互ニ三條副總裁ニ陳フルアリ、然ルニ朝官中大久保等ノ心意ヲ疑フモノアリ、議頗ル難ム、説弁勸告益々勉ム、遂ニ此日岩倉副總裁ニ上書セリ、副總裁之ヲ尾張議定勝ヲ始メ六人ノ議ニ移シ、諮詢スル所アリシナリ、

六 島津久光家老小松帶刀ニ天氣ヲ伺ハシム

明治元年正月二十六日、久光公家老小松帶刀ヲシテ天氣ヲ伺ラル、

六ノ一 今般賊徒御誅伐之趣、追々島津中将承知仕、早速上京可仕之処、此内ヨリ之病氣未起居不任心、依之不取敢為伺

天氣、家来小松帶刀差登申候付、宜敷 御執奏可奉願旨申付越候間、此段申上候、以上、

薩摩少将内

正月廿六日

内田仲之助(政風)

留守居ヨリ正月二十六日届書ヲ載ス、
書付 一通

但賊徒御誅伐之儀、

中将様被遊 御承知

天氣御伺之儀、

参与御役所出役非藏人

松室豊後(重進)

右へ持参仕演説之上差出候処、明日参与御役所ニ條城へ被設筈ニ付、今日御伺相成候得ハ、当御役所ニテ相濟候得共、明日ヨリ先キ御勤被成候付テハ、御都合次第ニ條城於御役所御伺相成候テ、可然旨同人申聞候、右之通今日私共、サシ支御留守居付役、隈元敬一郎相勤申候間、此段申上候、以上、

正月廿六日

内田仲之助

帶刀様

(記)

小松帯刀、本月十八日藩地出船上京セリ、此日京着、
參朝ノ事ヲ請ハシムルナリ、

(按) 大久保利通日記二十七日ノ部ニ、今日帯刀殿着ト
アリ、参看スベシ、

六ノ二

今日大政官参与御役所へ御手前様御出之處、御使番生
駒右京出会仕候ニ付、今般賊徒御誅罰之段、中將様
於御元被遊御承知、且御用召之御廉モ被為在候ニ付、
旁早速 御上京可被遊筈之處、此内ヨリ之御病氣御全
快不被為在候付、不取敢御手前様御差登

天氣御伺被遊候旨、御申演之處、参与御方イマタ御參
無之候付承置、追テ可申上旨右右京申聞候、

右之通今日御同伴相勸申候間、此段申上候、以上、

辰二月朔日

内田仲之助

帯刀様

六ノ三
今般賊徒御誅伐之趣

中將様被遊御承知、早速御上京之處、御病氣付不取敢
天氣御伺トシテ、小松帯刀差登候旨、別紙写之通御留
守居名前ヲ以差出置、去ル朔日、大政官参与御役所へ

罷出、

天氣御伺相濟候付、御留守居首尾書相添、此段申越候
条、

中將様可被達

御聽候、以上、

辰二月十七日

關山(金生) 糺

島津(久徳) 圖書殿

桂(久武) 右衛門殿

川上(久徳) 龍衛殿

町田(久憲) 内膳殿

七 東征布告伝達トシテ藩吏ヲ隣境へ派遣ス

明治元年正月二十六日、藩東征布告伝達トシテ、隣境へ

藩吏ヲ派遣セリ、

(記)

東西両途ニ、正副二名ノ伝告使ヲ派遣セリ、一列ハ肥
後ヲ経テ、筑前ニ至ル葦田傳兵衛・伊集院強八、一列
八日向ヲ経テ、豊後・豊前ニ至ル園田彦左衛門・久保
田新次郎ナリ、各藩皆其趣旨ニ同シ、使ヲ遣テ其意ヲ

致シテ厚誼ヲ謝シ、或ハ今来ノ依囑ヲ為セシモアリキ、
【参照一】

寺師宗道日記明治元年正月廿六日

〔原本の二十三行分前略カ〕

東征之御書付御通達ニ相成候由、左候て九州布告之為

ニ、明日より蓑田傳兵衛ニ伊集院強八、正副にて肥後

隈本〔備〕より筑前迄、国々引合相成候、園田彦左衛門は副

不分、兩人都城寺柱より出、伊東を始日向大名豊後よ

り小倉迄被差越候由〔以下二行省略カ〕

【参照二】

桂右衛門届書

蓑田傳兵衛

肥後直次郎

右熊本・久留米・柳川・福岡・佐賀

園田彦左衛門

久保田新次郎

右鉄肥・高鍋・延岡・中津・小倉・岡・杵築・府内・

森・臼杵・日出・佐伯

橋口與一郎

川崎強八

右島原・唐津・平戸・五島・大村

右ハ今般朝敵征討被

仰出候付、九州之諸侯へハ、此御方ヨリ右之通使節被

差向、御別紙之通布告文被相渡、銘々今廿六日被差立

候テ、若名分大義ニ暗ク、至今日勤

王之赤心無之、逆賊ニ致私克族於有之ハ、即追討之師

被差出咎候間、其段一統被奉承知候様、向々へ致通達

候、御別紙相添此段申越候条、被達

貴聞、其許申渡之儀ハ、何分ニモ可被取計候、以上、

但太守様ヨリ被仰越候趣ヲ以、

中將様御一名ニテ、御布告相成、其段ハ御使者ヨ

リ致演舌賦ニ候、此段ハ為御心得ニ候、

辰正月廿七日

桂〔久徳〕右衛門

小松〔清廉〕帶刀殿

島津〔広善〕伊勢殿

新納〔久徳〕刑部殿

岩下〔方平〕佐次右衛門殿

關〔金生〕山〔金生〕紵殿

本文致承知達

貴聞、向々申渡ニハ及間敷、御別紙写扣置、此旨及御

返答候、以上、

辰四月廿八日

小松 帶刀

島津 伊勢

新納 刑部

岩下 佐次右衛門

關山 紉

桂 右衛門殿

八 西郷隆盛遷都ノ内議ヲ大久保利通ヘ通知

ス

巻封

大久保一蔵様

西郷吉之助

要詞

只今岩倉卿御來駕有之候処、遷都之一条ニ付、久我家江御出相成、得と御議論被為在候処、木戸・大久保之推察通問違無之候間、後藤方江御出懸相成候へ其他出、又貴兄所江御立寄相成候へ共、是又同様之義ニ候間、無致方弊屋江御來訪相成候て、明早天御參 殿被成候様、御通し可申上旨承知仕候、事柄ハ一向不相分候得共、委敷相咄候得は、時刻も移り候付、貴兄より可承、

自然悪敷向ニ候へハ、相談も可致候得共、宜敷都合ニ候間、御咄不被成との事ニ御座候故、大慶と明め、強て御尋も不申上候付、宜敷御周旋被成下度奉合掌候、是非今晚通し置呉候様と之事ニ御座候間、承知仕候形行まで早々奉得御意候、頓首、

正月廿六日夜

(大久保利通氏所蔵本にて校訂)

(按) 二十五日大久保ハ公然遷都之意見書ヲ上レリ、然ルニ朝野往々之ヲ非議シ、之レ君ヲ要シテ、私権ヲ張ルモノナリトノ異議アリ、議容易ニ決セサリシナリ、然ルニ此日岩倉公、西郷ノ寓ヲ訪ハレテ、議稍々決シタルノ内報ヲ伝ヘテ、大久保ノ來談ヲ告ケラレシナリ、思フニ遷都ノ議ヲ非トスルノ原因、判明ナラサリシカ如シ、然ルニ大久保利通日記ニ徴スルニ、土・芸人中ニ異論ヲ含メルモノト察セラルナリ、即チ岩倉公カ後藤象次郎ヲ訪問アリシハ、其關係存スル所ナルベシ、

【参照】

大久保利通日記

正月

廿六日

一岩倉公被召參殿、久我公昨夜御入來遷都之事、薩二奸

謀有之、是ヲ期ニシテ薩・長相合、大ニ私権ヲ張候云々之賦ニテ候由、後藤モ同論ニテ候得共、実ハ態ト同意之体ヲ以テ、尽力イタシ候云々、且土・藝モ同論云々、右之次第ニテ、甚不容易儀ニ思召候趣承候間、是ハ決テ因循説ヲ以テ拒ミ候為之策ニ相違無之、後藤ハ此議ハ異条無之段申上ル、尚亦木戸ナトへ談シ呉候様承ル、木戸へ差越相談シ、三條公へ参殿、岩卿御出、是非後藤へ談シ候趣申上ル、然ラハ尚亦久我へ御談可被成云々承リ退散、木戸同道三樹^(三本)へ差越、拙宅同伴、今夜止宿、

九 富山義直ヨリ下關ノ情勢報告

藩吏富山傳内左衛門ノ書牘、目今ノ情勢ヲ察スルニ足ルヲ以、其散節ヲ載ス、

正月二十六日

任幸便一筆申越候、母上様奉初各方ニモ御息才^(父)、爰許之大変相知ト、暫ハ嘸々御心配被成候半ト思遣居申候、先便ヨリモ申越候通、兄弟共運強大元氣ニテ、拙者ニハ滞坂、為左衛門ニハ兵庫滞^(在)ニ候間、左様御納得最

早少モ御懸念被成間敷候、桑名城並姫路城モ落城降参ニテ、実ニ百戰百勝之御勢ヒ、京・大坂何方ニテモ薩摩イモノ大モテ、毎日市中等ヨリ陣營御見廻ニ、酒肴・菓子・白砂糖類献上相成、沢山ニ戴キ申候、苦ノ跡ハ楽トノ先言只今ノ事ト存申候、

一 五経但^{札記四ノ卷一冊不足}

右仲之助殿追々注文被申越候得共、取入方不相調候処、幸ヒ敵共取落シ、旅宿へ召置候ノヲ分取イタシ置候間、差下候、不足ノ冊ハ、追テ見出取入差下可申候、

一字彙 全部

一小學小本 二冊

右去ル十二日、出水米ノ津ヨリ肥後形勢等之趣、御届申上候通、直ニ中途差急キ、同十六日長州下之關へ着、同所出張役々へ応接之上、京攝之變動承候趣、且諸所風聞等之形行、簡条書ヲ以、左ニ申上候、

一 伏見鳥羽街道へ、御国兵六小隊ニテ固メ居、且伏見之方ハ、薩・土・長・藝同断之処、当月三日午過、徳川麾下ノ者共数人右街道へ差越、蒙 内命上京ニ付、可罷通旨及面接候付、御国兵ヨリ左候ハ、右次第御達相成筈候得共、未無其儀、此方モ

勅ニテ固メ候付テハ、御沙汰無之内ハ、何様タリ共差通儀不罷成段、相答候処、既ニ暴ニ差通ル勢、詰寄候処ヨリ無致方戦争ヲヨビ、其節賊兵戦死モ為有之由、然処其場引取暫ク間モ置、賊兵大砲打立寄セ来候付、互ニ砲発、何分御國小銃迄ニテ苦戦之由、然ル処夜ニ入長ヨリ三小队援兵横ヲ打、御国兵モ強戦、竟ニ賊敗北追討之由、其節御国兵モ人数損シ、賊兵モ数多同断之由、然処伏見之方モ會・桑・高松・松山勢同時ニ襲来リ、大合戦、賊ヨリ奉行屋敷へ火ヲ掛候処、風並不宜、却テ後ノ方ニ火廻リ、賊兵数多焼亡候由、是又敗走、同四日朝迄追討之由、然処八幡・山崎へ薩兵出テ、守衛イタシ居候処、會兵進撃戦争央ヨリ、藤堂勢^(奉九)挙勅イタシ、進出挾打之処、會兵崩立、夫ヨリ惣敗軍ニテ、大坂へ引取タル由、其節會兵戦死仰山為有之由、翌五日淀城へ薩・長攻寄候得ハ、城主ニハ疾ク微行ニテ上京、跡ヲ防戦之者無之、難ナク乘取リ、又八幡之戦ニハ官軍取巻、四方ヨリ押寄及砲発、強大相戦候処、彦根勢ヨリ崩立、夫ヨリ惣敗走為相成由ニモ承リ、然処翌六日官兵大坂迄押寄候処、残兵而已ニテ、兵庫辺迄惣軍引揚居、然処大城モ落失ル姿ニテ、城門明居候得

ハ、空城乗取候テハ兵威難立、何レ問罪有之迄ハ、其形召置トノ軍評之由ニテ、城外へ陣営之処、翌七日夜白ハ進兼、城中地雷発動、夫ヨリ無残城中焼失之由、右ハ官軍入替り候ハ、火攻之巧ニテ、態ト城門明置、自然為乗入賊無慮察シ、火掛候儀ニテ候半欵七日・八日迄掛、同所ハ残兵罷居候迄之由ニテ、兵庫ヨリ徳川軍艦へ惣軍取乗、関東之様落行由、一橋ニハ疾ク仏船ヨリ為逃下哉ニモ風評有之、弥関東之様乘行候哉、未分兼候由、将亦彦根勢ニハ、奉勅イタシ、其赤心為顯尼崎城乗取候由、且長崎奉行ニハ右形勢英船ヨリ為逐由ニテ、仏船ニ乘リ横濱之様逃下リ、支配下之者共、御裁談相待決心ニテ滞崎之由、跡屋敷之儀ハ、薩・土・藝人数入替り固メ相成候向ニ承り候得共、前件大坂ニテモ強戦相成候哉、又同所土佐堀御屋敷御焼失之形勢、市中類焼次第人数・戦死等之訳、於当所ハ速ニ巨細分兼申候、
一藝初陣之節嚴敷戦ハ不致、且伏見固メ之節、藝・土ニハ不^(奉九)之由ニテ、通行人等モ猥リニ差通シ候儀モ為有之由、決テ最初ニハ旗色見合居候半哉ト之風聞、取々有之、且徳川家下坂之節、目附寺人京師ニ為忍置、薩

ヲ斃内奸土州ニ被容候処、右ハ長藩擗取、土州不都合
之由ニ、山口表ヨリ下之關詰改船方へ差遣候書面ニ見
得居候得共、掛テ之上相分候廉ハ無之、又御国兵ヨリ
為相捕哉ニモ承リ申候、

一備後路へ上陸之長兵千人位、去ル九日備後福山城へ取
掛、二三砲発之処、防戦之手術ヲ不致、直様使節ヲ以
降伏之由、姫路・明石等之儀モ、長兵通行致候得共、
喰留候様之形モ無之、却テ通行案内等モ差出、無難上
京ノ由ニテ、然処其後山陽道方へ、長藩城戸順一郎為

説説為差越由候付、此節ハ何モ無訳奉

勅可致候半欵、且山陰道へハ、同藩井上一了多為差越

由、未何分之形勢報知無之候得共、是迎モ決テ訳ハ有

間敷、万一潜居之姿ニ見受候得ハ、当廿二日長門守様

山陰道ヨリ上京之由、其序ニ討伐之由承リ、且備中松

山ハ備前へ征討被仰付、疾ク伊東若狭守ト申者、総裁

トシテ兵ヲ為向由、未何分之模様不相分、姫路モ備前

ヨリ応接之処、人質迄モ可相渡トノ儀ニテ、大ニ恐縮

為致哉ニ承リ申候、

一賊兵ニモ兵庫港出船之上、罪詐依頼ノタメ、尾・紀之
間へ為到着哉ニモ風聞取々候得共、実事相分不申候、

一肥後之儀ハ去ル十一日、争戦之報為有之由ニテ、翌十
二日上下五百人位、番頭落合半次郎引卒シ、鶴崎ヨリ
蒸気船ニテ上京相成、翌十四日ニハ、備頭清水數馬同
断、同十八日ニ番手溝口蔵人多人數引列レ出兵之由、

且又京攝變動以來、人馬繼立等之義ニ至迄、意情等見
受候廉無之、却テ先達テ阿久根宿陣之出兵ハ、肥後固
メ之為差出哉ニ申触レ、混雜之由ニテ、境目迄モ実否
為探索為差出、此節上京人数八代へ着船之処、上下混
雜、市中之者家財取片付程之仰天ト承リ申候、

一去ル十四日、豊後四日市庄屋役所式軒、東御坊及焼失、

浪士共金錢為奪為及、右時宜事トモ二候半欵、未日田

之方動静ハ不相分候得共、同所代官モ疾ク脱走之由ニ

モ承リ、何分不穩形勢ニ被察、先日小倉郡代野村右中

為差越由、決テ鎮撫之タメニモ候半欵、浪士之義ハ長

州召抱置候者共哉ニ風聞有之由、

一夷国船之儀ハ、差分兵庫港へ碇泊、同所高館佛・米・

英・蘭ニテ守衛イタシ居候由、且京攝争戦以後長藩之

者、兵庫ニ於テ佛へ致応接候処、此節之戦ニ誰ヨリ手

ヲ出シ候哉トノ事ニテ、徳川ヨリ暴発之旨為相答由候
処、不条理之仕形別テ憤リ候由、尤是亦京都御裁談相

成ニヲヨヒテハ、攘夷ヨリ外之御処置付無之、趣意ヲ以幕方ヨリ追々被申込居、其通りノ誤候哉尋候付、長藩一己之含ヲ以、決テ能キ御裁決可相成トノ趣ニテ、為相答由候処、ミニストル初其外別テ為悦由承リ申候、一肥前佐賀卿ニハ争戦前蒸氣船ヨリ上京為有之由、且久留米ニモ当廿六日方、上京之手当為有之由候得共、延引之哉ニモ申触レ、尤柳川ハ不遠内上京相成筈トハ、風聞モ候得共、委細之儀分兼申候、

右通承得且賊兵紀・尾之間へ退散トノ風説候得共、実事行先之儀ハ分兼、亦何方へ欽潜居イタシ居、否再期有之欵モ不被計、且逆党共西国へ落候患モ有之、高松等之残兵本国へ引取候哉、不相分候付、右旁為探索方同役樺山彦太郎儀ハ、去ル十八日ヨリ防州三田尻刃差越候付、相分候廉ハ追々可申上、先是迄之形行此段御届申上候、以上、
辰正月廿六日

長州下之關詰
拔砂糖縮横目動
富山傳内左衛門(兼直)

一〇 島津忠義親征軍議ノタメニ條城へ召サル

明治元年正月二十七日、忠義公親征軍議之為メ、二條城ニ召サセラル、

一明廿八日大事件御評議有之候間、已刻二條城へ御出席可有之候、仍テ如此候也、

正月廿七日

(德大寺 實則)

(松平慶永)
越前宰相殿

副啓ハ難被扶御所勞ニ候ハ、重臣可被差出候、乍

御面動土州容堂・藝州・薩州等へ御伝達可有之候也、

(記) 太政官ハ九條家邸ニ代ノ達置アリシカ、本日ヨリ

二條城内ニ移サレタリ、其達令ヲ載ス、

一一 太政官代ヲ二條城ニ移ス

二十七日太政官代ヲ二條城ニ移ス、

一太政官代是迄被用九條家候得共、從明二十七日以二條

城太政官ニ被用候事、

一参与役所同城内ニ被設候間、總テ是迄之通取扱候事、

正月二十六日

又金穀出納所並會計事務裁判所ヲモ、二條城内ニ移サレタリ、其達令ヲ載ス、

ルナリ、

【参照】

大久保利通日記明治元年正月二十七日（二節）

廿七日

大久保一蔵

一二 金穀出納所並ニ會計事務裁判所ヲ二條城

内ニ設ク

総裁局顧問被 仰出候事、

是迄以学習院、金穀出納所並會計事務裁判所ニ被用候

二十四日坊城殿ヨリ御達之事、

処、從今二十七日二條城内ニ被設候間、總テ是迄之通

忠義家記、二十四日トス、案スルニ利通顧問ノ命ヲ拜

取扱候事、

スルモ、未タ御請ニ及ハサリシカ、

正月二十七日

許允ハ二月二日ニアリ、蓋シ、命ノ下リシハ二十四日

ニシテ、本日ニ至リ姑ク之ヲ拜シ、後遂ニ之ヲ辞セシ

モノカ、其故ヲ詳ニセス、姑ク事蹟ニ從ヒ本日ニ収ム、

一三 大久保利通ヲ総裁局顧問ト為ス

明治元年正月二十七日、参与大久保一蔵ヲ以テ、総裁局

一四 松平姓ヲ称スル者ハ本姓ニ復セシムルノ

顧問ト為ス、

沙汰書

大久保一蔵

総裁局顧問被

明治元年正月二十七日、諸侯之松平氏ヲ冒称スル者ハ、

仰出候事、

其本氏ニ復セシメラル、

(記)

徳川慶喜反逆ニ付テハ、松平之苗字ヲ称シ居候族ハ、

二十四日ニ総裁局顧問ノ命アリシモ、此日命ヲ拜シタ

向後大小名共、速ニ各本姓ニ復シ候様

御沙汰候事、

一四ノ二
明治元年正月

御名

御留守居中様

寺西金右衛門

徳川慶喜反逆ニ付テハ、松平之苗字ヲ称シ居候族ハ、
向後大小名共速ニ各本姓ニ復候様、別紙之通從

朝廷被 仰渡候付、向々被申渡候、此段申越候条、

中将様被達 御聴、其許申渡之儀ハ、何分ニモ可被取

計候、以上、

一五 諸藩ノ宮門警衛及征討兵ニ菊章ノ旗・幕
等ヲ用ヒシム

辰正月廿七日

關山 糺

明治元年正月二十七日、諸藩ノ九門警衛及ヒ征討兵ヲシ
テ、菊章ノ旗・幕ヲ用ヒシメラル、

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

今般御制度御改正ニ付、諸藩宮門警衛被仰付置候、銘々
御旗・幕並提灯等ニ至ル迄、菊御紋相用候様可仕

御沙汰候事、

但追討被

【参照】

以回章致啓上候、然ハ松平ノ苗字ヲ称シ居候族ハ、本
姓ニ復候様、從

朝廷被仰出候付テハ、向後蜂須賀ノ号被用候、此段各
様迄宜得御意旨被申付越、如斯御座候、以上、

仰付置候諸藩出兵之面々、以来一隊ニ一流宛、菊
御紋御旗被下候間、於家々可相調候、左候テ家之
紋相用候儀ハ、可為是迄之通候、

右辰正月廿九日、御留守居御呼出ニテ、参与御役所ヨ
リ被相渡候、

蜂須賀淡路守内

二月十四日

森 甚 作

一六 島津久光ヨリ岩下・西郷・大久保へ賞詞
ヲ授ク

明治元年正月廿七日、久光公岩下・西郷・大久保ノ功勞
ヲ賞シ、書ヲ与ヘラル、

(記)

久光公自筆ヲ以テ、岩下・西郷・大久保三人、不容易
尽力ヲ以テ、今日ノ形勢ニ至レルノ功勞ヲ賞スルノ書
ヲ与ヘラル、此日小松帶刀上京、之ヲ持シテ三人ニ授
ケタルナリ、

【参照】

大久保利通日記明治元年正月(一節)

廿七日

一木戸同道岩倉卿へ參殿、久我卿尚又御詰問相成候処、
愈因循ノ策ニテ、後藤關係ナキコト明白イタシ、仍テ
同人へ談シ候様、仍テ退散、今日ヨリ太政官代二條城
へ被移參仕、

大久保一蔵

総裁局顧問被仰出候事、

廿四日坊城殿ヨリ御達之事、

今日帶刀殿着、

中将公御筆ヲ以テ、岩下氏・西郷・小子三人不容易尽
力ヲ以テ、今日ノ形勢ニ至リ、別テ 御満足被遊候趣、
御褒詞ヲ奉蒙候事、

一七 西郷隆盛パークスノ意見ヲ大久保ニ報ス

明治元年正月二十七日、西郷英公使パークスノ意見三ヶ
条ヲ大久保ニ報シ、其施行ヲ促カセリ、

(記)

二十六日英國公使館書記官サトウ、公使パークスノ意
見ヲ領シ、西郷ヲ訪ネテ陳フル所アリ、一ニ備前藩神
戸争鬭一件ハ、隊長ヲ嚴法ニ処シ、速カニ措置ヲ決ス
ルコト、二、各国公使親謁ヲ賜フノ件ハ、各国相当ノ
礼法ニアラサル限りハ、清国之例ニ倣ヒ 皇上御幼年
ナリトノ理由ニ依リ、兩三年ヲ延期スルコト、三、大
政復古徳川家征討ノ宣言ヲ各国ニ通牒スルコトヲ陳明
シテ、其実行ヲ促カセリ、西郷乃チ之ヲ大久保ニ報セ
シナリ、
一七)一 (Brevet Major General)
昨日私宅へサトウ參度トノ事ニ御座候間、寛々談話イ

タシ候処、^(Parade)ミニストルヨリ内々相尋候様申付候由ニテ、相咄候事ニハ、備前之一条ニ御座候間、^(口置忠尚、岡山藩家老)帯刀ニハ禁錮ヲ被命、隊長之者嚴法ニ被処候次第、事実適當之処、委敷申唱候得ハ、彼方ヨリ申建候趣モ、号令之士官トハ、決テ帯刀ヲ差テ申タル義ニテハ更ニ無之、隊長ト申訊ナレハ、必ス異論ハ有之間敷ト奉存候間、速ニ御所置被為在候様無之候テハ、又如何之難事ト相成候義難計候付、急速御施行之処、呉々モ奉祈候、○各国公使 主上へ拜謁之儀ハ、両三年ハ御見合相成候方可宜、畢竟 御幼年之事ニモ有之、玉簾之中ニ被為在候テ、階下ニオヒテ拜ヲ成シ候様之事ニテハ、各国承知モイタス間敷、勿論世界之通礼ニ非ス候へハ、決テ右様之事ハ出来申間敷候ニ付、支那ニテモ其例有之、帝王幼年ニテ、両三年ハ相過候事ニテ、総裁之御逢ニ相成候へハ、決テ異議ハ有之間敷、両三年モ相立候得ハ、各国之事情モ御分リ可相成候間、其節可宜トノミニストル考付候間、相咄置候様ト之事ニ御座候間、委細相心得候間、万国普通之礼ハ必ス不相闕候付、安心イタシ吳候様申置候間、御舍居可被下候、関東へ御使者被差向候御談判之一条ハ、何モ子細有之訳ニテハ決テ有之

間敷、御征討之条理判然相立候儀ニ御座候へハ、御使節之行違共ハ、格別関係イタシ申間敷義ト被相聞申候、○徳川氏ヨリ政權返上相成候節、外人ヨリ何方へ相附キ候テ可宜哉之趣、旧幕へ申立候処、私利ヲ飾リ、朝廷之御所置振ヲ悪敷申落シ、各国へ布告イタシ候趣ニテ候へハ、政權返上相成、太政官代被召建、御一新以來徳川氏之虚言ヲ以愚弄イタス次第、且兵端ヲ開候始末等、各国へ御布告無之候テハ不相濟義ニ御座候間、早々御布令相成度、只徳川氏之布告ノミ本国へ相達候テハ、人心疑惑イタシ候義ニテ、如何様在留之者ヨリ申解遣申候テモ、証書無之候テハ、合点不致候故、速ニ御布告相成候様、可申述候旨、ミニストルヨリ為申由ニ相咄申候、右三ヶ条之趣ハ、早々御施行相成候様御尽力可被成候、以上、

正月廿七日

西郷吉之助

大久保市藏様

要詞

^{一七ノ二}翌日サトウ辞シ帰ルニ及ヒ、西郷其厚意ヲ謝シ、藩邸ヨリ物品ヲ贈リテ、其勞ヲ犒ヒ、野津七左衛門^{雄鎮}外一人ヲ

シテ、之ヲ大坂ニ送ラシム、左ニ西郷ヨリ得能良介ニ贈ルノ書ヲ載ス、

只今罷帰、夜分御失礼と奉存候得共、明早朝ハ外方江出懸候付、御頼申上越候、明日十二時後サトウ帰坂之賦ニ御座候間、被下物不被仰付候てハ相濟間敷、吟味仕候処、大和錦二本是ハ同文、縮緬式疋是ハ紅、是丈御調被下候て、誰そ同席之中持参いたし、挨拶相成候様御計可被下候、早目罷帰候ハ、相勤可申候得共、先御頼申上置候、サトウ同伴人ハ野津鎮雄七左衛門外巷人、御見立被下候て、下坂被仰付度、野津ニハ金子拾五両御持せ遣し被下、何篇都合いたし候様、御申付可被下候旨、吉井友実幸輔よりも申来候付、宜敷御頼申上候、此旨乍略義以書中奉得御意候、頓首、

正月廿八日

得能良助様

西郷吉之助

要詞

〔大久保利謙氏所蔵本にて校訂〕

一八 百官ヲ会シテ東征ヲ議決ス

明治元年正月二十八日、百官ヲ会シテ大ニ東征ヲ議ス、

議遂ニ決ス、

【参照一】

春嶽私記ニ云、二十七日下参与不残御呼出ニテ、岩倉殿被申聞候ハ、（幕影親王）仁和寺宮モ今晚ハ浪華ヨリ御帰陣ニ可相成筈、右ニ付テハ、愈関東

御征伐之大兵ヲ被拳候御決評ナリ、三道ノ鎮撫使杯ニテハ、迎モ行キ足り不申ニ付、海陸ヨリ大兵進発之廟算也、右ニ付熟考ノ上見込モ有之候ハ、明朝申達候様御演達有之、二十八日関東

御征伐御決定之議事有之、下参与之面々意見御尋ニ付、出席之上座中根雪江ヨリ及御答候ハ、関東今日ニ至リ、更ニ悔悟之体不相聞候得ハ、早々御征伐御当然ノ御儀タルヘキト奉存候、御軍略ニ至ツテハ、唯今申上候程之見込モ無之段申達、衆議大同小異ニテ、遂ニ御決評ト相成ル、

【参照二】

大久保利通日記

正月

廿八日

一 太政官代参仕、昨日関東追伐見込言上候様就御達、今

日各見込言上相成ル、

一九 木場傳内ヨリ西郷隆盛・大久保利通へ
書翰

封箴

西郷吉之助殿

大坂

藩生
木場傳内

大久保一蔵殿

大坂市中金銭持合候ものハ、都て兩替屋江掛込、銀手形を以、通融いたし來候場所御座候段は、御案内通之事御座候処、此節柄世体を危ふミ掛込置候金銭、都て兩替屋より取付ケ、銘々之困金ニいたし候人氣ニ相成、一昨日より市中大混雜ニて、昨晚迄兩替屋閉店いたし候者、別紙之通拾人ニ相及、今日も追々閉店之吹聴、今兩日もいたし候ハ、大坂中都會閉店可致との事御座候、就ては市中取引も一新いたし、却て宜鋪時節到來も難計御座候得共、差当り之処人氣大ニ差禿、何様之騒相成候も難計、別ては此御方御産物金も、過半兩替屋江掛込有之、追々金買入も不致候て不相叶事御座候処、昨日は金百貳百八匁ニ相成り、今日は迎も相場

も立申間敷との事ニて、金買入も不相調、御産物売捌も難計、必至と行迫り候儀ニ御座候間、此人氣立直り候趣法は無之哉、聞合いたし候処、いつれ之筋町奉行等之御役所相立、御政事一途ニ出不申候ては、市中相静り候期有之間敷、私共見込も右之通り御座候間、御賢慮は有之間敷也、此段形行御届旁申上候間、御披露可被下候、以上、

辰正月廿八日

木場傳内

西郷吉之助殿

大久保一蔵殿

(大久保利謙氏所蔵本にて校訂)

二〇 征討大將軍嘉彰親王凱旋奏状

明治元年正月二十八日、將軍宮掃洛、其外一件ノ廻達ヲ

報セリ、
二〇ノ一

將軍宮

今度東征御進軍可有二付、大御軍議被為在候間、早々御掃洛可有之被 仰出候事、

正月二十七日

二〇ノ二
(按)

本日帰洛之命在セラレ、二十八日大坂ヨリ凱旋シ、錦旗・節刀ヲ上リ、其状ヲ奏セラル、其奏状ヲ載ス、

奏状

四日出馬、鳥羽辺及伏水（見）下流堤上之戦争、官軍決死破賊兵、先以東寺為陣營、五日依淀辺戦争出馬、進錦旗于戰場、官軍大得勝利、賊徒敗績、七日出東寺入淀城、八日八幡及橋本関門巡邏、九日出淀城乗船、到枚方張陣營、十日自枚方乗船到浪華、以本願寺坂坊為陣所、十三日以四條前侍（隆輔）從為軍事參謀、命四国・中国征討使、總督及以五條少納言（為基）為監軍、同日以平松甲斐權介（時厚）為軍事參謀加勢、十五日堺辺巡邏、十六日以烏丸侍（光徳）從為大和国鎮撫使、二十一日華城巡邏、二十三日烏丸侍（基正）從大和国鎮撫無帰陣、二十六日天保山砲台巡邏、二十七日以勅使石山右兵衛權佐、就征東之大軍議被為有、帰洛被仰出、同日四條前侍從・五條少納言、中国・四国平定帰陣、二十八日払陣乗船、到淀上陸、

唯今

奏凱旋、返上錦旗・節刀候事、

正月二十八日

東伏見宮家記

二〇三

正月廿七日

滋野井公壽

大原俊實

今般東征大軍議被為在候ニ付、一先上京可致被仰出候事、

右之通被 仰出候、仍為御心得申入候、御廻覽可返給候也、

正月廿七日

参与

尾張大納言殿

越前宰相殿

土佐前少将殿

薩摩少将殿

安藝少将殿

宇和島少将殿

細川右京大夫殿

（記）

滋野井公・綾小路前侍（俊実有長ノ養子 大原重徳ノ男）私ニ京ヲ去リ、兵ヲ江・濃ノ間ニ募ル、附從ノ徒途上掠略ノ聞アリ、命シテ東海道鎮撫使ニ属セシメラル、此日更ニ之ヲ召還

セシナリ、

二〇ノ四

御別紙將軍宮様、今度東征御進軍可有之儀付、参与衆

ヨリ之御廻状、肥後中將様衆ヨリ相達、本書ハ安藝少

将様衆江廻達仕候付、写相添此段申上候、以上、

正月廿九日

内田仲之助(政風)

關山(關山)
糺様

二一 吉井幸輔参与兼海陸軍務掛ヲ命セラル

明治元年正月二十九日、吉井幸輔参与兼海陸軍務掛ヲ命セラル、

薩藩

吉井幸輔(友実)

右為徴士、参与・海陸軍務掛被

仰付候事、

二二 日田・長崎鎮撫出兵ノ引払ヲ上申ス

明治元年正月二十九日、日田・長崎鎮撫出兵ノ引払ヲ上

申セラル

三ノ一

此度賊徒御誅罰相成候処、豊後日田並長崎辺司吏悉逃去、人民騒然之折柄、無頼之者其虚ニ乘シ、乱暴之間

得有之、不取敢国許ヨリ少々之兵隊差出、鎮撫方ハ勿

論

王政帰順之道、手ヲ付置候得共、最早粗人心相定候向

御座候付、都テ人数引揚候様申越候間、右之趣被

聞食置被下度、此段御届申上候ニ付、宜敷御執奏奉願

候、以上、

正月廿九日

薩摩少将

三ノ二
留守居ヨリ正月二十九日付届書ヲ載ス、

御書附一通

但豊後日田並長崎辺へ兵隊差出置候得共、人数引揚

之儀、

薩摩少将

御官名

参与御役所

非蔵人

松室伊勢

川上龍衛殿

町田内膳殿

右へ持参、伊勢へ面会差出候処、則可及披露旨申聞候、
右之通今日私共差支、御留守居附役隈元敬一郎相勤申
候間、此段申上候、以上、

辰正月廿九日

新納嘉藤二

伊勢様

明治元年一月二十九日、澤前主水正宣九州鎮撫總督ノ命

ヲ達セラル、
二三ノ一

澤前主水正

二三ノ三

豊後日田並長崎へ兵隊差出置候得共、都テ人数引揚候
様申越候旨、別紙写之通御書付、先月二十九日、参与
御役所非蔵人松室伊勢へ被差出候処、則可及披露旨、
申聞候段申出候、別紙相添此段申越候条、中将様可被
達御聴候、右ニ付唐津・天草へモ兵隊差出被置候由ニ
付、引揚候様取計向之儀、本田全兵衛へ申含越候、左
候テ豊州之儀モ同様ノ事ニ付、是亦前文通御取扱相成
可然候付、何分ニモ取計被成度、委細之儀、右同人へ
申含越候、以上、

辰二月十七日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

九州鎮撫總督被 仰付候間、為心得申達候事、

但九州諸藩廻達之事、

右正月廿九日通稱、森藩主久留島伊豫守様衆ヨリ、御留守居方へ廻

達到来之写、

二三ノ二

肥後へ

九州筋浮浪有志之輩、元花山院家理之募ニ応シ、処々
屯集不法乱妨之所業モ有之趣相聞得、以之外之儀ニ候、
固ヨリ勤

王正義之士トシテ、貨財ヲ奪、人民ヲ苦メ候事、決テ
有之間敷事ニ候得共、篤ト吟味ヲ遂、右等狼藉之輩ニ
於テハ、嚴重所置ヲ加へ、九州鎮撫總督へ可申出候事、

御別紙二通久留島伊豫守様衆ヨリ相達候付、本書ハ内
藤備後守様衆へ致順達候間、写相添此段申上候、以上、
〔政奉、延岡藩主〕

辰二月三日

内田仲之助

伊勢様

島津忠義家記

明治元年二月二十日

澤宣嘉書翰二通

当地ハ余程暖氣相催、菜花満畝ニ有之候、上国ハ如何
哉、益御安靜可被為在ト令恐賀候、誠過日発途之前ハ、
毎事御面働相伺恐入候、風波之都合モ有之、且甲部ニ
テ仏公使応接之事件モ有之、彼是遷延、漸本月十四日
夕着崎、十五日朝揚陸、其後事務多忙ニハ候得共、先
以無異消光仕候、乍恐御安意願上候、当地着後庶務取
調候処、旧来之大弊痼結之廉一洗不仕候テハ、下民難
波之儀不尠候ニ付、夫々所分仕候、何分役名之者多分
有之候場所ニテ、自ラ弊モ多分有之、御遙察願入候、
委曲ハ三四郎ヨリ御聞取給候ハ、御了解之儀ト奉存
〔佐々木高行〕
候、於貴君モ嚙々御多務之御事ト奉察候、随分爲国家
柱石之御任御保護專要奉存候、別書之件々、是亦篤ト

事情御聞取願入候、何レ其内取調候件々ハ、逐一可及
言上候得共、先不取敢事件申上候、且別段極内密申上
置度候事件ハ、從來肥・筑両藩之儀ハ、別テ当地之人望
相背キ居候事有之由ニ付、此度諸藩士會議之者、悉ク
分散為致井上聞太・佐々木三四郎・野村惣七・松方助
左衛門・楊井謙藏杯其他、正直ニシテ才幹アリ、且人
望之帰シ候者登庸仕、地役人杯急度申付、是迄之情風
ヲ一改革仕候覚悟ニ有之候処、右ニ付肥・筑杯頗ル不
平之由ニテ、何カ内密談モ有之哉之由ニモ承候間、何
分少生心得ハ皇風ヲ八紘ニ及ボシ、万民塗炭之苦ヲ救
ヒ、聖恩ヲ仰キ候様、仕度所存ニテ有之候ニ付、是迄
之弊風通ニテハ迎モ難行届相考候処、前文之様ニ私論
モ可被行哉之萌モ有之候間、イツレ
朝廷へ何トカ可申出ト存候間、其迎情衷之処ハ乍余所
三四郎へモ御尋給候ハ、御了解ト存候、此段極内々
申上候間、宜御推察願入候、差急大乱書高免願度候也、

二月二十日

三條殿

宣嘉

内啓

内国事務局叢書

内啓

此度佐々木三四郎差出候条、別紙之情実御聞取願入候、就テハ

薩人 野村 総(惣) 七

土人 佐々木三四郎

右長崎裁判所參謀助役申付候、此儀ニ付内情申上度件々、実ハ諸藩士多分出崎ニ有之候処、衆議之上人材登用仕候処、右兩人之処、当所之人望モ能々帰シ有之、且隨分急度御役ニ立可申卜存候間、右之通先申付置候間、尚又自

朝廷モ徴士ヲ以、長崎裁判所參謀助役之儀、被仰付給候ハ都合宜敷、於本人モ一際尽力可仕卜存候、然処御内聞ニ入申度次第ハ、佐々木三四郎儀ハ從來容堂並後藤象二郎杯ト議論不相合候ニ付、先日ヨリ度々帰国之事申来候由ニ有之候得共、右申付候ニ付テハ、本人モ可相勸覚悟ニ有之、且又外ニ人物モ唯今難有之卜存候間、其刃御含ニテ、今度上京之便ニ容堂並象二郎等ヨリ、抑留致シ候モ難計ト深心配仕候条、岩倉殿ニハ先頃容堂ヲ御控キノ御様子モ拝承仕居候事故、右様抑留イタシ候様之儀有之候ハ、為國家御説破被為遊給候

儀、偏ニ希入存候、何モ御勘考之上、宜御尽力願入候、

右様ノ嫌疑モ有之候間、堀直太郎ヲ差添差出候間、何分之儀宜希入存候、差急大乱書御推覽希入候也、

二月二十日

(実美)

三條前中納言殿

宣嘉

岩倉前中將殿

(具徳)

内啓

内国事務局叢書

二四 京都詰藩吏戦亡者遺髪送付ヲ通知ス

明治元年正月二十九日、京都詰藩吏ヨリ戦亡者遺髪送付ノコトヲ通セリ、

此節戦争ニ付、戦亡人数鬢髮被差下候付、葬式料頂戴被仰付、格別厚ク御取扱有之度段ハ、先達テ天賜金才領久土目慎太郎使申越通ニ候処、其後八田幸輔外ニ六人追々相果、何分深手ニテ養生不相叶残多キ次第ニ候、就テハ右鬢髮之儀、大坂迄ハ才領人申付、同所ヨリ三邦丸乗頭へ相渡、其許陸軍所迄相届候様、本宮役所へ相達、今日被差下候付、着之上ハヲノツカラ陸軍所ヨリ申出候ニテ可有之、何篇先達ヲ被差下候、鬢髮御取

扱之振合通可被取計候、此段申越候、以上、

辰正月廿九日

關山 糺

島津圖書殿

桂 右衛門殿

川上龍衛殿

町田内膳殿

二五 參謀海江田信義ヨリ桑名城処置ニツイテ

西郷・大久保へ報告

明治元年正月二十九日、參謀海江田武二義信ヨリ桑名城処置ノコトヲ西郷・大久保ニ報セリ、

〔封〕
卷封

岩下佐次右衛門様

西郷 吉之助様 海江田武次

大久保 一蔵様

被為揃弥御安栄御勤仕可被成御座、奉南山候、乍恐

太守様御機嫌能

〔島津忠義〕
備後様御同然可被為入、万々難有御同慶奉存候、爰許

二おひて

〔橋本美榮〕
總督・副将之御両卿御機嫌能、二二小子無事相勤居申

候、乍憚御休意可被下候、然処桑城御征伐之首尾、大

意左ニ申上度候、去十八日〔滋賀原〕大津御出陣詰所御一泊、龜

山迄御進相成候処、桑名家老酒井孫八郎外二兩人罷出、

歎願別紙通、龜山藩を以申出、下拙酒井江面会、色々

尋問いたし候処、至て恭順罷在、如何様とも任天命御

沙汰可奉待との事ニ御座候、夫より御達相成候ニは、

松平萬之助初重臣之者共、四日市迄御用有之、參上候

様との事申入候、無異議御受いたし、桑国之様引取申

候、左候て、去廿三日右萬之助・酒井孫八郎・松平帶

刀、外ニ家老兩人・側役老人、四日市之様罷出御達相

成候ニは、御口達松平越中儀、〔定敬〕先般奉対

朝廷、大逆無道之所業、今更申迄も無之、右ニ就テハ

追討被仰出、出張之処、段々嘆願之趣難黙止、依之紙

面之通被仰付候条、謹て御請可申上事、

御別紙

一本城掃除いたし、

朝廷江可奉差上候事、

一帯刀之者共、不殘寺院江引退、恭順可罷在候事、

右御請致し、夫より本田主膳(本多康徳 膳所藩主)正殿江御預被仰付、四日

市之寺江被召置申候、酒井孫八郎義ハ、桑城掃除家中

一統寺院江恭順可罷在との御沙汰ニ付、差引として一

応帰国被仰付、去ル廿七日酒井又々罷出、別紙通函条

御請書差出申候、翌廿八日四日市宿御出陣、桑城御進

入先鋒・後陣之藩々大砲・小銃二三発ツ、打ならし、

終て一ツの櫓江火をかけ焼払、御見分之上御本陣之様、

御差入相成申候、本城御預之義ハ、尾張へ被仰付、市

中取締旁皆同断寺院江恭順罷在候、帯刀之者共、藤堂・

尾州両藩へ被預置申候、今日御両卿より飛脚被差立、

漸々一筆認出、御一左右申上申候、下拙ニも京都出立、

大津滞在中は勿論、今日ニ至迄大小之御用筋、諸藩之

出入昼夜之境も無之、甚以得寸暇不申候、草々の文面、

誠ニ以恐入候得共、後日重て可申上候間、左様御納得

奉願候、以上、

正月廿九日

海江田武次

岩下佐次右衛門様

西郷吉之助様

大久保一蔵様

再白

一土方・水口・龜山・吉田各出兵致シ候事、

一四州鳥羽重臣罷出嘆願書差出、可奉受御差図との事、(志)

一増山對馬守可奉從(正徳、長島藩主)

一天兵卜ノ事、

一内藤金一郎同断之事、(文成、學母藩主)

一土井淡路守同断之事、(利教、刈谷藩主)

一松平縫殿頭・三宅備中守御用御達相成居候事、

一岡崎・西尾・袋井・掛川・濱松、何れも御用相違置

候事、

右藩不受

朝命をニおひてハ、早々征伐可仕候事、

一府中江東賊屯集之様子相聞へ、則吉田藩を以、探索

いたし置申候、実正ニ候ハ、急速打散シ可申事、

一御達之趣ニ付、是迄徳川支配代官地図面、其他御達

之通追々取調可申事、(公書)

一滋野井殿附添之者共、大義ヲ失シ、総督府之御差図

ヲ不受、長嶋領分江踏越、無筋金子ヲ為差出、官兵

威ヲ振ひ、其他軍法ヲ乱シ、右頭取之面々、山本太

宰・小笠大和・川北真一郎・小林雲遊齋外二三人、

ノ七人其罪大小有之、(三重県)四日市ニおひて皆々首ヲ刎置

申候、夫ヨリ分散不少候事、

一大原前侍(重徳)從殿、今日桑名宿江御出相成、御面会申上

候て、滋野并殿附添、罪状大意申出置候事、

一大原殿・滋野并殿帰京被仰出候由、大慶ニ御座候、

諸所百姓余程こはかり候故、安堵可致事、

一追々飛脚便を以可申上候得共、形勢通兼候事御座候

ハ、下拙暫時帰京可仕、何分御沙汰可被下候、

一総督様、副将様ヨリ参与御方、い細御通達相成申候

間、御覽可被下候、

一長藩木梨精(恒華)一郎殿ヨリ、御同藩江形行被申遣、此紙

上ヨリ細ニ御座候間、御覽可被下義と奉存候、下拙

逆も認出不申、返々御遠察奉願候、

天久保利護氏所蔵本にて校訂

二六 備前藩家老日置忠尚兵庫港発砲一条ニ付

上申

二六ノ一

正月廿九日達書

備前

兵庫港発砲之一条、外国人ヨリ申出候趣ニテハ、各国
公使館ニ向テ、弾丸ヲ飛候哉ニ相聞、其藩ヨリ之書付、

右之境相分不申候間、其節之始末、今一応委敷書付ヲ
以可申出事、

二六ノ二

兵庫港発砲之一条、外国人ヨリ申出候趣ニテハ、各国

公使館ニ向テ、弾丸ヲ飛候哉ニ御聞込ニ相成、先日差

出候書付モ、右境相知不申候間、其節之始末、今一応

委敷以書付申上候様、御達之趣奉承畏候、然ル処右之

事情ハ、先般奉申上候通、先手銃隊中之儀ニテ、於私

ハ前後相隔、巨細之儀、目撃不仕候得共、元来不慮

之事ヨリ差起候儀ニテ、公使館ヲ襲撃仕候杯之考ハ、

決テ無御座候、乍併其場之勢、自然弾丸飛至候哉ハ難

計旨、右隊長共ヨリ申出候、此段奉申上候、以上、

池田茂政、岡山藩主
備前少将内

二月朔日

日置帯刀

二六ノ三

茂政へ達書三通

備前少将家来

日置帯刀

神戸通行之節、行列へ立障候由ニテ、英人へ兵刃ヲ加
へ、剩へ逃去候垂・仏人並公使へ及発砲、理非之応対

ニモ不及、如何ニモ妄動ノ所為不屈之至リニ候、即今更始御一新、国事多難之折柄、深被為惱

日置帯刀

宸襟、就中外国御交際之儀ハ、御国体ニ相拘候重大之事件ニ付、宇内之公法ニ基キ、不損

皇威至当之筋、御履行可被遊

思召之処、御時節柄ヲモ不奉顧、返テ御恥辱ヲ醸候儀、

重畳不容易罪科ニ付、発砲号令之者、各国見証ヲ受可

致割腹旨被

仰付候事、

但罪科人体、明三日ヨリ五ケ日ヲ限り、兵庫表へ護

送致、外国事務掛リ之者へ可申出候、

二月

備前少将家来

日置帯刀

神戸通行之節、從卒共外国人ニ対シ暴発、不容易所業

ニ付、被処罪科候、全同人下知不行届ノ事ニ被

思召候間、謹慎為致置候様、被

仰出候事、

二月

去月十一日、神戸通行之砌、外国人へ兵刃ヲ加へ、発砲ニ及候儀ニ付、公法ヲ以御処置可相成段ハ、御達之通ニ候、即今不可謂多難之御時節、些少之事件ヨリ御安危ニ相拘、大害ヲモ可醸出、別テ如何之至ニ付、公論決定

穀断之上、発砲号令之者罪科ニ被処候ニ付、早々可差出被

仰付候条、

皇国之大事ヲ体任シ、可奉安

宸襟候事、

二月

○按スルニ、前ノ二書ハ、茂政ニ達セシモノニシテ、

少将ノ下家来ノ二字、日置ノ上ニ移シ、本文ト為ス

ベキニ似タリ、二書ノ奉答ハ、茂政之ヲ上リシヲ以

テ、之ヲ徴スベシ、

○三月十三日、忠尚ノ謹慎ヲ釈ス、

二天ノ四

章政家記ニ云、二月二日、岩倉輔相ヨリ、此度神戸

ノ一条ニ付テハ、嚙々其藩一統苦心之程察申候、於朝廷モ御同様、彼是三日モ御評議ニ相成候得共、兎角不決、此上ハ、主上御叡断之外無之卜存、則相伺候処、実ニ其辺被為惱

叡慮、彼是事情言上ノ上、如此、御叡断御沙汰ニ相成候事ニ有之、此度当人儀彼之為ニ死スルト思ヒ候テハ、如何ニモ残念ニ被思候得共、実ニ皇国更始御一新之折柄、右之次第ニテハ如何様之大害ヲ可醸モ難計候ニ付、無拠公法ヲ以テ、御処置被、仰出候間、何卒天朝之為、皇国之為、次ハ備前一国、日置一家之為、甘シテ罪ヲ受候様、懇々被、仰聞候ニ付、京都詰合之者、神戸表へ罷越、帯刀家来共へ、御趣意之趣、詳ニ申聞、斯迄厚キ

叡慮ヲ奉蒙候上ハ、為国家弥感発、御国威不相汚様、覚悟可有之段、及説諭候処、本人初一同甘心仕候、

二六ノ五

録附四日布告書

備前家老日置帯刀、去月十一日、神戸通行之砌、外国公使ニ対シ、発砲致シ候付、於

朝廷以公法御処置、号令致候士官死罪、岡山藩被殺御書三郎正信、帯刀謹慎被

仰付候間、為御心得申達候事、

二月四日

参与

右従、御前御下相成候事、

二六ノ六

三日奉答書

右之通昨二日、御達ニ之趣奉畏候、此段御請奉申上候、以上、

備前少将家老代

二月

池田鞆負

二六ノ七

去月十一日、神戸通行之砌、外国人へ兵刃ヲ加、発砲ニ及候儀ニ付、公法ヲ以御処置可相成段ハ、御達之通ニ付、即今不可謂多難之御節、些少之事件ヨリ御安危ニ相拘リ、大害ヲモ可醸出、別テ如何ノ至ニ付、公論決定、叡断之上、発砲号令之者、罪科ニ被処候ニ付、早々可差出旨、被仰付候条、

皇国之大事ヲ体任シ、可奉安

宸襟候旨、御沙汰之趣謹テ奉畏候、右御請奉申上候、以上、

備前少将家老

二月七日

日置帶刀

二七 大久保利通日記

正月

廿九日

一 参仕、孝元真臣、長州藩士木戸・廣澤ヨリ越公云々ニ付引合有之、岩倉公
へ申上置、可然返詞イタシ候、今日御評議ナシ、

〔表紙〕

忠義公史料 明治元年正月朔日

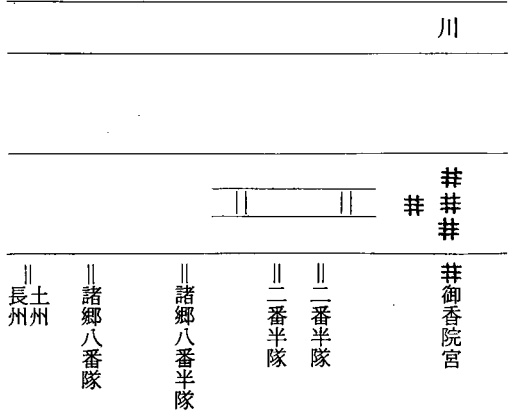
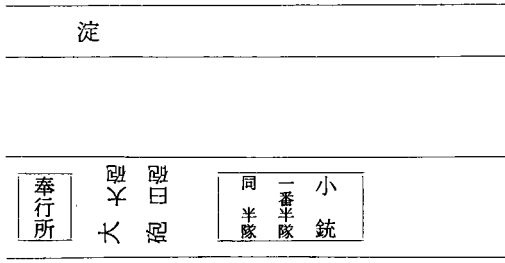
〔扉に、表紙文字の外に市来四郎編の記載あり〕

二八 中原猶助御届書

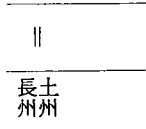
一 壹番大砲隊ノ義、半隊ハ旧臘晦日ヨリ伏見表ノ巡邏警衛被仰付、四斤半旋条砲三挺相携致下伏、小銃隊一番隊鈴木武五郎組・二番隊内山伊右衛門〔組脱カ、内山病氣ニテ、迎見十郎太預〕・諸郷四番隊中村源助組モ同断下伏付、諸手配申談、同所奉行所後御香院宮近辺江宿陣、昼夜無油断巡邏警衛候、此時奉行所ニハ、賊ノ惣督小笠原石見守・大隊長横田五郎三郎・八田篤藏、〔歩兵頭並〕伝習歩兵〔伝習歩兵ハ精銳ヲ撰ミ、昨、昨年横濱ニ伝習出シ隊ナリ〕、右

同ヨリ二大隊、新撰組二百三十人位、会人少々、〔中原尚勇〕拙者宿陣トハ僅老町余ノ処ニテ、睨ミ合居候、然処当月二日夜五ツ時分ヨリ、會兵并歩兵隊讚州高松勢・志州鳥羽勢等、火攻・劍戟相携、舟陸相連致上伏候旨相聞得、早速滞伏諸隊ヨリ巡邏差出致探索候処、弥相連無之、會兵ハ同所本願寺并御香院宮通り、料理屋へ入込休ミ、拙者……モ直ニ見届候付、早速同所御屋敷江罷越、当所兵隊差引島津〔久宅〕式部殿、御軍賦役坂本廉四郎・田代宗次郎・淵邊直右衛門〔高橋〕、諸郷四番隊監軍有馬藤太申談、即時ニ前件出張ノ諸隊繰出、手当申達候、左候テ当地江出張ノ長州・土州ノ巡邏江引合三藩相揃、兵隊一隊宛モ引連レ、會津宿陣江罷越、薩・長・土三藩ノ儀ハ、当地ノ巡邏警衛被仰付、当地ノ固メ罷在候、然処會桑ノ……京地引払ノ朝命……被為在候、火攻・劍戟等相携、多人數上伏相成候儀ハ、何様ノ訳ニテ有之候哉、致応接候処、〔前内大臣警書〕今般徳川内府殿、朝廷ヨリ御召ニ付、明三日被致入京候、先供ニテ罷通候段承候付、其方ニハ御召ノ御沙汰有之筈候得共、私共三藩当地巡邏ノ者へハ、右ノ段イマタ御達無御座候間、成行ヲ以、早速京都ノ参与衆迄、相同越可申候付、

何卒可否ノ御沙汰有之迄ハ、淀辺迄引取相扣居候様、
 申入候処、徳川家重役ノ向々モ出張相成居候付、右江
 相談ノ上、彼方ヨリ返答可致承、一往賊營引取、猶又
 三藩申談早速京都江成行爲御伺淵邊乗切ニテ、京都江
 差越候、左候テ若ヤ御沙汰無之内、押テ致通行候ハ、
 邂逅爲巡邏警衛罷越候任ニ難耐候付、是非繰留可致切
 戦會議致一決、左ノ通手配相固メ如左、



右ノ通手配相固メ、彼ヨリ返答相待候内、昼九ツ時分
 ニテモ候ハン、京都ヨリ援隊トシテ、小銃三番隊篠原
 冬一郎組・四番隊川村與十郎組、臼砲成田正右衛門組
 致着陣候間、亦々左ノ通手配相替候、



竹中丹後守様

右ノ通返答致置、暫クハ問有之、七ツ半時分ニテ候ハ
ン、鳥羽街道ノ方ニ相当リ、遽ニ砲発ノ音烈シク相聞
候処、賊敵俄ニ拙者固メ口、御奉行所柵門押開キ、人
数凡四大隊位、騎馬四五人、先手ハ會兵、新撰組ト相見
ヘ、銃砲・劍戟相携、早三四十間ノ処マテ押来候間、致
込合置候大砲三丁^マヨリ、霰彈ニ發榴彈一發打放シ、続
テ小銃致發射候処、此勢ニ余程致辟易候ハン、柵門涯
一丁余ノ処マテ跡シサリ繰込、夫ヨリ寸隙モ無之、些之
間モ味方ノ砲声相弛ミ候節ハ、會兵・新撰組ト相見ヘ、
鎗刀ニテ駈出、間合三四十間ノ処マテ度々駈来候儀モ
有之候得トモ、味方ノ壯士飯牟禮喜之助・讚良清藏・
肥後平八・入江直次郎・兒玉覺之丞粉骨碎身相働キ追
返シ候、夜入過ニテモ候ハン、淵邊直右衛門京都ヨリ
馳歸リ、賊敵追討之

勅書相下、仁和寺ノ宮様征討

大將軍ニテ御出陣ノ段、相達候処、味方益々力ヲ得、
義氣憤發シ、曳々声ニテ致發戰候処、実ニ神明ノ擁護

ニテモ候半、敵ノ屯集致居候場所江有之候火薬箱江、
破裂彈相貫キ、一時ニ逆発、暫時ハ賊ノ砲声モ絶果候、
夜四ツ時比ニテモ罷成候処、諸方ノ手ハ敵方稍弱リ候
ヘトモ、私共掛口江ハ第一ノ要所ト相見ヘ、敵ノ砲火
少シモ相弛ミ不申、味方ノ彈薬モ希^希ント尽ルニ垂ン
垂ントシ、頗ル致困究候処、長崎篠原清一隊并ニ番隊、
邊見十郎太組半隊、拙者隊ノ左脇、奉行所辺ノ竹藪中
ヨリ責入、シキリニ横矢ヲ打掛、遂ニ長屋ヘ火ヲ懸ケ、
四番隊川村與十郎隊モ後口手ヨリ攻入、此勢ニ賊敵追
々相弱リ、九ツ半時比ニテモ候ハン、諸方一同ニ攻破
リ、賊兵不殘致敗北候、此節四斤半砲二挺右ニ相添、
玉薬夥シク致分捕候、当日ノ戰凡四時計ノ間、更ニ食
事ヲ給候間^マ断モ無之、隊中一同致奮戰候、右戰絶候跡
ニテ、賊敵相固メ候柵門涯相改候処、死骸七八人道頭
ニ倒、柵門涯人家養生所ト相見ヘ場所江、数十人ノ死
骸山ノコトク積立有之候、其余戰初ヨリ半ハ過ルノ手
負・死人ハ、追々船六艘ニテ、豊後橋下ヨリ大坂ノ方
江積送候段、分捕ノ者共ヨリ申出候間、委曲ハ相分不
申候、

一今日ノ戰爭小銃發射ハ數知レス、大砲一挺ヨリ五十發

余モ致放發候、

一 当夜ハ御香院宮前へ致屯聚、徹夜ニテ炮車ノ修復、彈藥ノ仕合等致シ居候処、四日朝又々敵、京橋向辺マテ追々攻登候段相聞得候間、猶亦彈藥仕合等取急キ候得トモ、昨夜數時ノ苦戦、砲車モ余程相損シ候間、分捕ノ砲車ト取替ヘナトイタシ、漸ク五ツ時分ヨリ大砲三挺押出シ候処、京橋下辺ノ敵ハ、早追々相退キ、毛利橋向辺……二番隊并長・土ノ兵、高松勢ヲ挑戦候由相聞へ、右場所江押出候処、唯一ト筋道ノ左右人家江火相掛リ、味方込合難進候間、三番隊遊擊西千嘉組・二番大砲隊大山彌助組一分隊此夜新着荒手申談、敵左右江押出候処、田路狹路大砲押行カタク、竹田街道ヨリ下鳥羽道へ懸リ押行候処、賊ハ追々引取候付、追懸候処、鳥羽街道堤ニテ、昨日ヨリ鳥羽街道江向ヒ候五番隊野津七鎮徳左衛門組・市來勤兵衛組・東寺江致在陣候諸郷四小隊〔改武、異本に改正〕、〔鎮徳〕兵隊并拙者預ノ大砲隊ノ右半隊江モ〔鎮徳〕相会候、猶又追進ミ横大路村・富ノ森村江割拠候敵、二ヶ所追落シ、淀入口迄追退候得トモ、日既ニ西山ニ傾キ、地理モ更ニ不相分候間、諸隊申合せ、兵ヲ横大路村江引揚ケ、当夜ハ同所江致宿陣候、

一 当夜坂本・田代・淵邊・大山杯申談、兎角狭道一口ヨ

リ責懸リ候テハ鳥羽街道ハ左、右皆深澤ナリ、味方ノ手負・死人多ク、勞致難渋候付、鳥羽街道ヲ中道ニシテ、大手山崎街道・左右伏見街道ヨリ、淀川堤筋三方ヨリ攻懸候方可然致手配、中道ヨリハ三番隊・五番隊・六番隊・諸郷一隊伊十院二番砲隊大山彌助組六丁・拙者隊大砲五丁・白砲〔遊脱力〕二挺大砲損候付、俄都合六隊押行、右手山崎街道ヨリ、一〔遊脱力〕番撃隊小倉壮九郎組・諸郷一隊伊十院、足輕隊川路正之進組半隊、伏見街道ヨリ三番遊撃隊、私領隊〔貞徳〕龍知〔兼豊〕、二番三番遊撃隊大迫喜右衛門組、伊集院與市組、白砲打手ノ為応援差廻シ攻掛候、

一 五日早天ヨリ、一番隊荒手ニ付、先鋒ニ相進ミ、其外諸隊押行、拙者隊ハ砲車ノ修復、并玉薬仕合方相調兼、其上昨夜ヨリ兵糧不行届、甚致難渋、後陣ヨリ押行賦候処、四ツ時分ニテ候半、先陣追々難戦ニ付、早く大砲押出呉候様、度々申来候得共、今以兵糧不行届付、其内携白砲二丁文先ニ押出シ置、二番砲隊ノ兵糧無和利致相談、配分ニ預リ、喰仕舞早々押行、是迄先鋒既ニ淀入口敵方ノ台場近マテ取……罷在候ヘトモ、二番砲隊砲車段々相損シ、漸一丁ニテ相對へ、敵ノ放火甚

夕劇シク、身方^(味)余程難戦、此ノ処江致屯集居候敵ハ、會津・桑名・大垣并見廻組ニテ候、旗本ノ二男・三男ヲ集、合隊ノ体ニテ、拙隊ノ大砲三挺、敵合一丁計ノ処マテ押出シ、声ニテ奮戦、繰打ニ致連発候処、敵大キニ致動揺、遂ニ台場ヲ捨テ逃去候間、跡ヲ慕フテ追付々々攻撃候処、遂ニ二ノ台場ニモ堪へ兼、淀橋ノ方江致敗走候間、益々致發進追詰候処、賊徒淀橋涯左右江待請致登体、互ニ打合候内、敵ヨリ橋ヲ燒落シ、味方小銃隊モ追々近続キ、山崎街道・伏見両方ヨリ責掛ケ、味方モ追々相集リ、盛ニ致發發候間、敵此処モ溜リ……市中江火ヲ懸、八ツ時分ニテモ候半、橋本又ハ八幡ノ方江不殘退散候、此日暫之間争鬪余ニ烈シク、味方ノ玉葉十分不相続、多クハ敵ノ分捕ニテ致砲發候……、最初一ノ台場江攻掛リ候節ヨリ、二ノ台場攻落候節、……味方ノ大砲焔并火道ノ加減等モ至テ宜シク、大出来ニテ仕合ニ候、三ノ台場責落候節、大砲三丁打捨有之候得共、分捕ノ暇無之、跡ヨリ押来ル諸隊分捕ス、

一八ツ半時分ニテモ候半、

征討將軍仁和寺宮様、淀入口マテ御出張候由相達候間、

吉井幸助申談、諸隊引揚、淀江ハ一番・二番ノ遊撃隊、并伊十院與市隊、諸郷二小队差置、外隊ハ暫ク息ヲ次……、大砲隊共当日伏見へ引取、砲車修覆、玉葉……仕合ニ取掛候得トモ、大砲損ノ所ハ、伏見ニテ調兼候付、半隊モ差置、其余ハ致掃京、当分折角ノ修覆中ニテ御座候、

一当隊江分捕ノ大砲八挺、其余玉葉・要具ハ不数知、拙者ニハ采配一本、策一本、銀ノ号笛一ツ、指揮役体ノ者持居候、分捕置候、

壹番大砲隊手負・死人ノ覺

小頭汾陽尚次郎組

服淑シ……丸貫キ 大山源右衛門

右辰正月三日夜入過、於伏見御香院下戦死、

飯牟禮喜之助

疵、左ノ脚以下銃丸打貫キ深手

小頭

川南直次郎

深手、死命ニ差支無之、左之乳迄深手

戦兵

伊地知彌兵衛

明治元年(1868)

死命世話ナシ、右足浅手

玉葉方

廣瀬喜兵衛

手負ハ死命ノ世話ナシ

卯十二月晦日ヨリ伏見出陣ノ人数一番大砲隊、

右半隊小頭

右腕浅手

右同日、於同所手負、

戦兵

伍長

入江直次郎

火傷

川上彌七

右之足浅手

松元直之丞

右之腰浅手

坂元彦兵衛

兒玉覺之丞

伊地知彌兵衛

伊東猛助

深栖彦五郎

右三人、正月四日於鳥羽街道手負、

右同

伍長

肥後平八

左脚浅手

柴山矢八

右正月五日、於淀橋涯手負、

石神万右衛門下人

即死

太郎

小頭

集成館人足

八木新兵衛

火傷

喜兵衛

福島喜十郎

右正月四日

都合即死二人

山内孝次郎

手負九人

伍長

津留八之進

隈元太一左衛門

普請方

有川藤七郎

伊地知矢八郎

重久道榮

玉藁方

濱島新次郎

廣瀬喜兵衛

汾陽直次郎

付役

黒田平左衛門

谷山壯太郎

西田藤助

正月三日朝ヨリ鳥羽街道出張ノ人数、左ノ通、

田中壽之丞

一番大砲隊

淵邊八郎次

右半隊

大山源右衛門

小頭

指引

石神萬左衛門(ママ)

中原猶助

伍長

監軍

國分覺兵衛

半隊長

柴山四郎兵衛

飯牟禮喜之助

猿渡清右衛門

分隊長

税所佐一郎

讚良清蔵

餅原正之進

喇叭役

小頭

肝付矢四郎

川上彌七

大迫新次郎

明治元年(1868)

伍長

肥後助左衛門

龜澤源右衛門

重久七之助

平尚之助

勝部謙助

千田正左衛門

新納左平太

小頭

岩元平八郎

伍長

岩城彦四郎

諏訪次郎右衛門

東郷八次郎

原田新左衛門

三原藤太郎

松元直之丞

森山新六郎

小頭

大河平武輔

仁禮孝右衛門

柴山矢八

東郷巳之助

山口彦八

坂元彦兵衛

西郷彦左衛門

分隊長

川上四郎次

小隊長

平吉左衛門

兵糧方

種子島城助

人馬方

家村伊之助

付役

岩重伴次郎

二九 新納久脩ヨリ島津廣兼・岩下方平へ書翰

今二日、平運丸大坂出帆イタシ、神邊沖江日入時分通

船イタシ掛候処、幕艦式艘前後ヲ曲転イタシ候様子、如何イフカシク見受候内、平運丸ニハ殆和田之岬江參掛候折柄、幕艦回陽丸ヨリ一發砲發イタシ候処、其玉的中不致、再一發ヲ發候処、士官室打貫、此方ヨリハ全ク放發不致、直ニ後退ヲ掛、回陽丸方江為進候処、最早日没候時分ニテ、夫形放發ヲ止候由ニテ、夫ヨリ当港江入碇イタシ、五ツ時分申出候折柄、英国岡士代、ドウダ并日本語通弁人ラヘツトフレタ方ヨリ參居候、則白山始承リ申立候趣ニテハ、開港地港内ニテ放發イタシ候儀ハ、甚以不条理、万国之公法ニ相掛無之儀ニ候条、若シ明日ニテモ放發イタシ候ハ、必ス港内ニテハ不可応、白旗ヲ立テ幕艦ニ乗付、何ニ故ヘ港内ニ於テ放發イタシ候哉、兵状ヲ可主筋アラハ、港外ニ於テ可戦ト云ヘ可置、其上不相變放發イタシ候ハ、各国軍艦之内、何ニテモ差越云々之次第申聞候様可致トノ事ニテ、カナラス港内等ニテ、暴發イタシ、スベカラストノ事ニ有之候、拙者ニモ翔鳳丸一左右モ有之、眼前放發ヲ受候段、承届候儀ニ付、片時モ黙止罷在難忍候得共、当港五艘程碇泊イタシ居候折柄、無謀ニ兵端ヲ相開候テハ、則薩・幕私之兵乱ヲ開候訳ニテ、当節柄

名義モ難相立候付、斯迄彼ヨリ暴發、手ヲ出候共、御地議事院ニヲヒテ、公論ヲ尽シ、堂々タル朝廷命ヲ奉シ、其罪ヲ正候テモ、遅キト申場合ハ有之間鋪、前後深く勘考ニヲヨヒ候儀モ有之候、白山及ヒドウダ杯之申出通ニモ、人心參リ兼候ニ付、明日之時機次第、臨機應變之所置イタシ度、此段早々及御掛合候ニ付、此方之動靜ニ不聞御尽力可給、此段御掛合申越候、以上、

新納刑部

島津 伊勢殿

岩下佐次右衛門殿

島津忠義家記

三〇 五番隊長野津七左衛門鎮雄日記

坂元愛之丞日記(筆丸)

五番隊長野津七左衛門鎮雄日記ト、大同小異ナレハ、別ニ写シ載セサルナリ、野津カ日記ニシテ、愛之丞筆記セシモノト見ヘタリ、

正月三日 晴天

一今朝六ツ半時前、本宮役所ヨリ御用有之罷出候処、徳

明治元年(1868)

川家来ノ者共并會・桑ハ勿論、豫州松山・志州鳥羽村・濃州大垣等人数、昨日ヨリ戎服大小砲携入京ノ向ニ付、鳥羽街道へ人数繰出シ、上京ノ儀ハ不相成候付、何分朝廷ヨリ御沙汰有之迄ノ間、差扣罷在候様応接可致、万一承服不致時ハ臨機ノ取計イタシ不苦段、御内命有之付、一番大砲隊・六番隊・伊集院隊・高岡隊・加世田隊被差向候テ、地理ニ依リ申談、可然様可取計旨致承知張出候事、五番隊出張人数左ノ通、

野津七左衛門

大山十郎次

山口孝右衛門

坂本愛之丞

郷田正之丞

山口喜左衛門

松永清之丞

吉井叶

小頭見習

愛甲嘉右衛門

同

益満宗之丞

監軍五日戦死

椎原小彌太

監軍

山口仲吾

斥候兼狙撃

川上源七郎

大寺矢七

相良五左衛門

木藤清次郎

川崎清左衛門

廣瀬喜左衛門

山口十蔵

坂本仲蔵

山元庄之助

戦兵

有馬次兵衛

本田清之丞

有川彦右衛門

桑波田角右衛門

野崎喜左衛門

市來十左衛門
佐々木彌七郎
鎌田六郎次
江田正之丞
村田愛次郎
河野助五郎
瀬戸山吉兵衛
兒玉市左衛門
最上孫左衛門
石原半右衛門
山本鐵之進
齊藤藤太
伊瀬知庄左衛門
宮田佐八郎
河野市次
黒江八左衛門
横山彌助
谷元六兵衛
益山新太郎
上村彦之丞

五日手負

川崎兵十郎
税所笑右衛門
八木猪之介
四本甚七
新納台助
大迫新八郎
市來萬兵衛
丸田八郎太
林權一郎
竹下半次郎
石原真助
相良新右衛門
永瀬清左衛門
大河平源助
黒江喜次郎
相良為次郎
河野為兵衛
伊勢佐七郎
黒田次右衛門

松元與八郎

鷓木五左衛門

池田仙之丞

太鼓及喇叭役兼

大迫市郎左衛門

染川彦左衛門

安樂六郎

玉葉方

相良雄之丞

本田休左衛門

内山仲七郎

人馬方

益山良助

中島仲兵衛

白石奎左衛門

兵糧方

林宗九郎

染川源五郎

折田十郎

普請方

岩山佐平太

吉留與一左衛門

土師庄之進

神田玄淳

美代清之丞

右人数双松御邸五ツ時繰出シ、東寺迄出陣、夫ヨリ監

桂徳之丞

軍椎原小矢太・山口仲吾右半隊人数并斥候役山口十蔵(監)

武元庄五郎

外三人、鳥羽街道へ押出セリ、是ハ早ク味方ノヨキ地

宮ノ原孫左衛門

理ヲ見立シノ為也、時ニ橋兵、會・桑兵ハヤ上鳥羽中

伊地知清八

ノ橋迄出掛居レリ、則チ監軍椎原・山口

有馬十郎次

朝命ノ旨ヲ達ス、敵左様ナラハ一往扣ヘ可申ト、一町

渡邊勇九郎

計リ引退ク無間、彼方二人参リ、長州ノ方ハ人数取調

八代次助

ノ上、差通候様承知仕候得ハ、御藩ト長州トハ相違イ

タシ居候付、

朝命ニツニ出ル訳無之候得共、今一往長州へ引合申度段申出候付、右二人ヲ椎原・山口・斥候三人同道ニテ長州へ引合候処、不相替同様候、其俣右兩人モ左様ナラハ、今一往

朝廷へ御窺被下度、夫迄ハ本陣迄引取居候様可仕候付、何分相知次第第二ハ早目相達シ呉候様、申置候テ引返ス、此時左半隊モ繰出シ、来ル賊僅一町ヲ隔テ居ケル所ニ、味方諸隊談合シ、左右へ分配シ、散隊ヲ田畑へ立付ケ待ツ、其時一番大砲隊モ半座繰出来リ、則街道真直ニ押出シ、惣ヲ付テ待テハ賊ヲト辟易シ、四五町川原迄引退ケリ、夫ニ付ケ掛ケ、川原へ繰出ス、又賊一二町退ク、又付ケ掛ケ、小枝橋ヲ渡リ越ス、此所味方ノ地理十分ノ場所ナレバ、二三軒百姓家ヲ借入、陣所ヲ定メ、大砲隊・六番隊談合シ、城南離宮社前、前後左右へ手配シ、鳥羽街道正面へハ大砲一挺、左脇ニ五番隊、其又左ニ横打ニ大砲三挺、又城南離宮後ノ辺ヨリ油小路ニ掛ケ、加世田隊・高岡隊・伊集院ヲ立付ケ、右ノ^(隊脱力)方本道西側川土手竹山ヨリ、横矢ヲ打撃ニテ、六番隊伏シ隠レ居、四方ノ手配十分相整テ待掛タリ、尤本道

番兵等出シ置候処、右番兵ノ内ヨリ四人計斥候トシテ、二三丁モ出掛候得ハ、賊連隊押シ来リ候付、此所ニテ繰止置、皆頭ノ張出場へ引返ス、時ニ賊二人飛脚ナリト云テ通り掛ル、直ニ応接スル内、又騎馬三人駈来ル、是モ共ニ番兵ノ人数ヨリ、大手ヲヒロケテ押しメタリ、無間又賊二人来ル、番兵之人数へ椎原小彌太殿へ面会イタシ度候得ハ、御通シ可給旨イフ、直ニ椎原・山口出テ応接ス、然処イマタ

朝命何タル事モ不相知候哉ト問フ、イマタ不相分候ニ付、暫ク御待可被成ト答フ、賊申ニ、最早左様ナラハ時刻モ相後レ候、是非罷通り可申トイフ、兎角御聞入ナク御通り被成事ナラハ、御勝手次第ニ御通り可被成、此方モ

朝命相達居候事ニ候得ハ、臨機ノ取計可致候付、少シモ不苦トイへハ、賊左様ナラハ可罷通トイヒテ、連隊押立来候付、直ニ椎原小彌太・山口仲吾モ静々ト引返シ、味方ニ其段相通シ候テ、急速喇叭ノ相凶ナラスヤ否ヤ、街道中央ニ相備置候四封度半ノ大砲打放、小銃ハ田ノ中ノ丸岡竹藪へ、前ヨリ設置タル事ナレハ、霰ノ降ルコトク打掛ル、又城南離宮ノ社前ニ備置候四封

度半大砲三挺、一同横矢ニ打放、六番隊モ頭ヨリ設ケ

居タル事故、街道筋西側川土手竹山ヨリ同断、横矢ニ

打掛、又吾隊ノ一分隊後へ扣置候援兵隊、時分ヲ見合、

街道中央ノ大砲左側田畑へ散開シテ打掛ル、皆十分ノ

鰐ヲ付テ打矢先キナレハ、賊ニ列側面ノ備モ蜘蛛ノ子

ヲチラスガ如ク散乱ス、程ナク日モ暮ケレハ、打方止

メノ令ヲ下シ、一同凱歌ヲ挙ケ、無二無三ニ馳入り、

敵円リ居候入カ家ヘシユントロスヲ以テ放火ス、時ニ最

早賊兵一人モ不相見得、敵日丸・小指旗・大小砲・要

具等投捨、死骸モ数多倒レ居レリ、一先味方集合ノ喇

叭吹ナラシ、縦隊立付ケ、静々ト本ノ陣所へ兵ヲ揚、

手負・戦死相改候処、味方少モ傷候者無之、威風凛々

トシテ、イカナル鉄壁モ瞬息ノ間ニ打碎ヘキノ勢、実

ニ初戦ヨリ愉快トモ申ヘク、又城南離宮ノ後ノ方ヘ油

小路竹田街道迄迄、相備居候諸郷隊モ、離宮ノ方丈ハ

鳥羽街道へ向ケテ打掛ル、左候テ暮過暫時闘争相止リ、

此時

御所ヨリ御書付相下リ、我隊縦隊立付、平伏ノ処ニ野

津七左衛門中央ニ出テ、高ラカニ読上ル御書付、左ノ

通

尾張大納言

越前大蔵大輔

昨日ヨリ今曉ニ至リ、坂兵戎服大砲等携、追々伏見表
出張ノ趣、如何様ノ儀候哉、兼テ兩藩言上之次第トハ
総テ齟齬、不容易進退其尪難被差置ハ勿論候得共、尚
前々周旋ノ筋モ有之候、旁右人数引払候様取計可致候、
若不奉命ノ儀ニ候ハ、不被為得止ノ場合ニ付、為
朝敵以テ御所置可被在旨 御沙汰候事、

薩州

別紙之通尾・越兩藩へ被仰渡ニ付テハ、坂兵可引取候
得共、万一押テ登京ノ儀申立候哉モ難計、其節ハ穩便
応接ハ勿論、不得止時機ニ至リ候ハ、別紙御趣意ノ
次第、所置可有之事、

正月三日

但長・土・藝等へ同断被仰出候間、尚申合所置可有
之候事、

一初之一戦相済テ、諸郷隊監軍種子田左門二本松御邸之
様馳歸リ、戦争之次第具ニ御届申上候処、
太守公ニモ御満足ニ被 思召、尚此上嚴重ニ手当イタ
シ候様、不取敢御褒詞ヲ蒙リ候事、

朝廷へモ御届相成候処、初戦ヨリ一統相働

叡感ニ被思召候、尚此上尽力イタシ候様、御褒詔奉承知候事、畢テ又本之通手配ス、是ヨリ先鬪争中ニ、西側沼之中ヨリ、野崎喜左衛門外ニ二三人後へ廻リ候処、賊相見得居、右喜左衛門直ニ射倒シ、首ヲ刎テ引提来ル、此時長州三浦五郎殿一小隊来リテ、縦隊ヲ立付、頻ニ右首級ヲ所望スルカ故ニ差遣セリ、初発シ鬪争相止テ直ニ敵之捨置タル鉄砲、其外要具ヲ分捕ス、暮過鳥羽街道受持之諸隊隊長・監軍相集評議ス、夜分之戦ヒハ大事ナルカ故ニ、就中今晚ハ暗夜ノ事、誠ニ敵ハ大勢ナリ、進退スレハ味方ヲ損シ、又ハ味方打スルハ、案中ナルカ故、敵敵數押寄スルトイヘトモ、爰ヲ台場ト心得、防戦スルカ肝要ト吟味相決シ、其場ヲ別レテ銘々各隊ニ相達ス、吾隊援隊人数ヨリ一町余隔テ、番兵ヲ出置ケリ、半町計ニシテ四列モ交代ヲナセリ、皆味方之方燈火ヲ禁ス、又街道中央之大砲、左ニ人家ノ畳ヲハキ取、楯ヲ作りテ潜ミ隠レ、敵ノ奇ルヲ待テリ、田中・丸岡之伏兵、交代之道ニハ幕ヲ張りテ、蔽ヒ隠ケリ、又丸岡味方之方ヲ出入不自由ナル故、蠟燭之火ヲ燈シ立置ケリ、前文燈火ハ禁スレトモ、此所少モ敵

ニ不構場所ナレハナリ、然ル処四ツ過、城南離宮之後ニ備居候加世田・高岡之二小队ニ向テ小銃ヲ打掛ル、直ニ応砲敵打放、此戦二分時間モ為有之ト覚ヘタリ、此鬪争中伊集院兵掛口難戦故ニ、吾隊ニ援兵ヲ乞、直ニ城南離宮之方へ向ケテ、大砲三挺吾援隊一分隊、田畑ニ散開シテ打掛ケントシタレトモ、敵打止引退候得ハ、又本之通援隊扣之場所へ引取タリ、夫ヨリ九ツ時分、鳥羽街道ノ正面へ張出居候番兵へ、小銃打掛候処、番兵馳歸リ、本隊へ通ス、然レ共敵ヨリ之砲數少々ノ事ナレハ、味方ハ至極潜リ居候処、案ノ如ク間近ク寄り来リ、時分ヲ見合、喇叭ノ相囀ヲナス、直ニ大砲ハ勿論、伏兵ノ小銃打掛タレハ、敵ヨリモ打掛タル、味方我ヲトラシト打掛ル故ニ、終ニ打碎レテ、散々ニ敗北セリ、故ニ発射ヲ止メテ潜リ居候処ニ、敵ノ方ヨリ誰レトモ知レン者馳来ル、土工方津留金次郎アヤシク思ヒ、飛掛テ一太刀ニ打タヲセトモ、具足シタレハ格別之痛モナシ、則其俣縛捕テ二本松御邸へ送レリ、是賊生捕之初ナリ、此者糺問シタレハ、桑名人ニテ余程能キモノト見得タリ、其後正面之目当トシタル人家之火鎮候故、大砲隊ヨリ未焼残居候人家へ、火ヲ掛呉候

様申候付、吾ガ援隊引列レ、窃ニ差越火ヲ相掛ル、左スル内ニ敵ヨリ見当リ付、小銃打掛候付、早々引取レルモノナリ、亦夜明前敵押来リ、大砲隊六番隊・五番隊暫時カ間相戦、畢テ無程夜モ明タルナリ、

同四日、晴

今六ツ過、伏見出張之一番隊小頭見習中村半次郎外ニ、西郷信吾馳来リ、今朝ハ一番隊、伏見之方ヨリ鳥羽街道へ向ケテ、横矢ニ攻掛ル賦ナレハ、其心得可給トイフテ、右兩人又伏見之方へ直様引返ス、鳥羽各隊へモ其段相達シ、無間五ツ前ヨリ大小砲共ニ打合、押寄ル処ニ、吾隊四番分隊之戦兵岩山佐平太、先鋒ニ進ミ行シカ、桑名人加治新九郎ト申者、土手下木蔭ニ隠レ伏シ、打矢ニ岩山戦死セリ、直ニ味方相良五左衛門・美代藤之丞・村田愛次郎・坂元愛之丞、小銃ヲ以驟ヒ打ハ、其矢皆少シツ、中レリト見エ、其倭賊持筒投捨、太刀拔放テ、坂元ニ向テ来ル内ニ、悪口ヲ吐テ、ナニベラボフ薩賊カ、吾ハ全義之桑名人ゾヤトイツテ、坂元ガ前ニ立リ、坂元何ニテモ殺シ来テ見ヨト、太刀抜合田畑ニ待テハ、敵知り相掛テ打掛レト、頭ラノ彈丸ニヨハリ居ケン、ウツフシニ斃ル所ヲ量ミ掛テ、五太

刀計リ打タレトモ、矢張ムジ／＼スレハ、脇差ヲ以刺セリ、是ニテ佐平太之敵ハ顯然打取タリ、味方一同下鳥羽入口ニ掛レハ、賊人家へ隠レテ小銃打掛ル、味方大小銃敵敷打掛、又ハ人家へ放火シテ、正面ヨリハ一番大砲隊・五番隊、左之方田畑ヨリハ一番隊、後之方川原ヨリハ六番隊、其外諸郷兵等三方ヨリ押掛レハ、下鳥羽中比菊亭殿所用米藏前ニ、米俵ヲ以台場ヲ築居レリ、此所暫時之間、味方大ニ苦戦ス、乍然爰ヲセンドト、大小銃打掛レハ、終ニ賊要具モ投捨、散々ニ逃去レリ、此辺ニテ一番隊ヨリ騎馬武者式人射落シテ、乗タル馬ハ分捕スト聞ヘケリ、爰ノ戦、実ニ外隊之力ヲ以、打崩之仕合ナリト覚ヘタリ、是ヨリ先キ戦争中ニ、川原六番隊ヨリ一小頭来リ、苦戦故ニ吾隊ニ援兵ヲ乞、則一分隊位横矢ヲ入ヘシト、人家ノ後竹藪之内ヨリ継参リタレトモ、右藪ヨリハ掛リ口ヨラサレハ、又其形敵之方へ左ヲ廻レハ、丁度矢先ニ出タリ、爰ニテ人家へ隠顯シテ打掛ケタリ、此戦争打止テ、吾カ隊集合シ、手負・戦死相改候処、岩山一人戦死ノミニテ、外ニ手負モナシ、夫ヨリ正々堂々ト足並ヲ揃ヘテ、七八町モ先キマテ押掛候処、新手十二番隊・三番遊撃隊

等繰出し、交代シ、是ヨリ此日ハ救心隊トナル故ニ、五六町引返シ、俵台場之所ニ暫時休息シ、筒改洗方等ヲナス、昼飯ヲ爰ニテ喰ス、小銃数発打タル後ニ、暫時休息スルノ隙アレハ、筒洗ハセスンハアルヘカラス、又彈丸運送ニ氣ヲ付、隊ヲ不離様ナラレス大キニ心配ス、初戦之場所ヨリ俵台場之所迄、僅七八十町之間ニ、賊斃レ居ル者共数ヲシラス、是ヨリ新手之諸隊、鳥羽之出迦レ富之森ニ押掛レハ、又四斗樽ニ砂ヲ入、疊ヲ重ネ、楯ヲ取りテ防キ戦フ、此時ハ吾隊救心ニナレハ、打合人家へ入テ、救心スルノ時ヲ待、此日長兵モ鳥羽街道先鋒之命ヲ蒙リ、薩兵先鋒ト共ニ進撃ス、薩モ長モ此戦ニ数多手負戦死セリ、折柄進撃スル傍之人家へ火ヲ相掛、進退不自由ナルカ故、先鋒隊一旦式丁手前へ引取りテ、嚴重ニ相備テ待テリ、其内日モ早暮タルナリ、我隊大鋒隊ヨリ二三丁ハナレテ、人家四軒ヲカリ、人々夜休息セリ、尤今夜中格別合戦モナケレハナリ、

同五日 晴

今朝各隊隊長・監軍相集、伏見街道山崎之方、鳥羽街道一諸ニ攻立ツヘシト、評議相決シテ銘々相至レリ、各

隊ニ相達シ、伏見之方拾二番隊・臼砲隊・長兵・因州兵、山崎之方ヨリハ四番隊・三番隊遊撃隊ナリ、六番隊・吾カ五番隊・一番大砲隊・二番大砲隊、鳥羽街道ヲ押掛ル処ニ、又昨日防戦シタル賊トモ踏止リ居、大砲打掛ル故ニ、大砲ト共ニ小銃モ正面ヨリ打放、又左右之川原沼等へ散開シテ、六番隊・五番隊打掛タリ、三番隊モ沼之方ヨリ打掛ル、此戦ニ監軍椎原小彌太・六番隊長市來勤兵衛（政武、異本に改正）右兩人戦死セリ、吾カ隊三番分隊之戦兵丸田仲之丞・同四番分隊之戦兵宮之原孫左衛門、同太鼓役染川彦左衛門、此三人爰ニテ手負ナリ、大砲隊・六番隊等外ニ、手負戦死モ何レトモ爰ニノセラルモノナリ、終ニ四ツ半時分ニテモ候半、賊打碎レテ淀之川向マテ逃行ケリ、鳥羽ハ勿論、伏見之方ヨリモ凱歌ヲ揚テ、付掛ケ〜淀迄追詰タリ、俵台場之所ヨリ淀迄之日二日之戦ヒニ、又賊斃レ居ルモノ其数ヲシラス、然ハ賊又川向ニ小高ク土手ヲ築キ、疊等ヲ以テ楯ヲ取り、大小砲敵敷打掛ル、味方追々馳來ル、透間モアラセス大小銃打掛レハ何カハタマルヘキ、散々ニナリテ、橋本・八幡ヲサシテ逃落タリ、敵落行ニ、跡ヨリ追カケラレテハタマラシト思ヒケン、大橋・小橋ヲ

焼落シ、市中モ放火ス、又味方大砲彈藥ヨリ起リタル火モアルヘシ、橋落テハ味方便ナラサルカ故、暫時之間ハ、各隊夫卒ヲ集、消サントシタレトモ、早少シ焼落シタレハ、取止待レリ、皆三方之各隊兵隊爰ニ群集シ、一旦鉞々陣所ヲ定メリ、吾カ隊中酒肴ヲ取入レ、邪氣ヲ払ハンカ為ニ、皆少シツツクレルモノナリ、右スル内ニ、錦ノ御旗征東將軍仁和寺宮白熊之毛兜メサレ、錦之直垂ニ小金作りノ太刀ハキ給ヒ、太ク遅シキ馬ニ轡ヲ鳴ラシ、静ニ押テ御巡見ナシ給フニ、皆官軍アリカタサニ涕ヲウカヘテ、拜ナカラ誰作リトナク、凱歌ヲ挙テ勇ミ立テリ、副將軍東久世篤丸之南ニハ、引建烏帽子ニ錦之直垂ヲ着シ、馬ニ乘リ家々ノ紋付タル旗押立、前後ニ被付添、尤各隊兵隊モ召列レ給ヘリ、七ツ時分六番隊・五番隊等ハ、今日迄三日ノ戦ナレハ、兵ヲ勞シ、又淀迄攻落シタル上ハ、イツレ浪華之方ヘ押寄せスンハアラス、左スレハ是迄ノ手配トハ大キニ相違セサレハ、不相濟事故、今一往御評議モ可有之候得共、新手之兵ト交代シ、一先可罷帰ト承知ス、則右趣ヲ隊中ヘ相達シ、二本松御邸之様帰陣之中途ニテ、諏訪大夫ヘ行逢ヒ候処、御沙汰之趣相達候付、暫時

踏止候様致承知、小隊止之令ヲ下シ、一統謹テ承知奉ル趣、先日ヨリ戦争之次第入、御聴候処、一統粉骨相働候段、御満足ニ被思召、自分後日屹ト御褒詞モ可有之候得共、先不取敢其段相達候様、我等御遣シニ相成、乍途中行逢候付相達候、右畢テ中途ヘ兩度休息イタシ、双松御邸ヘ夜五ツ時分着セリ、淀ヨリ不帰シテ進撃致度モヲモヘトモ、イツレ我受持之場所十分突破候得ハ、我苦ラシテ人ニ楽ヲアタフルノ場ナレハ、一旦帰リテコソ、乙名敷所ナラントヲモヒ帰ルモノナリ、御邸本御門内ニ入テ、縦隊立付、直ニ凱歌ヲ挙侍レリ、夫ヨリ其俛休メ置、本營役所ヘ届申出レハ、三日ノ戦ヒニ勞レタル筈ナレハ、今夜中イカナル變動アリトモ、静ニ相休ミ候様、又御賄等被成下候旨承知ス、則隊中ヘ其段相達シ、今夜休息ス、御酒・鯉節等モ被下、実ニ難有事共ナリ、

同六日 晴

一椎原小彌太、相國寺内林光院ヘ市來勤兵衛ト合葬ス、
 一九時、吾五番隊 太守様御目見被仰付候旨致承知、罷出候処、御書院ヘ 御出座、御直ニ先日ヨリ連日之戦ニ、一統尽力イタシ、実ニ大儀ニ候半、尚此上頼存ル、

右之通御沙汰承知、実ニ難有事ナリ、

三一 種子島時房日記

明治元年正月

種子島時房日記

一 正月三日早朝、平吉左衛門殿ヨリ、一番大砲隊中他出不致様通達相達、五時ニモ候半、早々鳥羽街道幕勢罷登候間、早々出張候様被仰渡、直ニ出張相成、兵糧方廣瀬喜兵衛・伊地知矢八郎伏見ノ様出張相成居、家村猪之助兩人、早々玉葉前車へ積付、用心イタシ、一左右次第相増候様承知イタシ、拙者ニハ兵糧贈り方トシテ、兵糧夫畷次郎召列、四ツ過鳥羽街道ノ様打立、家村氏玉葉要具跡ヨリ送被參賦ニテ、先ニ差越、病後ニテ兩所相ヤスミ、漸クハツ過分鳥羽小枝ト云処ニ、一番大砲隊・五番小隊・六番小銃隊陣へ相成、兵糧大砲隊中へ相送り相扣へ居、七ツ過家村氏玉葉持參、夫ヨリ幕勢下鳥羽へ一大隊余相備ル段付候、椎原小彌太・山口仲五杯ヨリ承り、追々小枝ノ方押出候段注進有之、大鐘前小枝ヨリ二町位、幕勢新撰組歩兵會津・桑名押出、

椎原氏・山口氏応接ニ差越候処、我々ハ

朝廷へ歎願ノ趣有之候間、鳥羽街道罷通段、此方ヨリ

ハ

朝命ニテ此処御通申儀、絶テ不相叶候段、相答ヘラレ候処、於其儀ハ此処踏破罷通段申掛、其節手切ニテ、此処敵一町位ノ間、大砲打出、小銃隊一緒ニ同断、大砲隊兩発打込ミト、直様敵兵街道双方竹藪へ數十人逃込、右ヨリ小銃タへ間ナク打出、其余皆々退散、間モナク夜入此処大砲三挺、小銃三四、十挺分補火薬過分補ル、六番小銃隊右竹藪後廻リ、小銃打出候処、彼兵モコトク退散、夫ヨリ大砲打止、小銃同断、直様此所小枝ヨリ一町半位、タン上ト云処人家へ、此方ヨリ火ヲ掛、夜入四ツ前、田ノ中ヨリ散兵相廻リ、夜中小銃打合、伏見ノ方一番大砲隊二砲車十二月廿九日ヨリ差越、堅メ居、小銃隊一番ニ番・三番・四番隊迄差越居、長州勢三小隊此方モ三日大鐘時分、鳥羽同様応接有之候由ニテ、鳥羽ノ方大砲打出ト合戦相始り、夜中砲声相聞へ、尤火ノ手盛ニ相見得、夜明時分砲声相下リ候ニ付、是モ勝利無疑相察シ、伏見奉行所合戦、三日ヨリ其夜明迄至極難戦ノ由、夜明奉行所火相掛リ、落城相成、竹田街道土州勢堅メ、

明治元年(1868)

此処會勢攻破候由、此勢加世田郷兵城南宮安樂壽院ノ間、武田通・油小路通ノ間相堅メ候処、竹田街道ノ會津兵後ニ相廻リ、夜九ツ時分郷兵難戦ノ筋相見得、大砲援兵イタシ呉候様申参候得共、何分夜中故援兵不出來、此兵モ間モナク追退ケ、夜明迄ハ伏見竹田筋鳥羽街道小銃打通シニテ候、

三三 長州へ伏見警衛仰出

明治元年正月三日

長州

坂兵出張不容易趣言上ニ付、猶又伏見表防禦筋精々尽力可有之、尤早々人数相加、嚴重警衛可致被仰出候事、

正月

追テ土州・藝州へモ同様被仰付候事、

三三 平吉左衛門戦況届書

正月

大砲隊ニテ小隊長平吉左衛門、伏見・鳥羽戦争之趣

申越ス書面

一戊辰正月三日、一橋・桑・會等多兵上京ノ趣風聞ス、因テ小銃六番隊東寺宿陣之郷兵四小隊合兵シ、下鳥羽街道相固ム可ク命有テ、二本松邸ヨリ大砲四挺繰出、行軍シ、東寺ニ着陣シ、五番・六番隊合兵シ、鳥羽街道ニ向フ、昼八ツ時分敵方魁兵ト見ヘ、上鳥羽辺へ押來趣ヲ、五番隊斥候ヨリ告ク、既ニ上鳥羽近ク進ムニ、敵方百人余甲冑・陣羽織ヲ着シ、鎗等ヲ携へ來、因テ味方大砲二挺ヲ押出シ、覗ヲ付ケテ、五番半隊ヲ大砲隊ノ左右へ分チ、又半隊ハ左ノ方、人家ノ裏ヨリ狙撃セントス、六番隊ハ右ノ方人家裏ヨリ狙撃セントス、五番・六番隊長・監軍隊長・御軍賦役等之ヲ議ス、而敵味方互ニ白眼合フ処、敵軍四人進來ル、椎原出テ応接ス、京師へ通行シ不苦哉ノ旨、

朝廷ニ御伺相成タルヤト問フ、答ルニ伺ニ至ル間、可否ノ儀ヲ追テ相通スヘク之ヲ達ス、於其儀ハ、先ツ兵ヲ返ス可クト、鳥羽ヲ過テ川向人家三十町位ノ処ニ兵隊ヲ引ク、程ナク亦兵隊ヲ押來、敵引取居ル逼、小銃隊兵ヲ伏ク^マスル利地有二付、味方押治、又街道モ小頭石神萬右衛門組大砲一挺、外ニ三挺、小頭大河平武

輔組大砲ハ、城南ノ宮ト云花表立居ル広馬場ニ備、其大砲脇ヨリ田ノ中へ竹藪アル所ニ、散隊ニテ狙撃ノ賦リ、又六番隊ハ左方河堤、竹藪中へ伏兵シテ敵ヲ待つ、然ニ七ツ時分又々、歩兵隊一大隊遙ニ向ヨリ、引続キ雲霞ノ如ク押来ルニ付、味方受持ノ大砲備へ、小銃ヲ携へ相扣ヘタリ、敵方一丁余ノ処迄押来ニ付、椎原外ニ五六人進出申演ルハ、此処 勅命ヲ蒙リ警衛ス、何分之 勅許無之中ハ、猥ニ通融不能ト云、敵答ニ、此節一橋命有テ上京ス、其先鋒隊ニ申付ニ付、 朝命同様ノ訳也、押テ通行ス可シト云、於其儀ハ是非ニ不及、相当之所置可致ト達シ、直ニ立帰り、発砲ス可キノ号令シ、大砲・小銃甚盛ニ攻撃セシニ、敵ノ先隊大ニ動揺ス、味方小銃・大砲繰打ニ透間ナク打掛、砲声寸隙モ不断、此ニ於砲煙空ヲ覆イ方角ヲ不弁、賊方モ手強ク発放ス、然レトモ答へ難ク、終ニ敗走ス、程ナク夜ニ入、警衛ノ為人家へ放火ス、而テ大砲二挺・火薬等管入附ノ尽、其外要具捨タル故、味方悉ク分捕ス、此夕ハ当地ノ固ヲ成ス、賊戦死ノ者街道ニアリ、又人家中へモ、余多戦死有ヲ其俣捨置タリ、且ツ初戦ノ節、大河平組大砲一挺車台破損ス、因テ分捕ノ大砲及彈薬

装シ方終テ、平方受持ノ分隊大砲ハ、街道へ二挺繰打ノ賦ニ出置ク、然ニ夜五ツ時分又敵寄来、大小銃発放ス、故ニ味方モ応シテ発放シ、然ニ大砲彈薬初三十發余発放ニ付、彈薬乏シク成リ、分捕ノ彈薬ニテ間ヲ合セ、戦ニ応ス、終ニ夜明前陣所ヨリ十二三間ノ処ニ人形見ヘタリ、故ニ大砲・小銃打掛ケルニ、逃去ル間モナク、又向ニ一人進来者アリ、賊ニ相違ナク故、捕ヘテ訳ヲ糺見ルニ、桑名藩大砲方ノ者也、即宰領ニ属シテ、二本松邸ニ遣ル、

四日未明、戦ノ場ニボードホワイツスル忽砲二挺・六封度一挺、火薬管等ヲ捨タリ、則之ヲ分捕スルニ、桑名ノ砲ナル由ヲ見ル、又賊敵三町余ノ人家ニ隠レ居、置ヲ以楯トナシ、烈シク大小砲ヲ打ツ、故ニ味方モ放發ス、大砲一挺ヨリ五六十發ニ及シニ、街道難処ヲ押行シニ、砲車二挺破却シ、残ニ挺ヲ以代替發放ス、然ニ下鳥羽村菊亭殿米困場前へ、米・大豆俵ヲ以、楯ヲ築キ、大小銃ヲ手繁ク打出ス故、味方大ニ難渋ス、大砲二挺ヲ右ノ方川原中へ押出シ、必死ニ成リ砲戦ニ及ヒシニ、終ニ賊敗走シ遁退ク、然ニ大砲二挺ハ破却シ、二挺ハ用立、或火薬庫等へ火入傷者モアリ、分捕ノ彈薬モ放盡シ、

今朝ヨリ此処迄ノ戦ニ、大砲一挺ヨリ五十発余モ打放チ、賊ハ未行先ニ楯籠リ、差掛大砲車等取繕ヒ調兼、小銃計ニテハ敵壘陥リ難ク、人家左右ヘ火ハ掛リ、然レドモ分隊ノ大砲一挺用立、烈火ノ中ヲ声ヲ掛ケ押通、下鳥羽村迄押行、賊壘ヘ大砲打掛ケシニ、敵方答兼敗走ス、夫ヨリ右大砲二丁余跡陣迄引上ケ、砲車修理、又ハ彈藥之運送方評議之折柄、伏見出陣ノ左半隊ノ大砲三挺、中原猶助押来中原カ一隊、前後ヨリ兵糧不來、翌朝モ不來、砲ヲ打來ル故、時刻大ニ延タリ、又ニ番大砲隊モ四挺ヲ押来、彈藥等十分ニ付、又々押立、横大路村迄押入シニ、淀手前ノ人家、富ノ森ト云ヘル処ニ賊籠、又人家ヘモ立隠居、大小銃發放ス、遊撃隊西千嘉組其外小銃隊余多狙撃シ、或大砲ニテ街道ヨリ繰打ス、因テ賊凌キ難ク遁レ去ル、敵方ヨリ人家ヘ放火シ、遁去ニ付、火藥等ノ掛念モアリ、已ニ夜ニ入ントシテ、先ツ隊ヲ横大路村ヘ引上ケ、一宿ス、今日ノ戦ニハ一里余ノ追討ニテ、賊方ノ戦死諸所過分ニテ、何拾人ト記シ難ク、又今夜中ハ戦争モ無之也、

五日早旦ヨリ出軍ニテ、兵ヲ配リ、山崎街道ヨリ二隊、鳥羽街道ヨリ二隊、大砲二隊其方諸方ヨリ小銃狙撃ヲ

以、富之森村賊ノ台場ヨリ砲戦ス、敵壘々ヲ重ネ、或四斗樽ニ砂ヲ入楯ト成シ、大小銃敵シク打出ス、敵モ必死ト見ヘタリ、暫時ノ程ハ味方難波ナカラ、大砲及輕臼砲・二十拇等ヲ以、烈シク発砲、各隊粉骨碎身シ攻打ケルニ、遂ニ一ノ台場ノ賊棄落サレ敗走ス、又ニ之台場ニ乗掛ルニ、是モ賊嚴シク發放ス、然レトモ味方必死ノ働キ、英々応ノ声ヲ挙ケ、遂ニ二之台場モ乗落シ、賊敗走ス、此戦之中、大砲隊ノ大砲破却シケルニ、当地ヘ四斤半砲二挺、彈藥等入箱共ニ打捨有ヲ分捕シ、直ニ当国ニ備フ、賊ノ死骸モ街道外人家ノ中ヘモ死失アル故、幾百人トモ其數不相知、大砲等死骸ノ上ニ立付、発砲セシモ有テ、珍敷次第也、終ニ淀橋向迄追落シケルニ、賊方手強ク、大小銃ヲ打出ニ付、味方モ大砲繰打ニテ発砲ス、因テ賊遂ニ淀城下町ヘ放火シ、橋ヘモ火ヲ掛遁去ニ付、押渡儀調カタク、賊ハ八幡又ハ橋本辺ヘ遁行タルト見ユ、之ニ因テ小銃隊ヲ残シ、大砲隊砲車修覆等、伏見ニテハ調兼、京都迄半隊ツ、交代シ、直ニ修覆ニ取掛ル、

右之通去ル三日ヨリ五日迄之間、戦争鳥羽街道ノ形行見及タル通申上候、

大砲隊小隊長之場

平 吉左衛門

三四 平吉左衛門御届書ノ写

一去ル三日、一橋・會・桑藩多人致致上京候段、相聞得候間、小銃隊・五番隊・六番隊并東寺宿陣ノ諸郷隊四小隊申談、鳥羽街道相固メ候様致承知、五ツ時分大砲四挺、二本松御屋敷ヨリ繰出、行軍ニテ東寺迄着陣イタシ、五番隊・六番隊等申談、手配イタシ、鳥羽街道ヲ押行候処、五ツ時分ニテモ候哉、最早見廻組ト相見得、上鳥羽手前江押来候段、五番隊斥候等ヨリ追々告来候付、上鳥羽手前迄致着陣候処、十二三間先江最早百人余モ相見へ、手鎗・甲冑・陣羽織等ニテ押来居候付、直様一先大砲二挺ヲ押向、覬迄モ付居候内ニ、五番隊半隊ハ大砲ノ左右江付……狙撃イタス賦、半隊ハ左ノ方人家裏手ヨリ横打、六番隊ハ右ノ方人家裏ヨリ狙撃ノ賦ニテ、手配モ五番隊・六番隊・監軍隊・御軍賦役(申)……談ノ上、右ノ通取究相成居候、互ニ暫クハ白眼合居候処、敵方ヨリ四人応接ニ參ル、椎原小彌太引合度申

出候間、小彌太引合候処、彼ノ方ヨリ京都マテ致通行候テ不苦候哉、否哉ト、

朝廷江御伺ニ相成居候哉ト尋掛候付、其通何置候段、小彌太返答イタシ候処、左様候ハ、右ノ趣相分リ次第、何分爲御知呉候様申出候、左候テ右之趣相分迄ハ、一往兵ヲ引取置候様可致旨、彼ノ方ヨリモ申出候間、其通可被成旨返答候、然処右上鳥羽手前ヨリ、先鳥羽打越、河向ノ人家有之候三十町余ノ処マテ引取候、又々右隊都テ押掛候処、敵方引取扣居候場所ヨリ二丁半計、此所ニ大砲居付候場所、且小銃隊伏兵ノ場所、宜敷処有之候間、右之処マテ押詰、街道筋江小頭石神萬右衛門組大砲一挺、外ニ三挺、小頭大迫新八郎組・小頭岩元平八郎組・大河平武輔組、大砲ハ城南宮ト云鳥井ノ立居候廣馬場街道筋ヨリ、横ニ通居候……右場所江居付置、五番隊ハ街道筋大砲隊ヨリ、田ノ中江竹藪有之候付、右ノ場所江散隊狙撃ノ賦、六番隊ハ左ノ方川土手竹藪江伏兵相待居候処、七ツ時分ニテモ候ハン、又々歩兵隊一大隊余遙……先ヨリ追々引続相見得居候処、一町余ノ処迄押来候付、椎原小彌太外五六人差越、当所ノ儀、

朝廷命ヲ蒙リ相固居候間、何分御沙汰無之内ハ、御通申儀ハ不相成ト申掛候処、彼ノ方ヨリハ、此節一橋上京ニ付、先鋒隊被申付候間、

朝命同様ノ訳ニテ、押テ罷通候段申出候、……左様候ハ、此方ニハ

朝命ヲ請罷在候、何レ無致方……合不及、是非此方モ随分相對可致旨申置候テ、被罷帰候様承候、此上ハ無致方場合ニ付、則拙者打方ノ号令イタシ候処及砲発、外小銃隊モ甚盛ニ砲撃イタシ候処、彼ノ先鋒隊動揺ノ形ニ候得共、何分此方小銃・大砲、繰打ニ無透間押詰々々打出ニ付、砲声モ寸隙モ無絶間、夫故煙立覆ヒ難相分、尤モ賊敵ヨリモ大小銃ヲ手強ク打放候得共、遂ニ散乱逃去候間、砲発等暫ク取止、右ノ場所マテ差越、最早夜入ニ付、為防禦此方ヨリ人家へ火ヲ掛候テ、又々壱町……踏込候処、敵大砲ニ挺火薬等箱入付ノ俣ニテ、其処諸……過分ニ捨置逃去候付、都テ分捕イタシ、最早扣居候場所……持越置、今夜ハ何レ当所等ニテ相固ル賦ニテ候、尤敵方戦死ノ者十二三人ハ、街道筋ニ有之候へトモ、人家ノ内へモ死骸モ余多有之由候得共、何分夜入、人家江火ヲ付居候、取調候儀不相調、夫ナリ

本ノ場所江扣居候、且亦初戦ニ味方大河平組、大砲壱丁相損候付、則分捕之大砲・玉薬等取仕立方イタシ置候、左候テ拙者請持ノ分隊大砲ハ、街道筋ニ挺丈繰打ノ賦ニテ屯置候、然処五ツ過時分ヨリ、又々敵方ヨリ大小銃ヲ打掛候付、此方ニモ大小砲放発イタシ懸居候、尤大：彈薬ハ初戦三十発余打出候処、余程乏敷候間、分取候玉薬ニテ、今夜ハ応居候、然処夜明前十二三間ノ所江……相見へ候付、大砲・小銃等打掛候処、是迄逃去候様子ニ相見へ……、然処間モナク、向ノ方ヨリ壱人、此方江参リ掛候者有之、……言カ葉ヲ懸候処、敵ニ無相違見受候間、生捕ノ上相糺候処、桑名藩大砲方ノ者ノヨシ申出候付、直様才領付ニテ、二本松御屋敷送越候、左候テ翌四日夜明候処、ポトト曰砲ニ挺并六封度一挺、火薬迄モ取揃、右場所へ打捨有之候付、マタく分捕イタシ相改候処、右ノ桑名藩ニ所持ノ筒ニテ、尤今朝ハ賊敵三町余モ先キ人家江隠居、疊等ヲ以テ楯ニ致シ、夥シク大小銃ヲ打出候付、此方ヨリモ大砲・小銃打込押詰候、尤最……大砲早カ壱挺ヨリ五六十発打放候上、街道ハ難場ヲ押行……、右ノ戦ノ内ニ、又々大砲二丁相損候付、残り二丁へ取掛リ、……砲撃押詰候処、

下鳥羽村菊亭殿御用米困場前へ………^{〔米九〕}大豆俵ヲ以テ楯

ヲ築、大小砲ヲ手繁ク打出候付、実ニ此方暫ク難戰ニテ候間、大砲二丁ヲ右手ノ方川原中江押出ス、必死ノ働ヲ以及砲戰候処、是亦敗走逃落候、然処最早大砲二丁ニ相成、外ニ二丁ハ相損、且此方火薬庫江火入、怪我人モ有之候、分捕玉葉連モ打尽シ、夫故弾薬等余程乏シク相成候、尤今朝ヨリ当所迄ノ間、大砲尅挺ヨリ^{五十九}………^{〔修九〕}發余モ打放候付、玉葉連送方ハ勿論、大砲損所………繕旁々致吟味候処、又々敵三町之先江楯籠、大砲等居………及砲戰、小銃計ニテ難討落見受候付、左右ノ人家………火掛居候ヘトモ、拙者請持ノ内、分隊ノ内尅挺丈ケ………ニテ、烈火真中ヲ漸ク押通り、下鳥羽村中………行打掛候処、遂ニ追落、夫ヨリ右大砲モ二丁余跡………一往引上、外大砲修覆旁、且弾薬モ運送方吟味致居候処ニ、同組ノ内伏見出張左半隊大砲三挺、中原猶助差引押来候、尤二番大砲隊モ四挺押来候処、玉葉等モ持越相成候付、為^マニ押立、横大路村マテ押入候処、淀手前ノ人………富之森ト申所江立隠レ、楯ヲ築居、且人家等ニ立隠、大小銃ヲ打出候付、遊撃隊西千嘉、其外小銃隊余多狙撃イタシ候付、右大砲ヲ以街道

筋ヨリ繰打ニイタシ候、………逃去、人家中程迄押入候ヘトモ、右人家江敵火ヲ掛………候付、暫時及砲戰候ヘトモ、何分夜入時分ニ相成、且人家ノ………火ニテ火薬等掛念ニ付、一往本ノ横大路村江繰上ケ及………候、尤今日中ノ戰ニハ、巷里余ノ追討ニ候間、戰死骸モ過分ノ事ニ候ヘトモ、取調候儀不相調、左候テ其夜ハ指テノ砲戰モ無之、翌五日早朝ヨリ手配ニテ、山崎街道ヨリ二隊、鳥羽街道ヨリ二隊并大砲隊二隊ノ外、諸方ヨリ小銃狙撃ヲ以、富之森敵ノ台場ヨリ及砲戰候処、中々手強ク、畳又ハ酒樽等江砂ヲ入、楯トイタシ、大小銃ヲ以夥ク打出シ、敵モ必死ト相見ヘ、実ニ暫時之程、難戰………申計勢ニテ候ヘトモ、此方モ大砲并臼砲二十拇ヲ以………各隊中粉骨碎身攻立候処、遂ニ一ノ台場………二ノ台場へ乗掛候処、是以前同様手強敵ヨリ打出、………ナカノ烈敷候ヘトモ、此方必死ノ働ヲ以、エイノ声ヲ掛攻立候処、遂ニ追落、………散乱イタシ、尤右戰………二番大砲隊大砲打損候由承候、当所江又々四斤大砲二丁、玉葉モ十分入付、打捨有之候付、分捕イタシ、尅丁ハ直様用立候、敵戰死十五六人ハ、街道筋ニ相見ヘ候ヘトモ、余ハ人家内等江有之候、死

骸其數不相分、何分大戦烈シク候故、敵死骸取調候儀不相調、敵ノ死骸ヲ踏越々々押詰候処、大砲壱丁拵：死骸ノ上ニ居付、打出候場所モ有之候テ、終ニ淀橋向迄追落シ候ヘトモ、又々手強ク大小銃ヲ打出シ候付、此方ヨリ……大砲繰打ニ敵シク攻立ラレ候処、淀城下町江火ヲ付、橋ヘモ同様火ヲ掛逃去候付、押渡候儀不相調候得共、敵方ノ者方々、八幡・橋本辺へ逃去候由、夫故外小銃杯残居候付、一往大砲隊二隊ハ、修覆方玉菓仕合トシテ、伏見迄引上候得共、何分大破ノ筒モ有之候付、京都マテ半隊宛交代、当分修覆最中ニ御座候、右ノ通辰正月三日ヨリ五日迄ノ戦争、鳥羽街道ノ成行見^{及之}申候間、此段申上候、以上、

大砲隊小隊長ノ場

平 吉左衛門

三五 私領二番鹿籠・知覽隊戦状届書

明治元年戊辰正月

去辰正月三日、私領二番隊ハ救應隊ニテ東寺へ在陣、同日為斥候、兩人鳥羽街道へ差出候処、同所小枝橋向

へ味方出、敵ハ三四町モ隔白眼合、砲声相聞得候由申出、速ニ兵隊繰出、暮時分鳥羽江差越候処、早一戦ハ相濟候付、同所へ相休居、同夜半時分、油小路ノ方ヨリ襲来候敵ト一戦、同四日未明ヨリ、横大路廣田之中ヲ押寄候敵ト、九ツ半時分迄戦争、又同日富之森辺ニテ敵人家ヲ楯ニ取、陸台場ヲ築、大小砲烈敷打立候付、敵兵ヲ開キ、稍半時位血戦仕候処、薩・長一小隊応援ニテ、敵ヲ追退申候、同五日早朝ヨリ、伏見淀堤攻撃御達相成、同処薩・長・因三藩合シ戦争、同六日早朝、八幡山下ノ敵ニ当リ、左半隊ハ同所廣田ノ中ヲ散開、薩・長五小队ニテ戦争、諸所へ放火、尚烈敷砲発イタシ候処、賊兵崩レ立、奈良街道之方へ逃去候付引揚申候、

三六 六番隊戦况届書

明治元年正月

六番隊戦况届書

一 正月三日早旦、御軍役局ヨリ官命有リ、六番隊長市來勅兵衛出テ命ヲ聞ク、鳥羽街道辺慶喜麾下及會津・桑名・高松等之賊兵甲冑ヲ帶シ、兵器ヲ携へ、登京之由

風聞アリ、早く守衛之隊中ヲ將ヒ、鳥羽街道ヲ守ル可シ、若シ押通ル勢イニ於ハ、時機ニ応シ所置ス可ク旨、勅命之趣ヲ承ル、則帰テ官命之趣ヲ、隊中一同ニ之ヲ達シ、兼テ定ノ場所ヘ、六番・五番隊及大砲隊、其外諸隊ヲ揃ヘ、上鳥羽ヘ至リ隊ヲ置ク、程無賊兵押來故、監軍椎原小彌太出テ、徳川先手ノ者ヘ応接ス、此時六番隊長指揮シテ、街道ヨリ右之方畠中ヘ散兵ス、然ニ敗兵次第ニ隊ヲ繰下ルニ付、此方ヨリ尚押進ミ、鳥羽ノ小坂橋ヲ渡リ、隊ヲ嚴重ニ置ク、狙撃隊ハ敵地ニ分ツテ、斥候ニ出ス、隊長及監軍野津七二・松田健四郎戦地ヲ巡見ス、城南宮前街道ヨリ西之方、味方ニ利アリ、敵ニ利有ラサルノ地ヲ撰ヒ、兵隊ヲ備フ、然ニ是処ヨリ南方ノ堤上ニ、突然トシテ賊兵一小隊計、散兵ニ出來リ、又隊ヲ閉チ、二列ト成リ、堤上ヲ此方ニ向キ押來ニ付、郷兵差引兒玉平藏・隊長市來勸兵衛出テ、何クノ藩兵ヲ問フ、徳川先手五百人ヲ預ル指揮役村某也、二條城ニ至ルト答フ、因テ通シ可賜ト云、我々ハ薩藩ニテ

勅命ヲ受ケ、此処之狼藉ヲ禁ス、狼ニ相通シ難シト云、賊云、我々共ニモ命ヲ受ケ、入京ノ者也、於其義ハ今

一往伺可賜ト云、即相窺可シ、

勅答迄占有ヘシト答、賊云、隙取ニ於テハ、押テ可通ト強情申ニ付、押テ通行有ニ於ハ、是非モ不及相当之所置ス可シト答、直ニ市來ハ我隊中ニ帰、左半隊ヲ川向ノ竹藪中ヘ伏セ置タリシニ、賊ハ街道ノ如ク帰ル、此時一番大砲隊・五番隊ハ、街道及城南宮辺ヘ隊ヲ置ト見タリ、然処七ツ半時分賊兵大隊ニテ、小銃ヲ先隊ニ備ヘ、大砲ヲ中軍トシ、街道ヨリ押來ル、五番隊監軍椎原小彌太指揮シテ、英々声ニテ勇ヲ振ヒ、銃声絶間ナク発放ス、時ニ河向ニ伏セ置シ六番ノ左半隊走続キ、堤ヨリ烈シク横ヲ打ツ、賊兵溜リ兼、備崩レ立、喇叭ヲ吹キ、隊ヲマトメタ刻敗走シ引退ク、因テ我隊中ヲ点檢スルニ、手負人等無シ、既ニ夜ニ入シ故、賊敗ノ追討叶難ク、各火薬ヲ装シ、一分隊ヲ堤上ニ置キ、本ノ通り戦兵ヲ陣營ニ引上ケ、兵糧ヲ食ス、是ヨリ今日戦争ノ趣ヲ、本宮役局ニ貴島卯太郎・江田次右衛門ヲ以申ス、亦狙撃隊ヲ斥候ニ出ス、賊敗戦ノ跡死骸ハ勿論、大砲其外要具夥シク捨置タリ、辰五ツ時分賊亦襲來故、即当隊始之地利ヘ押出シ、曉七ツ時分マテ少々ツ、砲戦ス、同刻過又賊街道ヲ押シ、大砲ヲ先鋒トシ大兵鋒

起ノ由、狙撃隊ヨリ注進ス、即諸隊へ相達シ、当隊ハ初ノ地利へ散隊埋伏ス、賊隊ノ間合ヲ計リ、正隊ヨリ大小銃蔽シク発放ス、又埋伏ノ兵出テ、横ヨリモ討ツ、賊モ是ニ応シ接戦ス、少ラク挑ミ、戦終ニ防キ難ク、賊軍敗走ス、既ニ東方明白トス、

一翌四日早旦ヨリ各隊繰出シ、街道ノ残賊ヲ追討シ、当隊ハ街道ヨリ右之方、加茂川ノ末ヲ渉ルニ、賊ハ菊亭殿米蔵前通河堤ニ米俵ヲ以、台場ノ如ク築キ、夫ヨリ大小砲手茂ク発放ス、当隊ハ畠中又ハ河原ヨリ散兵ニテ、透間ナク砲発ス、賊ハ築立シ台場ニ依ル故、小銃隊計ニテ破難ク、大砲隊へ応援ヲ乞フ故ニ、大砲二挺ヲ押来リ、小銃ト共ニ連発スルニ賊壘漸ク崩レテ、終ニ敗走ス、今朝六時過ヨリ四時迄ノ間、別テ苦戦シ、隊中点検スルニ、三番分隊兵野村清兵衛^(正次)死シ、山口新吉手負也、夫ヨリ引続キ横大路村マテ追討ス、此時郷兵^{伊集院、市来、村木、野}続キ来援兵ス、此村中ニ賊ノ死骸ハ勿論ニテ、大小砲其外要具捨タルヲ分捕ス、此時新軍十二番隊・三番隊・遊撃隊押来、是ト交代シ、救応援隊ト成リ、今夜村中ニ休戦ス、

一五日早旦、伏見本宮役局ニ衆会シ、今日残賊征伐之軍

議有テ、三番隊・二番大砲隊・六番隊・五番隊ハ、鳥羽街道出兵ニ決シ、隊々押出ス、然ニ賊兵間モナク押来、大小砲烈シク発放、右ノ方竹山ヨリ越矢ニ打出ス故ニ、六番左半隊、此山へ横ニ発放シ、三番・五番隊モ同発放ス、六番右半隊ハ街道ノ促進^マ行ク、然ニ賊兵富ノ森ト云ル処ニ置ヲ重ネ、或桶ニ砂ヲ入、台場ヲ成シ、砲発蔽シク防戦ス、依テ大砲隊大ニ苦戦ス、此時小銃隊押来、左右応援セシ故、六番大砲隊力ヲ得、勇氣十倍シ、英々声ニテ大砲隊モ十間位進出ツ、敵合ヒ纒二十五間位也、此時六番隊長市來勸兵衛、砲二中ツテ死ス、二番分隊長前谷宗智^(雅則)モ戦没ス、其外手負一^(正次)番分隊戦兵濱田部左衛門・伍長徳尾源七郎・平田喜右衛門、二番分隊日高郷左衛門・端山彦左衛門、狙撃隊長野仲之丞・有馬清一等七人也、味方一同勇氣尚屈^(マコ)死狂ト成リ、益進ンテ攻撃ス、賊兵刀或鎗ヲ携へ、屢突入来ヲ、味方破竹ノ勢イソ成シ、打伏セラレ遁レ去ル、終ニ賊ノ台場ヲ乗取リ、此処ニ會津藩鈴木某ト云ヘル者ノ由ニテ、死骸アリ、是ハ指揮役ト見へ、采配ヲ持、或日ノ丸ノ旗ヲ携ヘタリ、其外死骸ハ勿論、大小銃要具等打捨數フ不可、此戦ハ至極ノ難戦ニテ、淀

川涯マテ追討セシニ、賊淀ノ小橋ヲ涉リ、市中ニ楯籠リ、烈シク発放ス、六番右半隊ハ小橋ヨリ北ノ方、河堤ハ散兵シ、暫時発放ス、此時ニ番隊宇宿彦之丞敵ニ出合、戦テ疵ヲ受、又六番隊左半隊ハ、竹山ノ賊ニ向ヒ、散兵ニテ発放シ、賊ノ銃丸飛来方ヘ進ミ掛ルニ、賊ハ不見レトモ、銃砲ハ打掛ル、味方モ精々発放ス、然処小頭見習貴島卯太郎斥候ニ出、賊ニ出合戦テ疵ヲ受ク、夫ヨリ味方尚亦三番・五番隊半隊ツ、憎キ働キニ、賊兵溜リ兼終ニ敗走ス、此ニ於テ六番左半隊ハ川船ニ乗り、向ノ地ニ涉リ、鳥羽ノ作道ヲ押通り、竹林ノ中ヲ探索シ、淀川マテ追討シ、右半隊ト一隊ト成

三七 山城伏見之戦参考書慶應四年正月三日

参 考 書 各 種

- 一番大砲隊半座中原猶介書付(四節六枚) 余
- 全上奈良原児玉届書(一節二枚)
- 臼砲隊差引監軍届書(三節二枚)
- 臼砲隊届書(二節)
- 〔米〕一番隊届 取調ヲ要ス
- 二番隊中届書(二節二枚)

部 分	各種番号
伏見	一
同	二
同	三
同	三
同	五

リ、先ツ兵糧ヲ食ス時、軍役局ヨリ命アリ、六番・五番隊ハ昼夜ノ戦争ニ勞タル可シ、其上此処迄追退ケル上ハ、浪花城攻撃有ラン、此城ハ要城故手配ヲ更エ廟算ヲ尽シ、追テ攻撃有ラン、先兵ヲ引上ヘシト指揮アリ、時ニ六番隊ヨリ言上ス、当隊ハ隊長等戦死シ、隊中各憤然タリ、賊徒討亡ス迄ハ先鋒仕度、頻ニ嘆願シ、本宮役局ハ凱陣ヲ言上シ、勝鬨ヲ揚、銘々陣屋ヘ帰軍ス、

鳥羽街道戦ノ始末、右之通御座候、

辰正月

六番隊中言上

三八 鳥羽口戰記

明治元年正月三日、徳川・會津・桑名・高松・大垣等諸藩兵、上洛ノ聞アルニ仍リ、一番大砲隊半隊・五番小銃隊・六番小銃隊、東寺宿陣ノ外城一番・二番・三番隊三小隊、私領二番隊ト俱ニ警備ヲ命セラル、仍テ諸隊東寺ニ会シテ、部署ヲ整へ、五番・六番小銃隊、大砲半隊、外城二番隊ハ、鳥羽街道ヲ進軍シ、外城一番隊・同三番隊ハ東寺後四塚青山ヲ堅メシメ、私領二番隊ハ救応ノ為メ東寺ニ屯在ス、丑刻^{チニ時}乃ニ至リ、徳川見廻組ノ一隊進ミ来レルヲ斥報セリ、上鳥羽ニ近ツクニ、既ニ數百人ノ一隊、兵器ヲ携ヘテ来レルヲ認ム、仍テ先ツ部署ヲ定メリ、

街道中央大砲一番隊右半隊大砲二門

小隊長 平 吉左衛門

街道左右小銃五番隊半隊

隊長 野津七左衛門

左側人家裏同隊半隊

右側民家裏同六番隊一小隊

隊長 市來勸兵衛

〔頭註〕二番隊・外城二番隊土持雄四郎・三番隊・兵具隊・私領二番

〔面隊二分属配置ス、外城二番隊

隊長 土持雄四郎

部署ヲ定メ、暫ク白眼合タリシニ、彼ヨリ四人応接ノ為メ隊列ニ来リ、五番隊監軍椎原小彌太ニ面談ヲ要ム、椎原面会セシニ、彼通行ノ可否、朝廷ニ伺ハレシ哉否ヤヲ問フ、我然リト答フルニ、彼曰ク、然ラバ許否ノ命アル迄、兵ヲ退ケ相待ツベシト云テ、三町余立戻レリ、我隊ハ彼ノ兵ヲ退クルニ乗シ、小枝橋ヲ渡リ、川向迄進ミ、城南宮鳥居前ニ至ル、彼我ノ間二町半ニ過キス、外城三番隊ハ先隊ノ危勢ヲ察シ、堅ヲ解テ之ニ加ハル、茲ニ部署ヲ定メタリ、

鳥羽街道城南宮前ヨリ
同橋道ニ互リテ備フ

大砲四門

同右横田中竹藪中ニ配置、外城二番隊・五番小銃隊

同左川堤竹藪中ニ配置、六番隊

橋涯及ヒ川上ノ間道竹藪中ニ配置、外城三番隊

外城一番隊モ又堅ヲ去テ、塩小路ヨリ竹田方面ニ備フ、申刻^{七ツ時}乃ニ至リ、步兵一大隊小銃ヲ先鋒、大砲ヲ中

軍トシテ漸次進ミ来ルニ由リ、大小砲装薬用意ヲ為シ、約一丁余ノ距離ニ近クヲ以テ、椎原小彌太ハ五六人ノ

同列ヲ卒ヒ進出テ、当所ハ 朝命ヲ蒙リ、警守スルニ
 仍リ、 朝命ナキ内ハ通行ヲ許サレスト申述ヘタリシ
 ニ、彼ヨリ此節一橋上京ノ 朝命アルニヨリ、先鋒ヲ
 命セラレタルヲ以テ、 朝命同様ノ心得ヲ以テ押テ通
 行スベシト、我又曰ク、我等モ 朝命ヲ奉シタルニ仍
 リ、押テ通行アレバ、無止臨時ノ処置ニ及フベシト言
 放チテ立分レ、大砲発射ノ号令ヲ伝ヘ、同時ニ激シク
 砲撃シタリ、敵不意ニ動乱セシモ、漸次隊列ヲ整ヘ、
 大小砲ヲ乱発シテ応戦セリ、酉半刻乃チ七半時ニ及ヒ、敵
 終ニ退散セリ、味方兵ヲ進メテ、敵ノ正面左右ヲ攻撃
 セシニ、其根拠ヲ略シ、火ヲ民家ニ放チ、大砲火薬等
 ノ諸品ヲ分捕シタリ、後兵ヲ小枝橋涯ニ回シテ、屯集
 セリ、夜中敵襲来レトモ互ニ応戦スルノミ、夜戌ノ刻
五ツ時乃チ八字 油小路ヨリ竹田方面ニ襲ヒ来リ、大小砲ヲ発シ
 逼ル、外城一番隊・私領二番隊・外城三番隊ノ半隊応
 戦セリ、敵又退去ル、此日数時ノ戦鬪死傷ノ数ヲ載ス、

小銃六番隊

戦死

戦兵

肥後嘉二(盛徳)

外城二番隊

負傷

(三人)

私領二番隊

二行空目

一番大砲隊

負傷 戦兵

松元直之丞

負傷 戦兵

坂元彦兵衛

同 同

川上孫七

同 集成館人足

喜兵衛

讚良清蔵下人
火傷即死

太 郎

三九 竹田街道戦記

明治元年正月三日、兵具隊竹田街道ニテ敵ニ出会、砲戦
 セリ、

(記) 三日子刻九ツ時乃チ十二字、兵具隊ノ一分隊狙撃トシ、二本

松野ヲ出テ、鳥羽口ノ砲戦激シキヲ聞キ、鳥羽ニ向フ

ノ際、伏見駅ヨリ四丁計ノ一村(竹田村)ヨリ間道ヲ

通スル際、敵暗中ニ伏シテ、隊員ヲ傷ツク、故ニ砲戦

セシモ、暫クシテ引退セリ、此ノ戦鬪傷者一人アリ、

左ニ載ス、

負傷 斥候篠崎勘七

四〇 山城鳥羽・竹田街道之戰參考書

慶應四年正月三日

參 考 書 各 種

- 大砲隊鳥羽口賊徒征討之始末（一節三枚半余）
- 五番隊届（一節一枚）
- 六番隊鳥羽口賊徒征伐之次第（一節三枚）
- 外城一番隊申状（一節）
- 外城二番隊戰状（一節）
- 外城三番隊監軍届（一節二枚）
- 兵具隊竹田街道夜戰川路正之進戰状（一節）
- 私領二番隊監軍届（一節）
- 各地手負戰死者
- 黒田嘉右衛門書翰（一節二枚半）
- 某氏通信書（一節五枚）
- 同上（一節）
- 土持左平太書翰（一節一枚半）
- 野津七二土橋氏へ送ル書翰（一節）
- 六番隊隊長及監軍二人ヨリ戰死者遺族へ報告文（一節三枚）
- 加世田士有馬次郎兵衛外三人届書（一節）

部 分	種 類	種 番 号
鳥 羽	一	一
同	二	二
同	三	三
同	四	四
同	五	五
同	六	六
同	七	七
同	八	八
甲号戰没名簿	十三	十三
伏 見	六	六
鳥 羽	一	一
同	二	二
同	三	三
同	四	四
同	五	五
同	十	十

同 監軍山之内 一郎報告文 (一節)

肝付郷右衛門園田氏へ送ル書 (一節)

一番大砲隊岩城彦四郎贈家戰狀 (一節三枚)

川上孫五郎戰爭ノ次第 (一節)

肝付郷右衛門宿元狀 (一節)

加世田士指宿佳左衛門贈家書 (一節三枚)

野津七左衛門贈家書 (一節)

加世田緒方諸右衛門書翰 (一節二枚余)

尾上門次郎宿元狀 (一節二枚余)

加世田緒方伊作一隊監軍山内一郎寄贈家戰狀 (一節)

高崎左京覚書 (一節)

諸氏覚書日記

明治元年正月四日、賊伏見町京橋口ヲ始め、諸口ヲ襲フ、
官軍討テ之ヲ破ル、

(記)

四日早天、會津・高松・忍諸藩ノ賊兵京橋口ヲ始め、
諸口ニ襲ヒ来ル、藩兵左ノ部署ヲ定メテ、之ニ当ル、

二番小銃隊

三番小銃隊

安房橋口

京橋口

毛利橋口

蓬萊橋口

賊又棄ヲ今官橋堤ニ築キ砲戰シ、火ヲ道傍ノ民家ニ放ツ、
遂ニ之ヲ破ル、賊下鳥羽ヲ指シテ走ル、藩兵之ヲ追フ、

二番遊撃隊

白砲隊

毛利橋口

四番小銃隊

安房橋口

四一 山城伏見之戰參考書慶應四年正月四日

同	伏見	同
鳥羽	一	三
同	二	七
同	三	
同	四	
同	五	
同	六	
同	八	
同	七	

参 考 書 各 種

- 一番隊大砲隊中原猶介書付(三節)
- 二番隊中届書(一節)
- 同監軍届書
- 三番隊戰狀(一節)
- 同隊監軍届
- 四番隊監軍届
- 白砲隊届書(二節)
- 二番遊撃隊大迫嘉右衛門届
- 外城四番隊出水阿久根届書(一節)
- 各所手負戰死人名
- 黒田嘉右衛門書翰(一節)二枚半
- 二階堂八兵衛送家狀(一節)
- 市来矢之助宿元狀(一節)
- 新納嘉藤二宿元狀(一節)
- 林宗九郎贈家書(一節)
- 高崎左京覚書(一節)
- 平田九十郎日記(一節)

島津家国事鞅掌史料附録

伏見口戦記

部 分	各 種 番 号
伏見	一
同	五
同	六
同	七
同	八
同	九
同	三
同	十二
同	十
甲号戦没名簿	十三
伏見	六
同	一
同	四
伏見	五
同	六

明治元年正月三日、藩兵長・土商藩兵ト俱ニ、旧幕兵ヲ
伏見駅ニ討テ之ヲ破ル、

(記)

旧臘ヨリ旧幕兵上洛ノ風聞ヲ伝へ、事態不穩ナルヲ

以テ、慶應三年丁卯十二月晦日、藩兵大砲半隊・銃兵二

小隊・諸郷隊一小隊ヲ派遣シテ、伏見駅内奉行所後ロ

御香院宮辺ニ屯營、警備セシメタリ、同時ニ長・土両

藩兵若干隊モ、又同所ニ警戒シタリ、然ルニ奉行所ニ

ハ、惣督小笠原石見守・伝習奇兵二大隊・新撰組二百

余人・會津藩兵若干人屯營シ、互ニ擬勢ヲ張レリ、

越テ二日夜戌刻五ツ時乃チ八字ニ至リ、會津藩兵歩兵隊、高松

藩讚・鳥羽志摩藩兵等、水陸伏見ニ入ル、是ニ於テ藩兵

各々戦備ヲ修メテ警戒セリ、

時ニ藩兵指引(頭註)一川上式部久美ノコトカ島津式部軍賦役・監軍等ト議シ、更ニ

長・土両藩兵ニ謀リ、三藩各兵一隊ヲ率ヒ、會津藩兵ノ

屯所御香院宮通料理店魚茂(号)ニ赴ケリ、藩ヨリハ淵

邊直右衛門・有馬藤太(諸郷兵)純諸郷兵一隊ヲ率ヒタリ、

三藩士ハ會津藩士ニ面シ、三藩ハ 朝廷ヨリ警備ノ命

ヲ奉シ、之ヲ守衛セリ、且會・桑兩藩ハ、 朝命ヲ以

テ帰国ヲ達セラレタルニ拘ラス、火急ニ兵器ヲ携へ、

多勢上洛アルハ其意ヲ得サルヲ詰難シタリシニ、會藩

士ハ徳川内府喜慶 朝廷ノ召ニ応シ、明三日上洛アルニ

由リ、其先駈ナリト応ヘヌ、我又曰ク、内府 朝廷ノ

命アリトスルモ、三藩モ又 朝命アリテ、内府ノ上洛

ヲ達セラレサルヲ以テ、速カニ人ヲ京都ニ奔セ、

朝命ヲ請ハントス、其命ヲ承クル迄、兵ヲ淀辺へ退ケ

テ、達命ヲ待タルベシト、彼応フルニ、徳川家ノ重職

出張シ在ルヲ以テ、尚議スル所アリテ、答フルナルベ

シト、茲ニ於テ三藩士ハ後答ヲ約シテ、屯營ニ帰り、

淵邊直右衛門ヲシテ、馬ヲ驅リ京ニ至リ、命ヲ請ハシ

メ、尚彼命ヲ俟タスシテ犯ストキハ、兵力ヲ以テ防禦

スベシト決シ、其準備ニ着手セリ、

三日昼子刻九ツ時乃チ十二字援隊トシテ、三番・四番小銃隊二隊

曰砲一隊來着シタルニ由リ、更ニ部署ヲ定メタリ、

一番大砲隊半隊四斤半施条砲三挺

御香宮通 差引 中原 猪助 半隊長 飯牟禮喜之介

一番小銃隊 一小隊

宇治見台ノ下 隊長 鈴木武五郎

二番小銃隊 一小隊

京町通 兩替町通 隊長代 邊見十郎太

三番小銃隊 一小隊

大午筋新町通 隊長 篠原冬一郎(因)

四番小銃隊

一小隊

奉行所東向裏通

隊長

川村與十郎(義純)

豊後橋筋

一隊大砲三挺

白砲二挺

御香院宮下角

隊長

成田正右衛門

諸郷四番隊

一小隊

御香宮下新町通
桃山下川畑豊後

監軍

有馬藤太(純)

橋涯西雲寺下

隊長

中村源助

其他諸口ハ、長・土兩藩兵之ヲ守備シタリ、

此日徳川勢絶ヘス奉行所ニ繰込ミ、淀川筋ハ豊後橋涯

ヨリ伏見出口辺迄布列シテ、勢威ヲ張レリ、

同日申刻七ツ時乃
チ四字ニ至ルモ、彼答フル所ナシ、仍テ更ニ

人ヲ遣シテ之ヲ促セシニ、未タ議了ラス、追テ答フル

所アルベシトテ之ヲ遣リ、尋テ使ヲシテ歩兵奉行竹中

丹後守ノ書ヲ持セシメタリ、

我書ヲ得テ、中原助・坂元廉四郎
軍殿後・有馬藤太ト議シ、長藩

兵指揮林半七(幸友)ト談シ、更ニ左ノ書ヲ裁シテ送ラシ

メタリ、

四二 中原猶介覚書

一正月四日朝、又々賊徒京橋下辺迄追々攻登候段、相聞

候間、猶又彈薬口合セ等取急キ候得共、昨夜数刻ノ戰

争、砲車モ少々相損候間、分捕ノ砲車ト諸所取替杯致

シ、漸ク五ツ時分ヨリ、大砲三門押出候処、京橋下ノ

敵ハ早追々相退、毛利橋向フ辺ニテ、二番隊并長・土ノ

勢・高松勢ニ懸合セ、挑ミ戰候段承リ、大山彌助・西

千嘉隊一同右場所へ押出候処、一筋道ノ左右人家へ火

相懸リ、味方込ミ合難進行候付、右兩人申談、敵ノ右

手下鳥羽ノ方へ押行候処、田路狭道、大砲難押行不得

止事、竹田街道ヨリ下鳥羽道へ廻リ相進候処、敵追々

逃走候ニ付、跡ヲ慕フテ追懸參ル所、鳥羽街道堤筋ニ

テ、昨日ヨリ鳥羽街道へ向ヒ候同隊ノ右半隊小隊長、

平吉左衛門致指揮、押来候ニ相会シ、一隊ニ相成、猶

又追進ミ候処、賊富ノ森人家ニ抛リ、疊類ニテ台場ヲ

拵へ、相支候間、諸隊ト共ニ追落シ、村廻レ迄相進候

へ共、人家ニ火相懸リ居難進行、殊ニ日既ニ西山ニ傾

キ、敵地ノ形勢不相分候間、田代宗次郎等申談、諸兵

隊横大路村迄引揚ケ、村入口へ大砲等相備へ置、当夜

ハ同所へ致宿陣候、